井原遺跡群

井原地区周辺の古墳群

井原地区県営ほ場整備事業に伴う文化財調査の成果

前原市文化財調査報告書

第51集

正恵古墳群（御所支群）
正恵古墳群（4 号 墳）
正恵古墳群（南田古墳）
井原作出遺跡
西堂四反田遺跡
付編
西堂古賀崎古墳

1994

前原市教育委員会

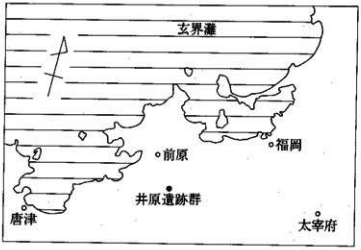
井原遺跡群

井原地区周辺の古墳群

井原地区県営ほ場整備事業に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書

第51集



1994

前原市教育委員会

序

私たちが住む前原市を中心とした糸島地方は、古代史を研究するうえで貴重な遺跡が数多く発見され、わが国でも有数の遺跡の密集地帯として知られています。

古代、この地はわが国と中国、朝鮮半島との対外交渉の一大拠点として大いに栄えていたことが中国の史書に記されています。それを裏付けるように多数の銅鏡をはじめとして大陸からもたらされた様々な遺物が、市内のいたるところで発見されています。いわば、古代の栄華を語る歴史の街と言えます。

一方、福岡市の西のベッドタウンとして近年急速な都市化が進み、未来へむけて新たなステップを踏み出した若々しい街でもあります。

街の発展に伴い地域産業構造も大きく様変わりを見せ、農業分野においても就労人口の減少などの余波を受けて大規模集約農業への脱皮を図り、特に農地の改良を主眼とした県営ほ場整備事業が積極的に推進されました。そのため古代糸島の中心地であった三雲・井原遺跡群が眠る水田地帯も、ここ10数年のあいだに、その景色を変えていきました。

井原地区の県営ほ場整備が施工されるにあたっては、関係各位のご理解を得ながら極力遺跡の保存に努めてまいりましたが、施工上止むをえずその一部を調査による記録保存に変えざるを得ない箇所もあり、発掘調査を行なってきた次第です。

本書は調査によって得た多くの成果のなかから井原地区南部の山裾部付近で行なった古墳の発掘調査結果を収めたものです。ささやかな報告ではありますが、本書が糸島における古墳文化の理解、引いては文化財の研究、保護の進展にお役にたてれば幸いです。

平成６年３月31日

前原市教育委員会
教育長　樗木昭生

例　　言

1．　本書は井原地区県営ほ場整備事業の実施に伴って行なった埋蔵文化財発掘調査事業の記録である。本書では古墳遺構の調査成果を中心に報告するものである。

2．　発掘調査は昭和56年度から前原市教育委員会が国・県補助事業として実施した。
　なお前原市教育委員会は前原町が平成４年10月１日をもって市制を施行したのに伴い前原町教育委員会から移行したものである。

3．　遺構実測図、写真は林　覚、岡部裕俊、角浩行が作成、撮影した。現場空中写真撮影には（有）空中写真企画の機材を使用した。

4．　遺物実測図は林、岡部の他に末松伸子、島影やよい、川上辰子が作成し、拓本は高橋久枝が作成した。また遺物写真は岡紀久夫が撮影した。なお、西堂古賀崎古墳墳丘測量図及び、出土遺物実測図の一部は糸島古文化学会（会長諸岡利寛氏）の作成による。

5．　本書に使用した図面の製図は主に岡部による。

6．　本書に掲載した資料は一括して前原市教育委員会が保管している。

7．　本書の執筆分担は以下のとおりである。
　第２章２．４．５．　林　覚
　その他　　岡部裕俊

8．　本書の編集は野田純子の協力を得て岡部が行なった。

本文目次

第１章　はじめに……1
　１．井原地区県営ほ場整備事業の実施に伴う文化財保護……1
　２．調査の組織……2
第２章　調査の記録……2
　１．怡土平野周辺の古墳……2
　２．正恵古墳群（御所支群）……6
　　(1)立地……6
　　(2)正恵５号墳……8
　　(3)正恵６号墳……14
　　(4)小結……16
　３．正恵古墳群（４号墳）……17
　４．正恵古墳群（南田古墳）……21
　５．井原作出遺跡……28
　６．西堂四反田遺跡……33
　　(1)調査地点の概要……33
　　(2)１号墳……35
　　(3)２号墳……57
　　(4)竪穴住居……59
　　(5)カマド状遺構……63
　　(6)土壙……63
　　(7)小結……66
付編　西堂古賀崎古墳……69

挿図目次

第１図　本林崎古墳墳丘測量図（１／800）……2
第２図　井原地区県営ほ場整備事業の施工範囲と周辺の主要遺跡（１／20,000）……3
第３図　井原地区南部のほ場整備後の地形と発掘調査地点（１／5,000）……5
第４図　正恵古墳群御所支群調査後墳丘測量図（１／200）……6
第５図　正恵５号墳調査後墳丘測量図（１／100）……7
第６図　正恵５号墳葺石・土器出土状況および南周溝土層断面図（１／40）……8
第７図　正恵５号墳主体部実測図（１／40）……9
第８図　正恵５号墳出土土器実測図（１／４）……10
第９図　正恵５号墳主体部出土鉄器実測図（１／２）……11
第10図　正恵６号墳調査後墳丘測量図（１／100）……12
第11図　正恵６号墳墳丘南西部葺石、土器出土状況および周溝土層断面図（１／40）……13
第12図　正恵６号墳主体部実測図（１／30）……13
第13図　正恵６号墳出土土器実測図（１／４）……15
第14図　正恵６号墳主体部出土鉄剣実測図（１／３）……16
第15図　正恵４号墳調査後墳丘測量図（１／100）……17
第16図　正恵４号墳葺石の遺存状況と南側土層断面図（１／50）……18
第17図　正恵４号墳主体部実測図（１／40）……19
第18図　正恵４号墳南周溝崩落土出土高杯実測図（１／３）……20
第19図　正恵４号墳南周溝崩落土出土青磁椀実測図（１／３）……20
第20図　南田古墳周辺の新旧地割り（１／2,000）……21
第21図　南田古墳トレンチ設定状況と墳丘規模推定図（１／125）……22
第22図　南田古墳第４トレンチ周溝土層断面図（１／20）……23
第23図　南田古墳石室実測図（１／40）……23
第24図　南田古墳石室出土遺物実測図（１／２、１／３）……24
第25図　南田古墳周溝出土須恵器実測図（１／３）……26
第26図　井原作出遺跡調査地点周辺の新旧地割り（１／2,000）……28
第27図　井原作出遺跡遺構配置図（１／150）……29
第28図　井原作出古墳周溝供献土器実測図（１／４）……30
第29図　井原作出古墳周溝出土土器実測図（１／４）……31
第30図　西堂四反田遺跡周辺新旧地割りと調査地点（１／2,000）……33
第31図　西堂四反田遺跡遺構配置図（１／250）……34
第32図　西堂四反田１号墳墳丘平面及び東西土層断面図（１／200）……36
第33図　西堂四反田１号墳石室実測図（１／60）……37

第34図　西堂四反田１号墳石室遺物出土位置図（１／30）……38
第35図　西堂四反田１号墳石室出土須恵器実測図（１／３）……39
第36図　西堂四反田１号墳出土鉄器実測図①（１／４）……40
第37図　西堂四反田１号墳出土鉄器実測図②（１／２）……41
第38図　西堂四反田１号墳出土鉄器実測図③（１／２）……42
第39図　西堂四反田１号墳出土鉄器実測図④（１／２）……43
第40図　西堂四反田１号墳墳丘土器群実測図（１／30）……44
第41図　西堂四反田１号墳墳丘土器群出土土器実測図（１／３）……45
第42図　西堂四反田１号墳周辺の土器出土傾向……46
第43図　西堂四反田１号墳周溝出土土器実測図①（１／３）……47
第44図　西堂四反田１号墳周溝出土土器実測図②（１／３）……48
第45図　西堂四反田１号墳周溝出土土器実測図③（１／４）……49
第46図　西堂四反田１号墳周溝出土土器実測図④（１／４）……50
第47図　西堂四反田１号墳周溝出土土器実測図⑤（１／４）……51
第48図　西堂四反田１号墳周溝出土土器実測図⑥（１／４）……52
第49図　西堂四反田１号墳周溝出土土器実測図⑦（１／３）……53
第50図　西堂四反田２号墳調査後墳丘測量図（１／100）……57
第51図　西堂四反田２号墳石室実測図（１／30）……58
第52図　西堂四反田２号墳石室出土鉄器実測図（１／２、１／４）……58
第53図　西堂四反田遺跡１、２号住居実測図（１／60）……59
第54図　西堂四反田遺跡２号住居カマド実測図（１／30）……60
第55図　西堂四反田遺跡２号住居出土土器実測図①（１／３）……61
第56図　西堂四反田遺跡２号住居出土土器実測図②（１／４）……62
第57図　カマド状遺構実測図（１／30）……63
第58図　西堂四反田遺跡２区遺構配置図（１／100）……64
第59図　西堂四反田遺跡２区１号土壙実測図（１／30）……65
第60図　西堂四反田遺跡２区１号土壙出土馬具実測図（１／２）……65
第61図　西堂四反田遺跡２、３区出土土器実測図（１／３）……67
第63図　長畝山１、２号墳墳丘測量図（１／600）……68
第64図　西堂古賀崎古墳位置図（１／5,000）……70
第65図　西堂古賀崎古墳周辺地形測量図（１／200）……75
第66図　西堂古賀崎古墳出土単龍環頭大刀実測図（１／２、１／３）……77
第67図　西堂古賀崎古墳出土大刀実測図（１／４、１／２）……78
第68図　西堂古賀崎古墳出土鉄鏃実測図①（１／２）……79
第69図　西堂古賀崎古墳出土鉄鏃実測図②（１／２）……80
第70図　西堂古賀崎古墳出土鉄鏃実測図③（１／２）……81
第71図　西堂古賀崎古墳出土鉄鏃実測図④（１／２）……82
第72図　西堂古賀崎古墳出土鉄鏃実測図⑤（１／２）……83

第73図　西堂古賀崎古墳出土故籙金具実測図（1／2）……83
第74図　西堂古賀崎古墳出土馬具実測図①（1／3）……85
第75図　西堂古賀崎古墳出土馬具実測図②（1／2、1／3）……86
第76図　西堂古賀崎古墳出土馬具実測図③（1／2）……87
第77図　西堂古賀崎古墳出土農工具実測図（1／2）……88
第78図　西堂古賀崎古墳出土装身具実測図（2／3）……90
第79図　西堂古賀崎古墳出土土器実測図①（1／4）……92
第80図　西堂古賀崎古墳出土土器実測図②（1／4）……93
第81図　西堂古賀崎古墳出土土器実測図③（1／4）……94

図版目次

図版1　井原地区南部のほ場整備前の地形（1／5,000）
図版2－a　正恵5、6号墳調査地点全景
－b　正恵5号墳南半部
図版3－a　正恵5号墳主体部
－b　正恵5号墳南部葺石、土器検出状況
図版4－a　正恵5号墳南周溝土層断面
－b　正恵6号墳全景
図版5－a　正恵6号墳主体部
－b　正恵6号墳周溝土器出土状況
図版6　正恵5号墳出土遺物
図版7　正恵6号墳出土遺物
図版8－a　正恵4号墳発掘調査前現況
－b　正恵4号墳南部墳裾検出状況
図版9－a　正恵4号墳南部土層
－b　正恵4号墳南西トレンチ葺石検出状況
図版10－a　正恵4号墳箱式石棺蓋石
－b　正恵4号墳箱式石棺開蓋後
図版11－a　正恵4号墳調査終了状況
－b　正恵4号墳出土遺物
図版12－a　南田古墳横穴式石室
－b　南田古墳横口部
図版13－a　南田古墳屍床部鉄剣出土状況
－b　南田古墳南部集石遺構
図版14－a　南田古墳出土勾玉、鉄器
－b　南田古墳出土須恵器
図版15－a　井原作出遺跡調査地点全景
－b　井原作出古墳西周溝近景
図版16　井原作出古墳周溝出土土器①
図版17　井原作出古墳周溝出土土器②
図版18　西堂四反田遺跡全景
図版19－a　西堂四反田1号墳近景（上から）
－b　西堂四反田1号墳近景（南西から）
図版20－a　西堂四反田1号墳石室（上から）

－b　西堂四反田１号墳石室（北から）
図版21－a　西堂四反田１号墳石室東南隅壁
－b　同　上　東側壁
図版22－a　西堂四反田１号墳石室屍床
－b　西堂四反田１号墳石室鉄刀出土状況
図版23－a　西堂四反田１号墳墳丘土器群Ａ
－b　西堂四反田１号墳周溝土器出土状況
図版24　西堂四反田１号墳出土鉄器①
図版25　西堂四反田１号墳出土鉄器②
図版26　西堂四反田１号墳出土土器①
図版27　西堂四反田１号墳出土土器②
図版28　西堂四反田１号墳出土土器③
図版29　西堂四反田１号墳、２号住居出土土器
図版30－a　西堂四反田２号墳全景
－b　西堂四反田２号墳石室（西から）
図版31　西堂四反田２号墳出土鉄器
図版32－a　西堂四反田遺跡１、２号住居（上から）
－b　西堂四反田遺跡１、２号住居（北から）
図版33－a　西堂四反田遺跡２号住居カマド
－b　同　上　煙道半截状況
図版34－a　西堂四反田遺跡２区全景（上から）
－b　西堂四反田遺跡２区１号土壙
図版35－a　西堂四反田遺跡２区出土遺物
－b　西堂古賀崎古墳出土馬具④
図版36－a　西堂古賀崎古墳全景
－b　同　上
図版37－a　西堂古賀崎古墳石室
－b　同　上
図版38　西堂古賀崎古墳出土単龍環頭大刀
図版39　西堂古賀崎古墳出土大刀、故篠金具
図版40　西堂古賀崎古墳出土鉄鏃
図版41　西堂古賀崎古墳出土馬具①
図版42　西堂古賀崎古墳出土馬具②、③
図版43　西堂古賀崎古墳出土装身具
図版44　西堂古賀崎古墳出土土器①、②
図版45　西堂古賀崎古墳出土土器③

第１章　はじめに

１．井原地区県営ほ場整備事業の実施に伴う文化財保護

井原地区県営ほ場整備事業が本格化したのは三雲地区県営ほ場整備事業の主要工事がほぼ終了した1976年度に遡る。本ほ場整備事業の施工総面積は281haにもおよび、およそ東西３km、南北４kmの広範囲におよぶ。事業の進行に伴って足掛け15年にわたる発掘調査を実施してきた。

ほ場整備事業地内における文化財の保護については、事業を担当する福岡県福岡農林事務所および地元土地改良区に対し、事前に当地一帯が埋蔵文化財の密集地帯であることを説明し、その保護に対して格段の配慮をいただくよう強く要請していた。これに対し農政側も工事の円滑な施工をにらみながら、文化財保護に鋭意ご助力いたたくこととなった。

事業の開始直後の昭和56年度から昭和61年度にかけての前半期にかけては比較的水田間の高低差の少ない平野中央部での施工が中心となり、弥生～古墳時代における糸島地方の中心的集落遺跡とされる三雲・井原遺跡群の中枢エリアが含まれていた。事前に工区内で行なった試掘調査において縄文時代から中世にいたる遺構が複雑に交錯した文化財の密集地帯であることが確認されたため、客土等による遺跡の現状保護を強く要請した。農政側も文化財保護に積極的に対応いただき、遺跡の大半を盛土工事によって保存することで了承いただいた。そのため発掘調査必要箇所は比較的少面積にとどめることができた。

しかし事業の進行に従い、段丘の縁辺部、あるいは山裾部といった現況水田間との高低差がみるからに激しい地区での工事が本格化した昭和62年度以降の後半期には、客土による遺跡保護にも限界が見えはじめ、調査箇所ならびに面積が増加していったのである。

とりわけ、昭和62年度以降は瑞梅寺川、川原川添いの段丘斜面や井原地区南側の山裾部でのほ場整備が本格化し、瑞梅寺、川原両河川に挟まれた段丘上に位置する井原ムクナシ、塚廻遺跡では弥生時代から古墳時代前半期にかけての集落、墳墓遺構が多数発見され、背振山系から北に派生した尾根筋末端部にあたる井原南田（昭和62年度）、井原作田（平成元年度）、西畳四反田（平成２年度）の各遺跡からは水田開削により地中に埋没していた古墳が相次いで発見されるなど、各所で相次ぎ発掘調査を実施することとなった。

また、井原遺跡の集落部については農政側のご理解のもと引き続き客土による遺跡の保存措置をとっていただいたが、昭和62、63年度については、農地客土用土取り場からも古墳が発見された。農政側には土取り場の選定について再検討をお願いしたが、他の優良な代替用地も見つからなかったため、結局土取り場の発掘調査を行ない、記録保存を講じ、土取り場の確保を優先することで合意し、その結果、正恵４号墳（昭和63年度）、５、６号墳（昭和62年度）の発掘調査を実施することとなったのである。ほ場整備の面工事は平成２年度に概ね終了し、現在水田の排水施設埋設等の付帯工事が進められているところである。

本書においては井原地区県営ほ場整備事業にともなう多くの発掘調査の成果のうち、古墳時代墳墓とそれに関連する遺構を中心にまとめて報告を行なうものである。発掘調査を実施した順序に添って報告するので、一部遺構番号に報告順位の逆転がみられるがご容赦いただきたい。なお、集落

遺構の成果については現在資料の調査分析を続けており、事業地内の調査成果の総括は次回報告において詳細に報告したいと考えている。

2．調査の組織

本書の作成にともなう今年度の組織の構成は以下のとおりである。

事業主体

前原市教育委員会

総括	教育長	樗木昭生
	教育部長	中原直国
	文化課長	清水義弘
	文化財係長	川村博
庶務	文化振興係長	清水真澄
整理	文化財係主査	林　覚　（昭和62、63、平成元年度調査担当）
	主事	岡部裕俊（昭和63、平成２年度調査担当）
	主事	野田純子

なお、発掘調査および資料整理を行なうにあたり福岡県福岡農林事務所、前原市土地改良区の関係各位には多々ご助力を賜った。深く感謝申し上げる。

第２章　調査の記録

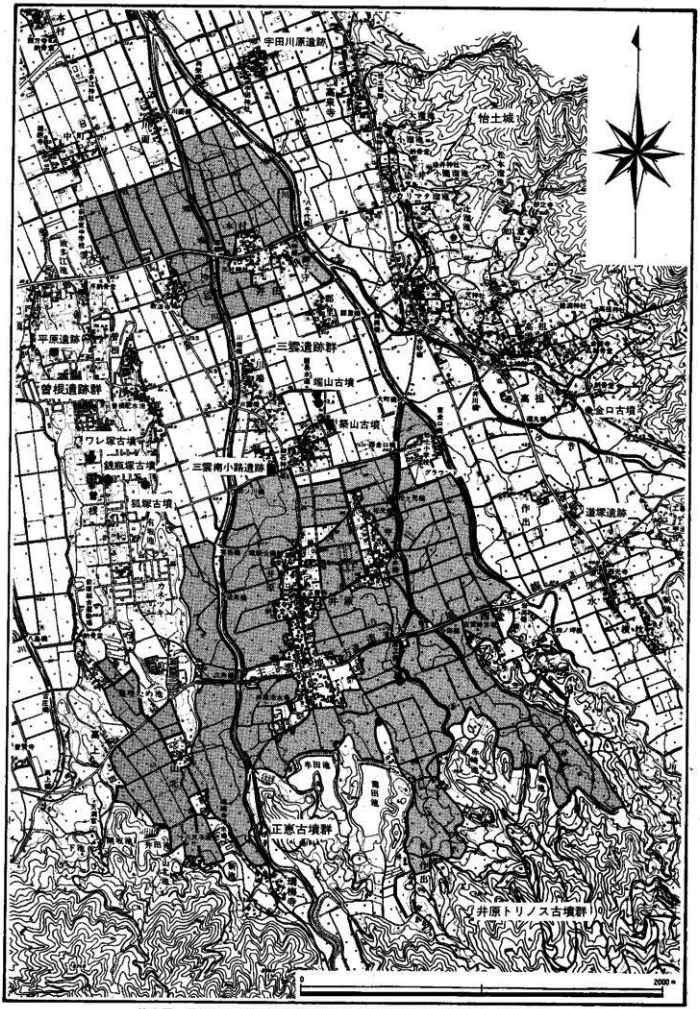
1　怡土（いと）平野周辺の古墳

糸島地方の古墳文化については先に柳田康雄[註1]、柳沢一男[註2]らによって体系的に考察が加えられているが、ここ数年間に新たに調査が行なわれたり、あるいは新知見が得られた資料も多い。本項では怡土平野周辺における最近の調査成果を概観してみる。

怡土平野周辺部では高祖東谷１号墳の発掘調査、井原１号墳、有田１号墳の現況測量が行なわれ、高祖東谷１号墳では墳丘構造や、主体部の構造、井原１号墳、有田１号墳では墳丘の遺存状況が明らかになった[註3]。いずれも築造を４世紀代に想定している。

この他糸島地方では本林崎古墳[註4]（第２図、長野川流域）、徳正寺山古墳[註5]（深江平野）、稲葉古墳群[註6]（初川流域）、山の鼻１、２号墳[註7]、元岡池の浦古墳[註8]（今宿平野）など、築造が４世紀代にさかのぼる古式の前方後円墳が多く発見されており、分布も糸島地方一円に広がっている。４世紀代に限っていえば小平野単

第１図　本林崎古墳墳丘測量図（1/800）

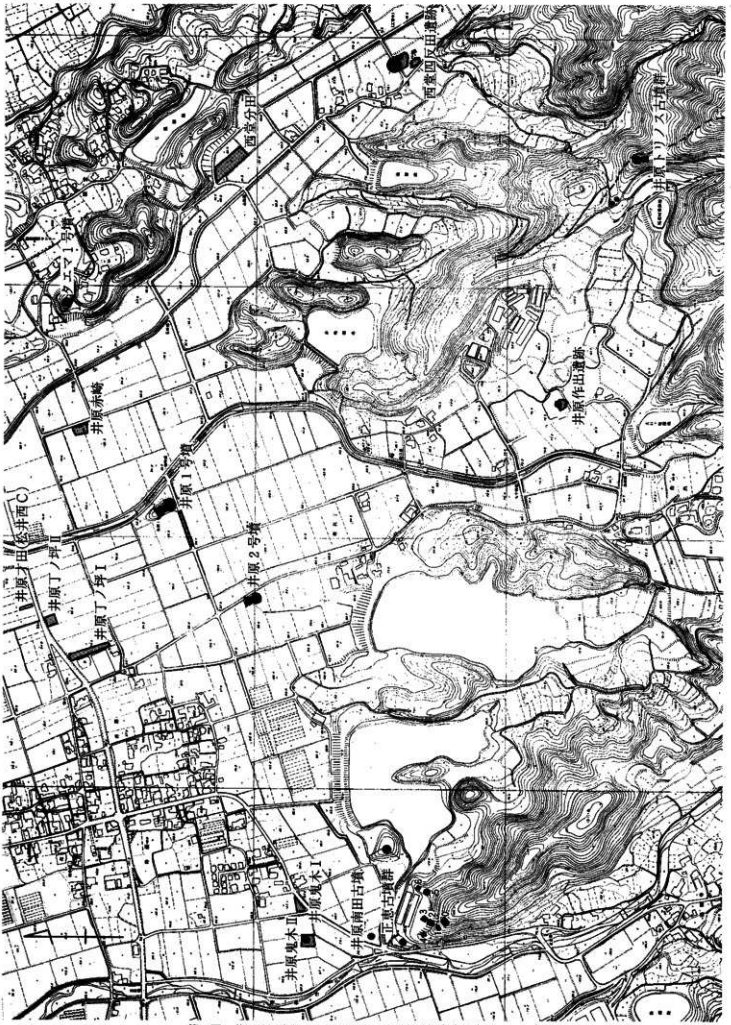


第２図　井原地区県営ほ場整備事業の施行範囲と周辺の主要遺跡(1/20,000)

位の首長墓まで前方後円墳が採用されていることが当地の際立った特色といえる。

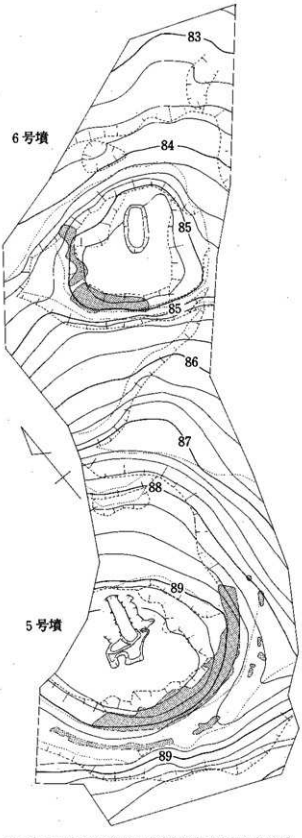
国史跡曽根遺跡群のうち、ワレ塚古墳では墳丘上から須恵器、埴輪片が採取され、埴輪の特徴から6世紀前半に築かれた古墳である可能性が高まった。[註9]このワレ塚古墳は前方部が低く短い古墳である。最近前原市内において類似した形態を有する同期築造の古墳例が相次いで報告されている。東真方古墳群C群[註10]、荻浦砂魚塚古墳[註11]である。いずれも前方部を北にむけ主体部の横穴式石室を南に向けて開口させている。ワレ塚古墳の後円部墳丘上には大規模な盗掘による陥没壊が認められるが、この陥没はおそらく石室石材を抜き取った痕とみられる。ワレ塚古墳の石室も南向きに開口するものと考えられる。狐塚古墳は古式の横穴式石室を主体部とする円墳で5世紀中ごろの築造が考えられている。今は墳丘を留めていない先山古墳は墳丘が破壊された直後に現場に大きな石材が散乱していたといわれ、6世紀中葉以降に造られた横穴式石室の古墳とみられる。銭瓶塚古墳は出土した埴輪等から5世紀後半の築造と考えられており、よって曽根古墳群は狐塚→銭瓶塚→ワレ塚→先山（墳丘消滅）の順に築造されたとみられる。

註1　柳田康雄　『三雲遺跡』Ⅲ　福岡県教育委員会　1982年
註2　柳沢一男　『丸隈山古墳』Ⅱ　福岡市教育委員会　1986年
註3　岡部裕俊　『井原遺跡群』　前原町教育委員会　1991年
註4　註3文献参照
註5　註3文献参照
註6　柳田康雄他『稲葉古墳群』　志摩町教育委員会　1985年
註7　小林義彦『山ノ鼻1号墳』　福岡市教育委員会　1992年
　　小林義彦、大塚紀宜『山ノ鼻1号墳』　福岡市教育委員会　1993年
註8　中村勝氏が墳丘で採集された埴輪片を実見させていただいた。タガ厚が器壁より厚く二等辺三角形のスカシ孔を有するものが認められ、川西編年のⅡ期に相当するものと考えられる。
註9　岡部裕俊　『平原周辺遺跡』Ⅱ　前原町教育委員会　1991年
註10　角浩行　『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』Ⅱ　前原町教育委員会　1992年
註11　野田純子他『荻浦の文化財』2　前原市教育委員会　1993年
註12　柳沢一男「竪穴系横口式石室再考」森貞次郎博士古稀記念『古文化論集』　1982年



第3図　井原地区南部のほ場整備後の地形と発掘調査地点（1/5,000）

2．正恵古墳群（御所支群）



第4図　正恵古墳群御所支群調査後墳丘測量図（1/200）

（1）立地（第4図、図版2－a）

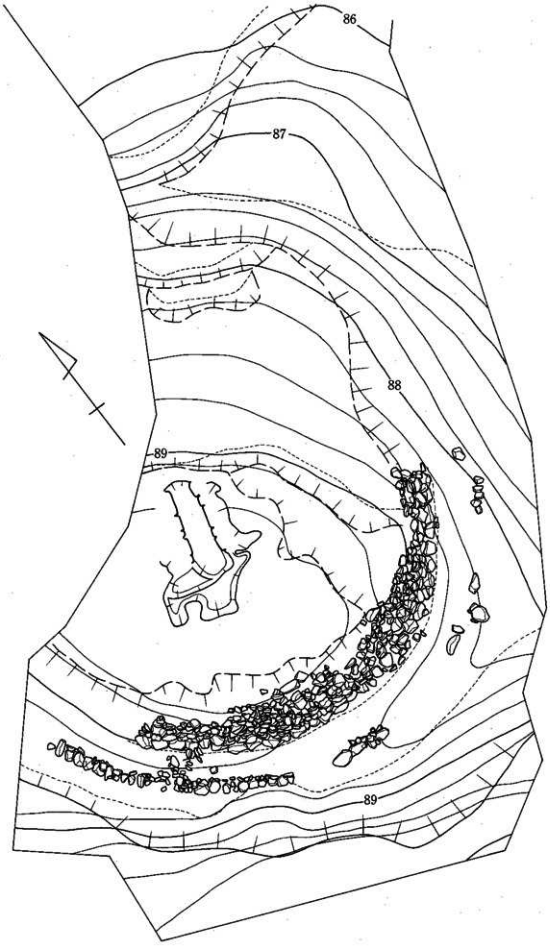
今回報告する正恵5、6号墳は、前原市大字井原字御所に位置している。調査段階で御所1、2号墳と呼んでいたが、立地的にはかつて同じ丘陵の尾根筋で発掘調査を行なった正恵古墳群（0号墳～4号墳）[註1]の一支群としてとらえるのが妥当であり、同一古墳群を報告する上で呼称上の混乱をさけるため、それぞれ正恵5、6号墳（御所支群）として報告することとした。

古墳群付近は土取りによって地形が大きく変わってしまっており、土取り以前の詳細な地形の状況を示す図面もないため各古墳間の位置関係を詳細に把握することは難しい。もともと古墳群の載る山稜は南東から北西に向かって伸びており、所々に尾根筋と直行して北東に向かって小さく張り出した支脈が認められる。5、6号墳はこの支脈のうち最も北に位置し、尾根筋の勾配も比較的ゆるやかであった。ここから北に向けて三雲・井原遺跡群を一望することができる、造墓には格好の尾根である。この支脈の標高89.7mから85.4mにかけての斜面に5号墳と6号墳が近接して築かれていた。両古墳の主体部は水平距離にして20mほどを保っている。

この古墳群の東には谷地を隔ててお椀を伏せたように隆起した独立小丘陵がある。その頂上部に位至三公鏡が出土した箱式石棺を主体部とする古墳があったらしい（第3図）[註2]。現在は納骨堂が建てられており、建設工事の際に古墳は大破したものとみられ、石棺の蓋石とみられる朱が付着した玄武岩の板石がその傍らに置かれているのみである。

註1　川村博『正恵古墳群』前原町教育委員会文化財調査報告書第2集　1981年

註2　埋蔵文化財研究会『倭人と鏡』第2分冊福岡県16　1994年

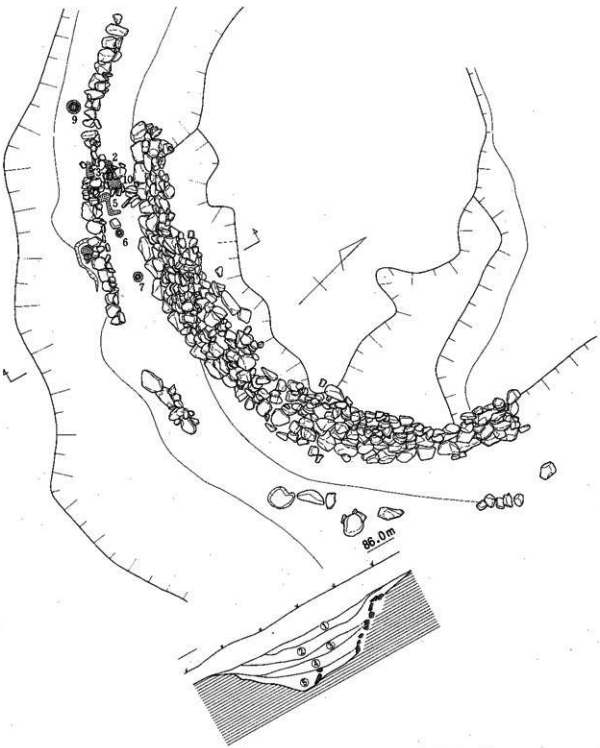


第5図　正恵5号墳調査後墳丘測量図（1/100）

（2）正恵5号墳

墳丘（第5・6図、図版2－b）

墳丘の西側3分の1ほどが養鶏場建設時に削り落とされていた。北東部は尾根の上面が大きく削られ、墳頂部土砂も失われ、調査を開始して間もなく表土直下からすぐに天井が失われた主体部が検出されたほどである。墳丘が比較的良好に遺存していたのは南側の3分の1ほどであった。

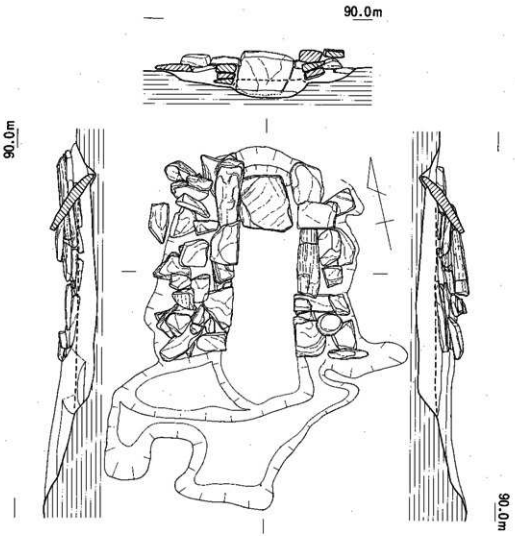


第6図　正恵5号墳葺石・土器出土状況および南周溝土層実測図（1/40）

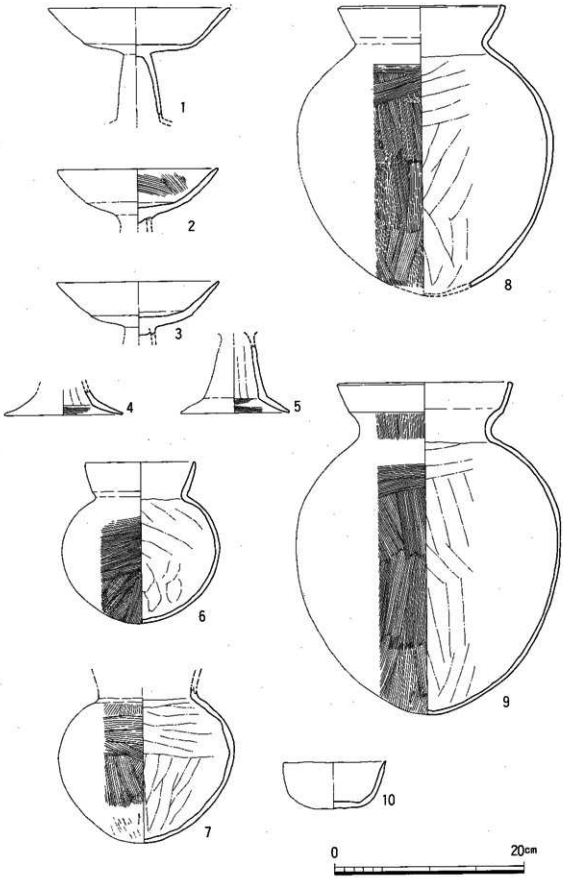
墳丘は尾根上方を切断し地山を削ることによって大方の墳形を整えられている。墳丘盛土は現場で確認することができなかったが、古墳周溝の南外縁のレベルと尾根の勾配から判断して現状の墳頂面は旧地山からさほど大きく削平を受けたとは考えにくく、また主体部が現墳頂に半ば剝出しの状態であったことからみて地山に1m前後の盛土を施して墳丘を築いていたものと考える。

墳丘の南部では葺石が遺存していた。葺石は2段に積まれ、墳丘裾部を示す1段目は人頭大の川原石の上方に小石を載せる程度で低く、積み方も粗い。概ね60cm幅のテラスを挟み2段目の葺石が地山面に直接積み上げられていた。2段目の葺石は、基底部に幅40～50cm程度の川原石を腰石として据え、その上に概ね20～30cmの川原石を積み重ねている。残りの良いところで基部から約1mの高さまでである。南東部土層観察によれば、葺石を葺くにあたり、まず墳丘地山を整形する際に2段目の葺石腰石に仮の墳裾を削りだし底面から葺石を葺く。次に1段目テラス面を浅く盛ってその縁部に1段目の葺石を葺いていることがわかった（第6図）。そのために2段目の葺石腰石は1段目の墳丘盛り土中に半ば埋め込まれた状態を呈していた。2段目の墳丘斜面の勾配は水平面から40度ほどを測る。1段目の葺石列からこの古墳の墳丘径は、約11.60mに復元することができる。

主体部（第7図、図版3－a）



第7図　正恵5号墳主体部実測図（1/40）



第8図　正恵5号墳出土土器実測図（1/4）

検出したのは、N－13°－Eを主軸とする竪穴系小石室であった。しかし、盗掘の痕が著しく天井石は既になく、盗掘壙が床面下まで掘り下げられており、南小口部は立石が抜き取られ、北小口側は石材が内側に倒れかかっていた。

石室は地山を掘り込んだ長方形の墓壙の短辺側に板石を立てて小口とし、長辺側に割石を小口積みにして小口石を挟み込み、側壁としていた。側壁の裏側には控え積みも認められた。石材には片麻岩、結晶片岩等が用いられていた。

石室の計測値は内法で主軸長150cm前後、幅は北側で52cm、南側で73cmを測る。残っていた小口石の高さから推察すれば、高さは40cmほどであったと考えられる。

出土遺物（第８・９図、図版６）

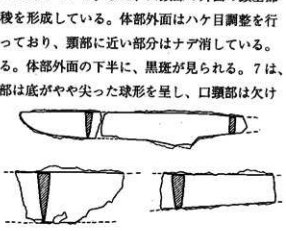
主体部攪乱土中から大刀と刀子の一部、南西部の周溝と墳丘１段目テラス付近（第６図）に集中して高杯、壺、甕、椀などの土師器が出土した。いずれも古墳に供献されたものとみられる。特に９は周溝内に若干土砂が流入堆積した第６図⑤層の上面から穴を掘って据えていた。墳丘築造後、ある一定期間が経過した後に土器供献が行なわれたことを窺わせる。

１～７と10は周溝内から、８、９は外側の列石の墳丘と反対側の小土壙に埋置されていた。

土師器（第８図、図版６）

１～５は高杯片であるが、完形に復元できるものはない。杯部は浅く外方へ大きく開く。１は杯部口径19.1cmを測る。杯部底面はフラットで、脚部はエンタシスの様な膨らみを持っている。杯部内外面と脚部外面はナデで仕上げ、脚部内面にはケズリを施している。脚裾部以下は失なわれている。２は杯部口径16.9cmを測る。外面は器表の剝落が著しく調整が不明であるがおそらくナデで仕上げていたと思われ、内面は立ち上がりの部分にハケ目調整を施し、側面はナデで仕上げている。脚部を失っている。３も杯部のみのもので、杯部口径17.0cmを測る。器表の剝落が著しいが、内面の一部にはハケ目も見られ、屈曲する接合部には接合用の刻み目が施されている。４は脚裾部で、底面径12.4cmを測る。外面はナデ、内面は屈曲部より上にはケズリ、下にはハケ目調整を施している。５は脚部のみの出土。脚裾径11.4cmを測る。外面はナデ、内面は屈曲部より上にはケズリ、下にはハケ目調整を施している。

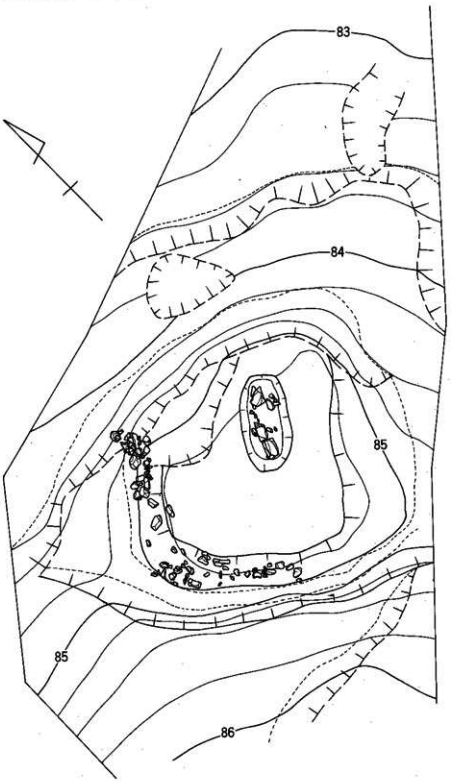
６、７は丸底壺である。６は器高17.1cm、口径11.6cm、胴部最大径16.6cmを測る。胴部はほぼ球形で、やや外反しながら立ち上がる口頸部はわずかに内湾している。また、口頸部の外面の頸基部に近いところにわずかに屈曲する部分があり、弱い稜を形成している。体部外面はハケ目調整を行なっているが、胴部中位と下半ではその方向が異なっており、頸部に近い部分はナデ消している。内面はケズリを施しているが、下半はナデ消している。体部外面の下半に、黒斑が見られる。７は、口頸部を失っており、胴部最大径18.5cmを測る。胴部は底がやや尖った球形を呈し、口頸部は欠けてはいるが、残存部の状況からして、ほぼ直立していたようである。外面にはハケ目調整を施しているが、部位によって方向が異なり、頸基部付近で縦、胴部上半で横、下半で縦となっており、底部付近はナデ消されている。内面はケズリを施しているが、その方向も上半で横、下半で縦となっ



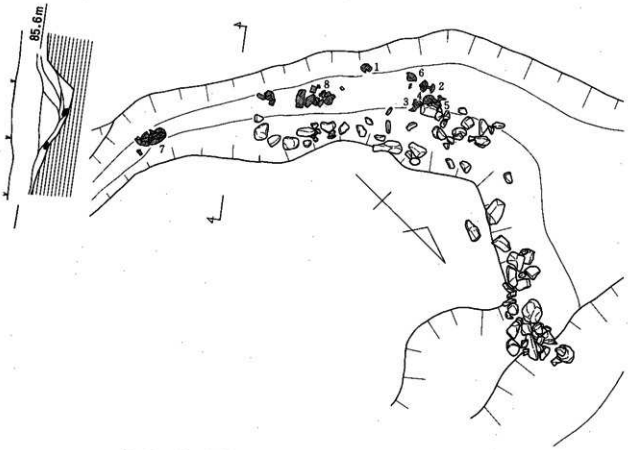
第９図　正恵５号墳主体部出土鉄器実測図(1/2)

ている。

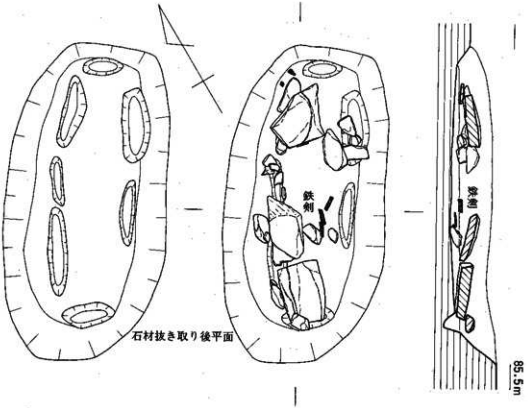
8は、小土壙に埋置されていた土器のうち東側のものである。甕で、底部を欠いているが倒卵形の胴部に、わずかに内湾しながら立ち上がる口縁部を有する。復元器高30.8㎝、口径17.8㎝、胴部最大径26.9㎝を測る。口縁端部は、わずかに内側に摘み出している。胴部外面のハケ目は粗く肩部で横方向のほかは縦方向である。胴部内面は、肩部から口頸部下にかけて横方向、肩部より下半部



第10図　正恵6号墳調査後墳丘測量図（1/100）



第11図　正恵６号墳墳丘南西部葺石、土器出土状況および周溝土層断面図（1/40）



第12図　正恵６号墳主体部実測図（1/30）

では縦方向のケズリを施している。外面には黒色顔料が塗布されている。9は同じく小土壙に埋置されていた土器のうち西側のもので、二重口縁壺である。胴部はやや丸みを増した倒卵形をなし、端部が丸みを有し稜の鈍い二重口縁がつく。器高35.2㎝、口径18.5㎝、胴部最大径27.9㎝を測る。口縁部の屈曲部から上は内湾している。胴部外面はハケ目調整を施しているが、肩部で横方向のほかは縦方向で、また、頸部の屈曲部より下にも縦方向のハケ目が見られる。口頸部の内面はナデているが、横方向のハケ目を確認することができ、胴部内面はケズリを施している。10は椀である。底部はやや平坦面を有す。器高5.1㎝、口径10.7㎝を測る。

鉄器（第9図、図版6）

11は刀子であるが、折損しており茎も一部失われている。刃部長9.2㎝＋αを測る。12は大刀の刃部と茎の一部である。一振分と考えられる。

（3）正恵6号墳

墳丘（第10図、図版4－b）

6号墳の墳丘は北東半部が削平、土砂の流失等により築造当初と大きく旧形を損ねており、築造当時を忍ばせるのは南半部のみである。

墳丘は南北に長軸をとる長方形プランの方墳である。5号墳と同じく現況では盛り土の痕跡は認めないが、墳形を整えるために1ｍ前後の盛土は行なわれていたのではなかろうか。築造の方法は5号墳と基本的には同様で尾根を切断して削土によって墳丘基底部を成形し、墳丘上面および墳丘北斜面に盛土をほどこして墳形を整えていったものと見られる。

墳丘南西コーナー付近を中心に川原石が散乱していたことから、斜面に葺石を葺いていたことがわかるが、確実に原位置を保っていると見られる部分はない。石の量がさほど多くないことから、墳丘区画を明確にする程度のもので、元来1、3、4号と同程度の貼り石状の簡単なものであったとみられる。また南東コーナー付近では石の散乱も認められないことから、局部的に石が葺かれていたことも考えられる。主体部が墳丘のほぼ中心に位置すると想定すれば、長軸長8.8ｍ、短軸長7.5ｍの方墳となろう。

主体部（第12図、図版5－a）

検出したのは、N－35°－Eを主軸とする組合せ式箱式石棺であった。しかし、ほぼ全壊の状態で、攪乱を受けた土壙の中に引き抜かれた石棺材が散乱していた。

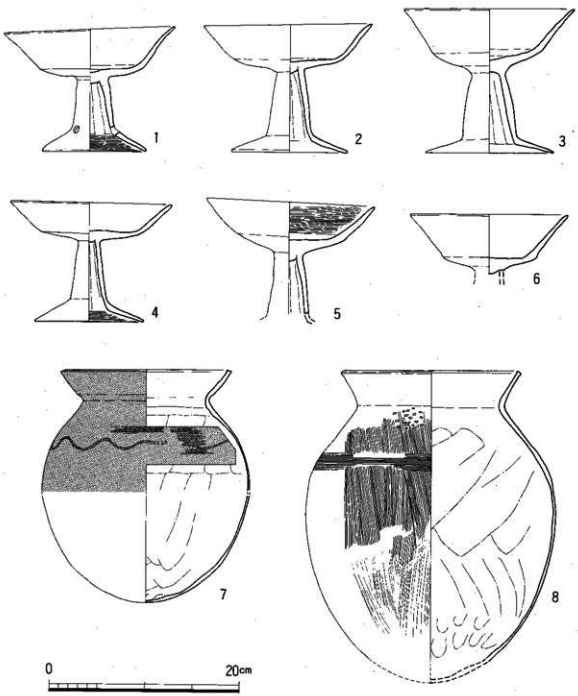
地山に掘り込まれた隅丸長方形の土壙は長さ2.52ｍ、幅1.28ｍ、深さ0.33ｍを測る。石材の掘り方の痕跡から、南北に各1枚の小口石を埋け、側石として西に3枚、東に2枚の板石を埋けていたと見られる。棺の内法は概ね長さ1.8ｍ、幅0.4ｍと推定される。埋葬頭位は不明。

出土遺物

正恵6号墳からは、主体部攪乱土からは鉄剣が、南側周溝内から祭祀のために供献された土師器高杯と甕が出土した。

土師器（第13図、図版7）

1～6は高杯で、5は脚の裾部分が、6は脚部全体が不明である。いずれの脚部にも、エンタシスのような膨らみが見られ、脚柱部と裾部との境は明瞭であるる。1は器高12.9㎝、杯部径17.9㎝、脚裾径11.0㎝を測り、脚柱部下三方に径1㎝弱の円形の穿孔が見られる。器表の剝落が著しく、器面調整は不明なところが多いが、杯部から脚部外面にかけてはナデて仕上げているようで、脚部内面は、裾部分にハケ目調整、その他にはケズリを施している。2は器高13.5㎝、杯部径17.6㎝、底径12.2㎝を測る。器表剝落が著しいが、杯部内面底部にハケ目が見られ、脚部内面にはケズリを施している。3は器高15.3㎝、杯部径17.9㎝、底径13.6㎝（いずれも復元）を測る。器面調整の不明な部分もあるが、全体をほぼナデて仕上げており、脚部内面にはケズリが見られる。4は器高12.6㎝、杯部径17.0㎝、底径11.0㎝を測る。器表剝落が著しく、器面調整は不明であるが、脚裾部



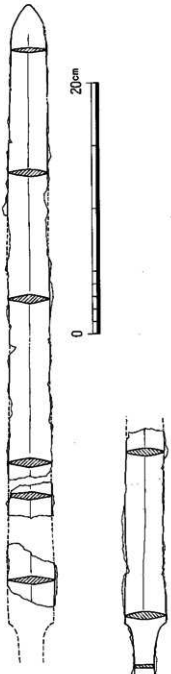
第13図　正恵6号墳出土土器実測図（1/4）

内面にハケ目、脚部内面にケズリが施されている。5は杯部径17.7㎝を測る。器表剝落が著しいため外面の器面調整は不明であるが、杯部内面にハケ目、脚部内面にケズリが見られる。6は杯部径（復元）16.6㎝を測る。

7、8は甕である。7は器高24.3㎝、口縁径17.6㎝、胴部最大径21.7㎝に復元される。寸詰まりで肩のだれた倒卵形をした胴部に内湾気味に開く口縁がつく。口縁端部は平坦面をつくり内側に軽く摘み出す。器外面には一部ハケ目が残るが器表が剝落しているため詳細は観察しづらい。肩部には横ハケの後に左まわりの波状沈線をめぐらす。器外面には赤色顔料が塗布されていた痕跡を残す。8は器高32.9㎝、口縁径18.9㎝、胴部最大径26.3㎝を測る。倒卵形の胴部に直線的に上外方に開く口縁部がつく。口縁端部は坦面をなす。外面は縦ハケ調整で仕上げ、肩部のみ横ハケが一周する。内面はケズリが施されている。外表口頸部下には列点文塊が認められる。

鉄器（第14図、図版7）

1は刃部、2は茎から刃基部が遺存する。



第14図　正恵6号墳主体部出土鉄剣実測図（1/3）

(4) 小結

両古墳の築造時期について、まず各々周溝に供献されていた土器をみてみる。6号墳から出土した甕は、肩にヘラ工具による施文が認められ、胴部の形状も倒卵形でハケ目も細かい。また高杯脚部に円孔を設けるものもあり、脚裾も薄く丁寧に整形されており、布留式古段階並行期の特徴を示している。これに対して5号墳では甕、壺とも胴部肩の張りがとれ、球形に近づき、胴部のハケ目も粗い。また高杯は脚裾の作りが粗く、布留式中段階並行期の特徴をもつ。また古墳主体部の構造については6号墳が弥生後期からの伝統的な箱式石棺であるのに対して、5号墳では古墳前期の竪穴式石室の影響下に生まれたとみる石棺系小石室を採用しており、いずれも5号墳に後出的要素が多く見いだせることから築造は5号墳→6号墳の順に行なわれたとみられる。

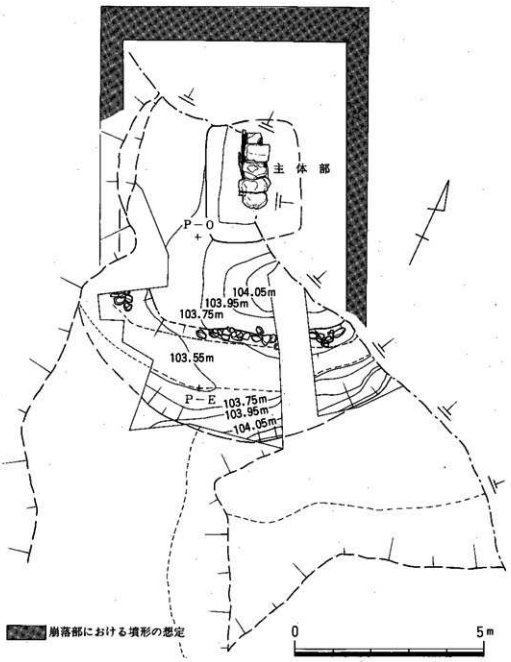
5号墳の墳形は円墳であった。正恵古墳群では1979年からの調査で合計7基の古墳が確認されているが、他はいずれも方墳であり、5号墳のみが墳形を違え、しかも規模が一回り大きい。墳丘施設においても葺石が2段に組まれており、葺石が1段で石積みが貧弱で粗かった2、4号墳とは違いが認められるなど、墳丘の様相が他の古墳と一変していることが本墳の特徴として指摘される。

3．正恵古墳群（4号墳）

調査地点の概要

本墳は大字瑞梅寺字正恵に所在する。1989年（昭和54年）に前原町教育委員会が土取り工事に先立って発掘調査を実施した正恵古墳群の一部である。この調査によって当山稜一帯に古墳前期から後期にいたる古墳が群集することが知られることとなり、この調査を皮切りに都合3次の発掘調査が行なわれることとなった。いずれも当地が土取り用地となり、それにともない古墳の崩壊が危惧されたことに起因する。本調査はその第3次にあたり平成元年度（1989年）に実施された。

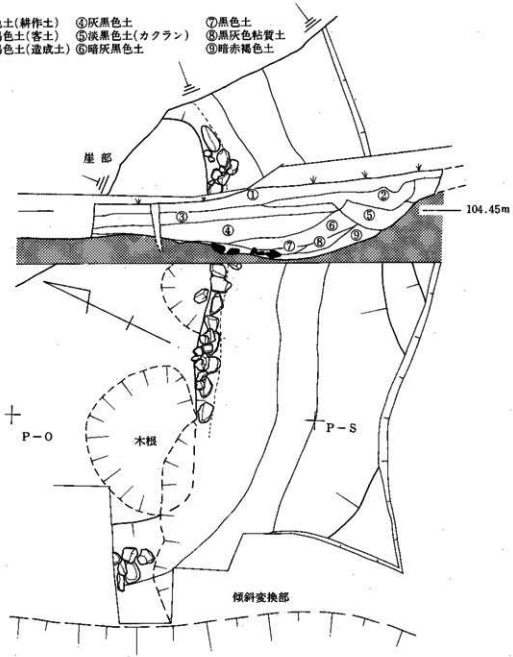
本墳は、既に同年早春の長雨による崖崩れによって墳丘の東半分が崩落し、その際に中心主体で



第15図　正恵4号墳調査後墳丘測量図（1/100）

ある箱式石棺の北小口石も崖下に転落し、石棺が崖面に露呈している危険な状況であり（図版８－a）西側も法下に県道を臨む古墳の東西斜面を削ぎ落とされた狭小な地形を呈し、発掘調査は作業場の安全に注意を払いながらかつ迅速な対応が要求されたため、必要最小限の調査に留めることとし、箱式石棺と墳形の確認を主眼とした。

まず墳丘推定部の表土を除去して主体部の掘り方を確認し、掘り方から推定できる南部の墳丘主軸上土層観察用の畦を残しながら、墳形を確認するために調査区を南に拡張した。そこで葺石群と周濠を検出したため、西墳裾を確かめるため葺石列の西延長線上に小トレンチを設定し、墳形の確認に努めた。調査中に地主の三苫新六郎氏にうかがったところ、戦前には本古墳付近でそばの栽培を行なっていたらしい。それを裏付けるように表土中に葺石を掘り返して埋め込んだ集石壙や排水



第16図　正恵４号墳葺石の遺存状況と南側土層断面図（1/50）

用の溝跡が認められた。

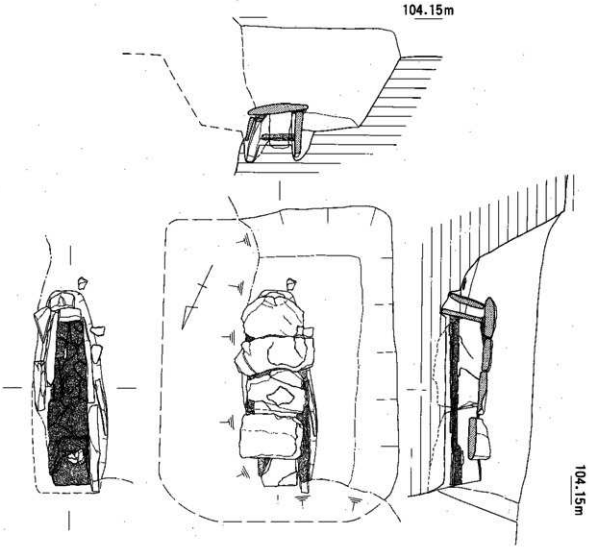
墳丘および外部施設

墳丘は北東半部を失っているが、辛うじて墳丘南東隅を推定でき、また南西隅も崩壊しかけた葺石列で推定が可能となった。南周溝および葺石列が東西に直線的に展開することから、平面プランは長方形であると考えられ、箱式石棺が墳丘の中心部分に築かれたと仮定し墳形を想定復元すれば第15図のスクリーントーンで囲った領域のように墳丘主軸を北北東に向けた長辺９ｍ、短辺７ｍほどの長方形であったと推定される。

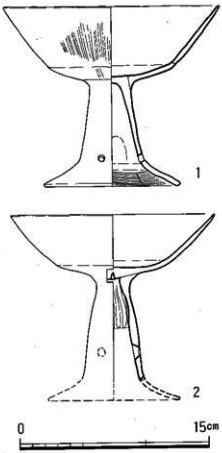
葺石は大半が崩落し、わずかに南裾の根石が旧状を留めているにすぎない。南畦の土層で観察するかぎり葺石は周溝底部に傾れ込むように崩落しており、古墳築造直後から墳丘が流失し、崩壊していたことが窺われる。墳丘の版築が不十分であったのかもしれない。また石の量もさほど多くないので葺石に要した墳丘斜面もさほど高くなく、すなわち低墳丘の古墳であったとみられる。

主体部

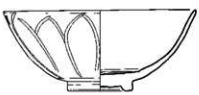
墳丘の中央部に主軸をＮ－25°－Ｗに向けて組まれた箱式石棺を検出した。まず地山から墓壙を



第17図　正恵４号墳主体部実測図（1/40）



第18図　正恵４号墳南周溝崩落土出土高杯実測図（1/3）



第19図　正恵４号墳南周溝崩落土出土青磁椀実測図（1/3）

掘り下げると約60cm下に蓋石が姿を現した。一部倒壊しているが本来蓋石は５枚、側板は左右各２枚で組まれていたとみられ、側板の継目には控積みによる補強が行なわれている。棺全体が黄色粘土によって丁寧に目張りが施されていた。

棺は頭位を北向きに築かれており、その内法は全長180cm、頭位幅45cm、足位幅20cmを測る。床面は板石を敷き詰めた上に黄色粘土を張り、頭には粘土枕が見られた。棺内面は蓋石を含め赤色顔料が塗布されていた。

床面には人骨が遺存していた。

出土遺物（第18・19図、図版11－b）

雨によって崩落した周溝の埋土と考えられる黒色土から２点の土師器高杯（第18図）が出土している。１は高さ19cm、口径22.4cm、脚裾径14cm、椀部は心持ち内湾ぎみに上外方に開く。脚柱は直線的に立ち上がり下位三方に円孔を有す。脚裾は、若干外反気味に開く。２は１に比べ椀部の開きが大きく、脚柱が長い。口径16.2cmほどで脚裾部を欠失する。脚柱部の円孔は焼成後の穿孔である。

石棺内から出土した人骨については土肥直美氏に鑑定いただいたが、その所見概要は以下のとおりである。

保存状態　骨質は脆く、保存状態は不良である。保存されていた部位は頭蓋骨（左頭頂部、後頭骨左半）および四肢骨（左大腿骨骨体部片、出土位置関係からおそらく左と思われる脛骨片）である。

性別の推定　保存されている部位が少なく、性判定に有効とされる骨盤の形態や計測値からは推定できなかった。しかしわずかに残存している頭蓋骨筋付着部の特徴や厚さ等から考えると、男性の可能性が強い。

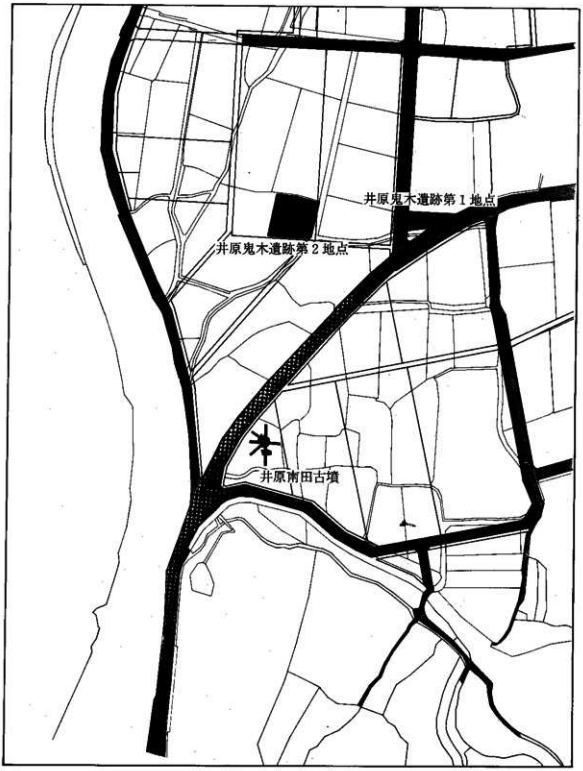
年齢の推定　頭蓋骨主縫合のうち、残存する矢状縫合とラムダ縫合の内板は既に閉鎖している。しかし外板は開離しているので本人骨の年齢は既に成人には達しているが、それほど高齢ではないと思われる。個体変異を考慮し、成年～熟年と推定される。

また古墳とは直接関係ないものの高杯と同土壌から青磁椀が出土している。中世墓の副葬品とみられ、古墳周溝と同期の墓が切り合っていたものと考えられる。正恵古墳群の北裾に広がるの水田地帯には奈良時代～中世の集落遺跡が発見されており、この遺跡に縁ある墓と見てよかろう。青磁椀は器高8.6cm、口縁径20cm、高台径6.8cmを測る。

4．正恵古墳群（南田古墳）

調査地点の概要

本墳は大字井原字南田に所在する。1989年（昭和54年）に当該地域におけるほ場整備の最中に水田の表土を剝いだところ、その直下から石室が現れた。この古墳が取り込まれる水田区画は盛土施

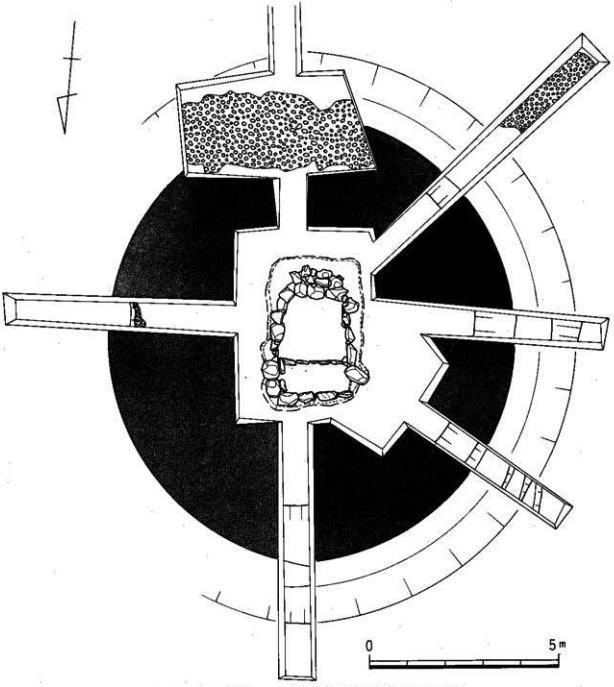


第20図　南田古墳周辺の新旧地割り（1/2,000）
（細線は旧地割り、太線は新地割り、アミかけ部は新設道路を示す。）

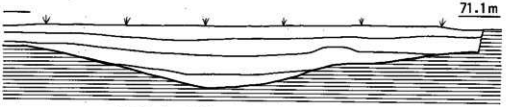
工が予定されており、石室上面にマサ土を盛って遺構を保存していただけることとなったため、石室内を清掃し遺物をとりあげ、墳丘規模および外部施設を確認するためのトレンチ調査のみに専念した。

古墳の立地

前項の正恵古墳群が載る山稜の北裾に位置する。総じていえば正恵古墳群に包括してよく、当古墳の北200mで調査を行なった井原鬼木遺跡第2地点でも古墳の一部とみられる溝、土壙が発見されており、南田支群とでも呼称すべきかもしれないが、本項ではとりあえず単独で立地する古墳として扱い、南田古墳と称して報告する。



第21図　南田古墳トレンチ設定状況と墳丘規模推定図（1/125）

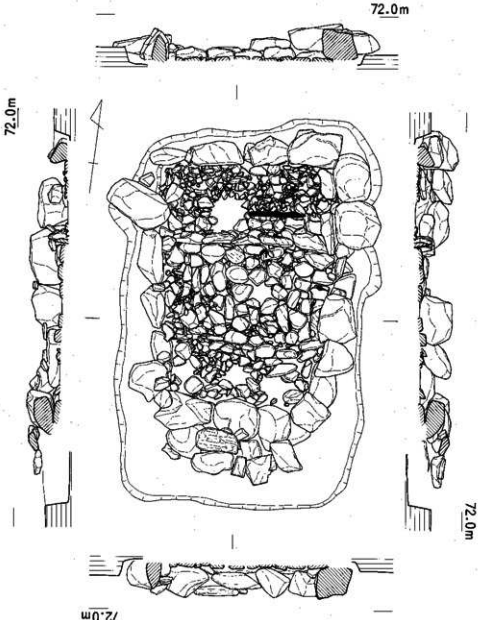


第22図　南田古墳第４トレンチ周溝土層断面図（1/20）

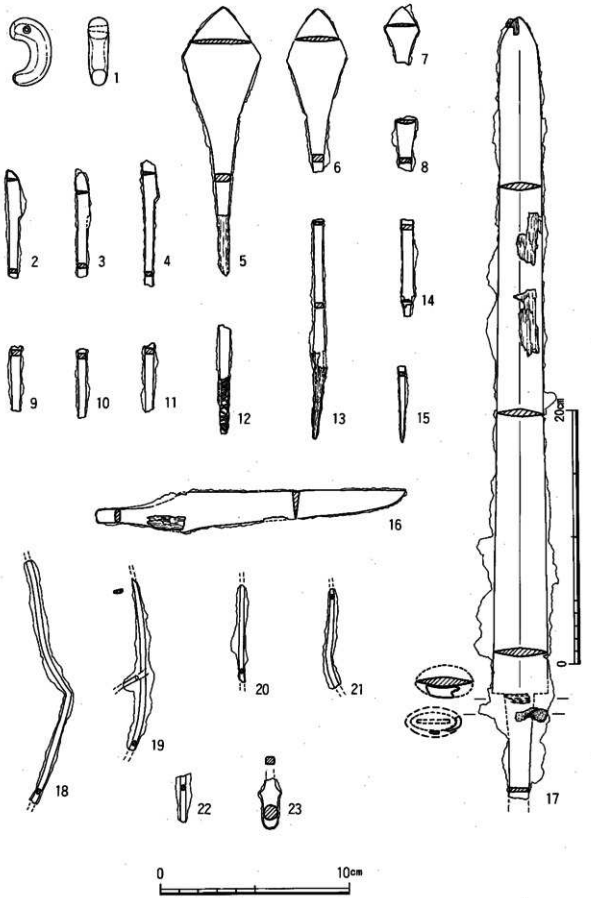
墳丘および外部施設（第21・22図）

古墳は後世の開墾によって墳丘を完全に失っており、調査前の現況では古墳の存在を確認することができなかった。

墳丘の形態と規模を確認するために玄室から放射状に６本のトレンチを設定したところ１～４トレンチにおいて周溝を検出した。しかし、第５トレンチでは周溝底よりさらに低く整地された隣の



第23図　南田古墳石室実測図(1/40)



第24図　南田古墳石室出土遺物実測図（1/2、1/3）

水田に削りとられており、第６トレンチでは川原石の集積遺構が発見され、下部の調査を取りやめたため、周溝は確認できなかった。

玄室が古墳のほぼ中央に位置すると仮定し、各トレンチの周溝を繋ぎあわせると、墳形はやや南北に長い円墳である。南北径11.5m、東西径10.8mほどに復元できる。トレンチでは葺石は認められない。周溝は第１トレンチでは浅く10cmほど、第２、３、４トレンチと順に深くなっており、周溝が東向きに勾配をつけて掘られている。

横穴式石室（第23図、図版14－a）

主体部は南に開口する古式の横穴式石室である。羨道の詳細はわからないが、玄室より１段、約25cmほどは高い。現状では羨道から玄室へいたる２段の石段が認められる。横口の幅は入口壁の中央に残る平石の幅約40cmほどと考える。横口両袖の構造は明らかではないが、南東隅壁が明瞭なコーナーを設けず、隅丸状態を呈することから、川原石を窮隆状に積み上げていたのかもしれない。

玄室は辛うじて腰石と床面が残っていた（図版12－ａ）ため床面プラン等は把握できる。腰石のなかには床面から20cm以上壁面に突き出ているものもある。やや厚手の川原石を使って壁面を粗く積み上げていたことがうかがえる。プランは主軸長2.46m、幅は奥壁側で1.79m、横口側で1.44mを測り、奥壁に向かって広がる寸詰まりの羽子板状である。

奥壁から手前50cmに奥壁と並行して５個、さらに東側壁添いに奥壁に向かって２個、計７個の平石をＬ字状に突き立てて並べ仕切石としている。仕切石と奥壁間は手前床面より１段低く下げて小石を敷き詰め屍床をあつらえる。

石室床面の敷石は中央付近では大柄な平石を横口付近では小石を中心に敷き詰めており、両者の境は横口から50cmの地点で明瞭に区別できる。作業工程上の差異であるのか、床面利用上何らかの境界を意図するものなのかは明らかでない。屍床に１箇所、横口部付近に３箇所ほど敷石が掘り起こされた跡がみられ、盗掘を受けたことをうかがわせる。

屍床の東南部に柄を東に向けた鉄剣が１振り石障と並行して副葬されていた。さらに鉄剣の中央部から南寄りの仕切石裾からメノウ製勾玉が出土したことから、遺体の頭位は東向きだったのであろう。この他に玄室内から鉄鏃、刀子が散乱した状態で出土している。

出土遺物（第24・25図、図版14）

当古墳では、石室内からメノウ製勾玉、鉄剣、鉄刀子、鉄鏃が、周溝から用途不明の鉄製品、須恵器、土師器、陶磁器が出土しているが、土師器、陶磁器は今報告では触れない。

勾玉（第24図１、図版14－a）

メノウ製であるが、材質は悪く色は赤色というよりは茶色みを帯び、半透明である。長さは3.6cm、頭部の厚さは1.0cmを測る。紐通孔は片側穿孔である。

鉄鏃（第24図２～15、図版14－a）

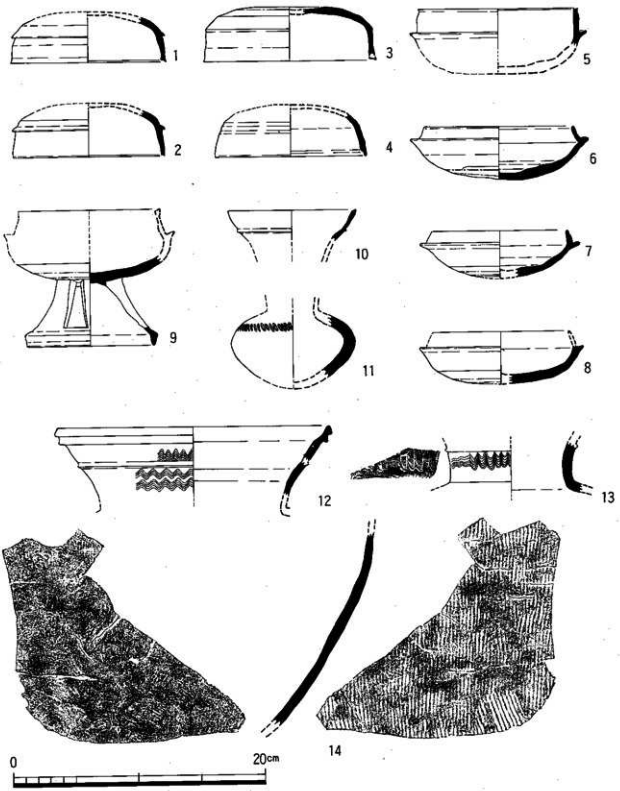
すべて折損品である。完形に復元できるものはない。２～４は片刃式の尖根鏃、５～７は圭頭式で、５、６は広根鏃、７は尖根鏃に分類できる。５の茎には矢柄が残っている。他は鳥被、茎の残片である。12は沓巻の痕が残り、13にも矢柄が付着する。

刀子（第24図16、図版14－a）

全長16.3㎝、刃部長11.8㎝を測り、茎に一部柄の木質が残っている。

鉄剣（第24図17、図版14－a）

茎先端を欠失している。現存長61.4㎝、刃部長53.3㎝を測る。刃は両面とも鎬を明瞭に研ぎ出し、断面は菱形を呈す。刃部の所々に鞘の木質が遺存している。関部には厚さ８㎜ほどの木製鍔がとり付けられ、さらに鍔に密着して柄に被せて鹿角刀装具を装着していた痕跡を残す。鹿角遺存状態が



第25図　南田古墳周溝出土須恵器実測図（1/3）

悪いので、詳しい形状、表装施文の有無などについては明らかでない。

不明鉄器（第24図18～23、図版14－a）

18～22は断面が丸い針金状の製品である。本来１個体であったと思われるが用途は不明。また23は肥厚部より上では断面が正方形、下方では丸い。

須恵器（第25図、図版14－b）

いずれも周溝埋土中からの出土で、破片である。

１～４は杯蓋片である。１、２は体と天井部との境に明瞭な稜をもつが、３では稜が鈍くなり、４は稜がなくなり、かわりに沈線がめぐる。復元口縁径は１が12.3cm、２は12.0cm、３は13.4cm、４では12.0cmを測る。

５～８は杯身である。５は受け部が小さく立ち上がり部がほぼ直立し、口縁端部がシャープに凹面をなす古式の様相を呈しているのに対し、６、７で立ち上がり部は短く内傾し、端部も丸く納められている。６～８では回転ヘラ削りが体部の２分の１まで行なわれている。いずれも径は復元値であるが５は口縁径12.7cm、受け部径13.9cm、６は口縁径11.8cm、受け部径14.1cm、高さ4.7cm、７は口縁径10.7cm、受け部径12.6cm、８は受け部径12.9cmを測る。

９は高杯である。短脚で脚高5.3cm、三方に長方形スカシを切り出す。脚裾は下方に垂直に引き出される。脚裾径は10.1cmを測る。

10、11は壺で、10は口頸部、11は胴部片である。10は復元口縁径10.2cmで、頸部には櫛描波状文の一部が遺存する。11は胴部の最大径が9.9cm、肩部には櫛描列点文がめぐる。

12、14は甕である。12は復元口径21.5cm、断面M字形に肥厚した口縁端部は丸みをおび頸部には一条の三角凸帯がめぐり、それを挟んで上下に櫛描波状文が描かれる。14は胴下半部片である。外面には縦方向の並行タタキ、内面はナデ仕上げされているが同心円状の当具痕が薄く残る。13は壺頸部片で、三角凸帯下に櫛描波状文がめぐる。

小結

井原南田古墳は初期横穴式石室を主体部に持つ径11ｍほどの円墳である。墳丘はほぼ全壊状態であったことは惜しまれるが、幸い地下に組み上げられていた石室下部が遺存していた。

横穴式石室は南に開口し、床面は羨道より１段低く、横口部には階段状に石積みが行なわれている。横口部の構造は現状では確定しづらい。しかし袖部に板石を立てた形跡がみられないことから平石を小口積みにして袖部を積み上げたものとみられる。石室壁の基底部で肉厚の石を床面下に深く埋め込む構築法は西堂四反田１号墳と類似しており、屍床を仕切石で区画することも同墳の石室構造と共通する。しかし壁面使用石材は同墳よりも大柄な塊石を使用していること、床面敷石に大柄な敷石が敷かれていることなど、１号墳より新しい様相も見いだせる。柳沢氏の石室編年[註1]に対応させれば、Ａ型石室の３ａ期後半、西堂四反田１号墳よりも若干後出するものと考える。

古墳周溝から出土した土器は田辺編年の TK－23型式以降のものが確認されている[註2]。よって古墳は遅くとも TK－23型式並行期には築造されていたとみてよい。西堂四反田１号墳との石室構築手法の連続性を重視すれば、TK－23型式並行期よりもさらに古式に設定してもよいと考える。

註１　柳沢一男「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982年

註２　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年

5．井原作出遺跡（いわらつくんで）

立地（第26図）

井原作出遺跡は、大字井原字作出に所在する。井原地区県営ほ場整備事業の施工区域内で最も南に位置する地区で、赤崎川によって形成された段丘の東岸斜面上に位置している。標高は約800mを測り、調査地点の北700mには井原１号墳、南西の500mの山稜斜面には怡土平野では最大規模をほこる後期の群集墳である井原トリノス古墳群が位置する。この地域一帯は古代井原地区の奥津城と呼ぶにふさわしい。しかし調査地点一帯は近世以降盛んに開墾が行なわれており、段丘斜面では激しい切り盛り土工によって水田が作られたために、遺跡の破壊が進むこととなった。

今調査では古墳の周溝の一部と、その周溝を切って営まれた竪穴式住居、また開墾された際に、古墳石材を集積したとみられる土壙が確認された。

遺構（第27図）

周溝は、葺石を持った古墳の一部で、現況で長さ約８ｍ、幅約3.5ｍが検出された。葺石は、その裾部のみが遺存している。長さ40～50cm程の川原石を基部に並べて腰石とし、その上にやや小振

第26図　井原作出遺跡調査地点周辺の新旧地割り（1/2,000）
（細線は旧地割り、太線は新地割り、アミかけ部は新設道路を示す。）

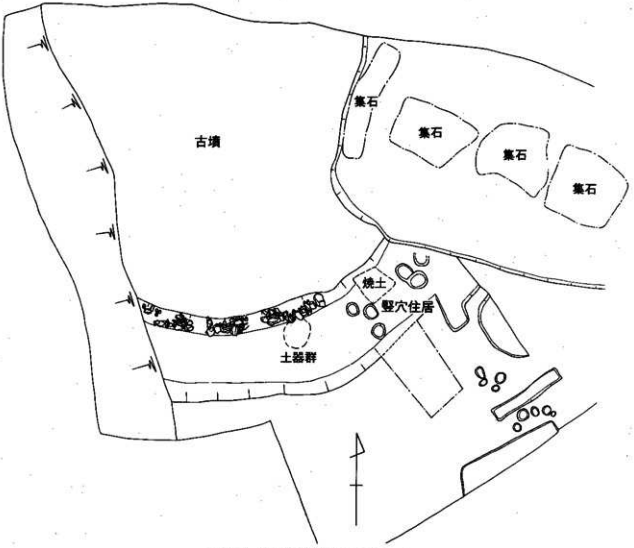
りの川原石を積みあげる。腰石は横に寝せて据えているものと墳丘斜面に立て掛けたものが混在しており、全体的にみて石積みが粗い印象をうける。この古墳が円墳であるとすれば葺石基部の弧の廻りから推計すると墳丘径は15～16mを測り、その周囲を幅5～6mの周溝がめぐっていることになる。

竪穴式住居跡は、古墳の東端を切って営まれていたが、周溝埋土の中に作られていたため壁を確認することができず、床面に広がる焼土とピットを検出するに留まった。

集石土壙は、調査区の北側で4ヶ所検出したが、古墳の葺石を集めたものと考えられ、石に交じって土師器の破片も見られた。ただし、土壙内の石はすべて礫石のみで、主体部に使用されたとみられるような石材は含まれていなかった。

出土遺物（第28図）

出土した遺物は土師器と須恵器のみで、古墳周溝底面と埋土、および住居床面から検出された。周溝底面から出土したのは、高杯の一群で、崩落した葺石の下から出土した。この付近の埋土中から出土した壺（1）と合わせて一括して古墳に供献された土器と考える。住居からの土器は、床面の焼土付近に集中して出土した土師器と須恵器を住居跡に伴うものとして、第29図に図示した。

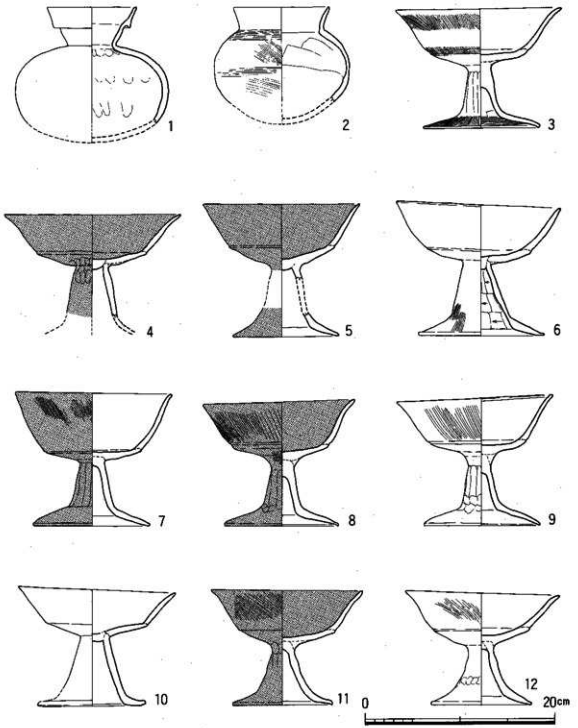


第27図　井原作出遺跡構配置図（1/150）

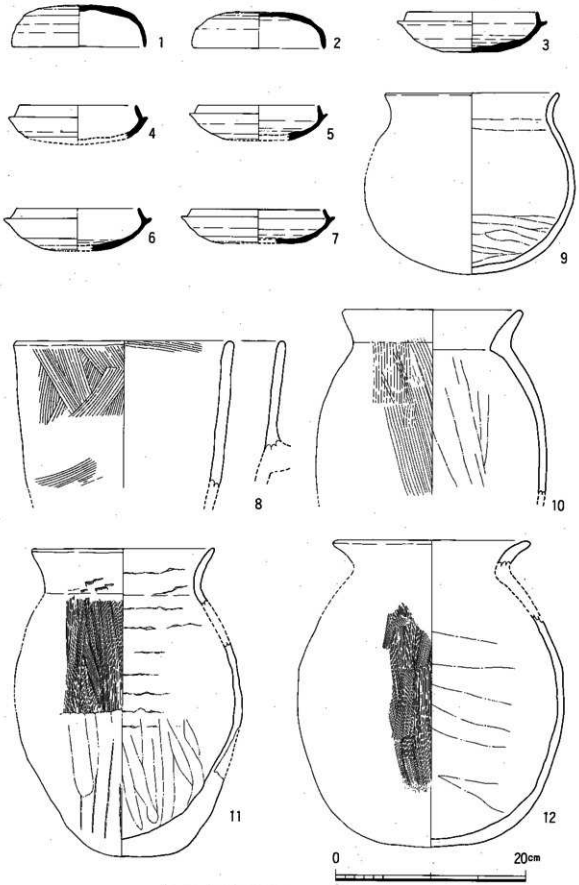
古墳供献土器（第28図、図版16）

1、2は、高杯の一群とは別に、周溝埋土中から出土したものである。1は特徴的な二重口縁の丸底壺であるが、底部は失っている。復元値で、口径9.5㎝、胴部最大径16.2㎝を測る。内外面ともナデで仕上げているが、胴部外面にはハケ目の痕跡を認める。2も底部を失っている短頸の壺形土器で、復元値で、口径10.2㎝、胴部最大径14.4㎝を測る。胴部外面にはハケ目が見られる。

3～12は高杯で、全体的に短脚の印象を受け、脚は裾部分が屈曲して開くものと、11、12のように直線的に開くものがある。3は器高12.6㎝、杯部径17.4㎝、底径12.3㎝を測る。杯部は、ナデて



第28図　井原作出古墳周溝供献土器実測図(1/4)



第29図　井原作出古墳周溝出土土器実測図（1/4）

仕上げているが、外面にハケ目の痕跡が残っている。脚裾部分の内外面にはハケ目調整を施している。

4は脚裾部分を失っており、杯部径18.6cmを測る。5は脚柱部を失っており、杯部径16.7cm、底径11.2cmを測る。6は器高13.7cm、杯部径17.4cm、底径13.3cmを測る。7は器高14.1cm、杯部径16.6cm、底径12.3cmを測る。脚柱部外面には縦方向の研磨が見られる。8は器高13.1cm、杯部径16.0cm、底径12.0cmを測る。杯部外面に粗いハケ目が残り、脚柱部外面には縦方向の研磨が見られる。9は器高13.4cm、杯部径16.5cm、底径12.5cmを測る。杯部外面には縦方向のハケ目が見られ、脚柱部外面には縦方向の研磨が見られる。10は器高12.3cm、杯部径16.8cm、底径（復元）11.4cmを測る。11は器高12.2cm、杯部径16.0cm、底径10.5cmを測る。杯部外面にハケ目が残る。12は器高11.8cm、杯部径16.2cm、底径10.6cmを測る。

住居跡出土土器（第29図、図版17）

1、2は、須恵器の杯蓋で、それぞれ、器高4.4cm、口径13.9cm、器高3.8cm、口径13.8cmを測り、いずれも天井部外面に回転ヘラ削りを施している。

3～7は、須恵器の杯身で、すべて底部外面に回転ヘラ削りを施している。完形に復元できるのは3のみで、他は底部の一部を欠いている。計測値は次のとおりで、3以外は復元値である。3は器高4.3cm、口径13.6cm、受け部径15.8cm、4は器高4.2cm、口径12.3cm、受け部径14.7cm、5は器高3.8cm、口径12.6cm、受け部径14.6cm、6は器高4.4cm、口径12.8cm、受け部径15.8cm、7は器高3.6cm、口径14.0cm、受け部径16.2cmを測る。

8は土師器の甑で、復元口径22.4cmを測る。外面上半と口縁端部内面にハケ目が見られる。

9～12は、甕である。9は器高19.2cm、口径17.9cm、胴部最大径22.2cmを測る。全体にナデて仕上げているが、内面底部に横方向のケズリが認められる。10は体部下半を失っているが、口径19.1cmを測る。胴部外面には縦方向のハケ目、内面には縦方向のケズリを施している。11は器高32.4cm、口径19.1cm、胴部最大径23.9cmを測る。胴部外面には上半にハケ目、下半にケズリが見られ、内面は下半にケズリが見られ上半はナデているが、上半には粘土帯の接合部が完全に消されずに残っている。12は肩部を失っているが、器高（復元）32.3cm、口径20.9cm、胴部最大径28.0cmを測る。胴部外面にハケ目、内面にケズリが見られる。

小結

井原作出古墳は、墳丘径15～16mの円墳であると推定され、基底部から葺石が検出された。

周溝からは古墳の葬送儀礼に使用されたとみられる土器群が発見されたが、そのなかでも高杯が最も多い。いずれも精選された胎土を使用し、器表には丁寧な研磨が行なわれたものが多く、色は濃赤褐色を呈し焼成も良い。また3、4、5、6、7、8、10では焼成後に丹塗りが施されており、いわば祭礼用の特殊な土器として作成されたものと考えられる。杯部は深く、体部と底部の境の稜が明瞭で脚柱は直線的であるが、裾部内面のケズリが不十分で厚手のものが多い。布留式の新段階に平行するものとみている。1は須恵器の大型瓮を模倣したのではなかろうか。

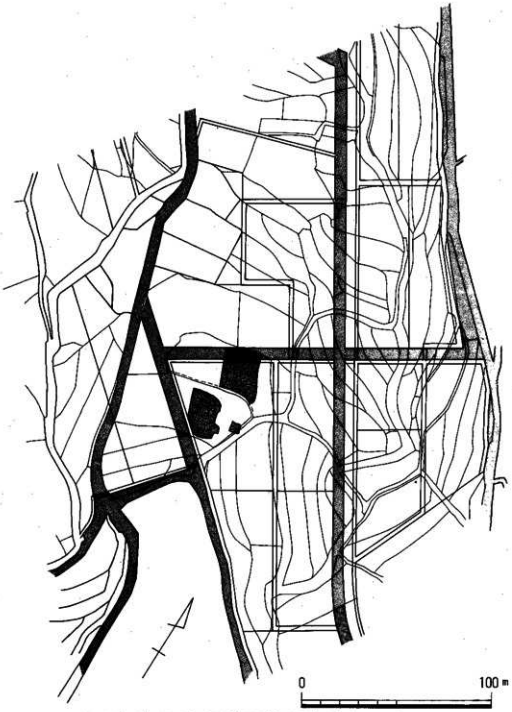
これら周溝出土土器から古墳の築造時期は布留式新段階ごろと考えられる。

この古墳裾を切って6世紀中ごろの竪穴住居が営まれていた。筆者の観察力不足により、住居の構造等を詳細に把握できなかったことに悔いが残る。後述する西堂四反田遺跡でも同様な遺構の切り合いが報告されており、古墳に対する作為的破壊を窺わせ、その歴史的背景が注目される。

6．西堂四反田遺跡

(1) 調査地点の概要

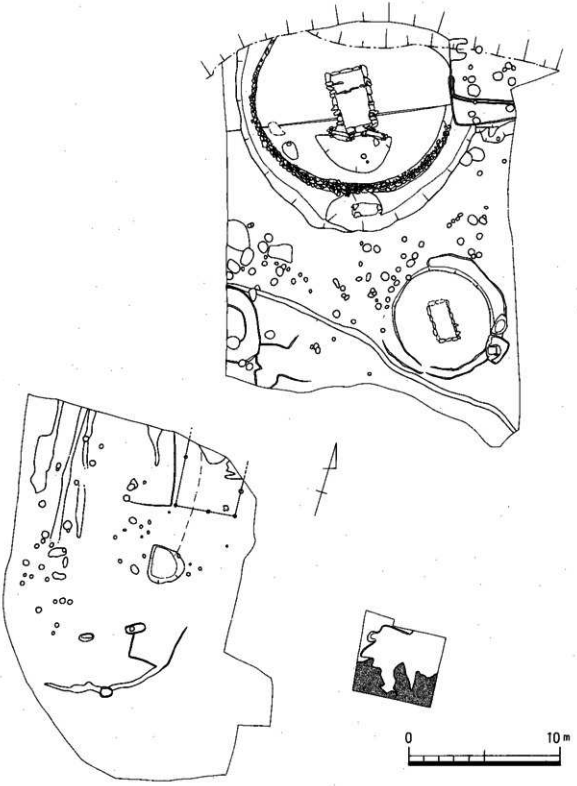
本遺跡は大字西堂字四反田に所在する。調査地区は大きく３区に分かれる。まず、分田Ⅰ工区第３号道路敷用地で掘削工事の際に古墳を発見し、急きょ調査を実施した第１地点、次に試掘調査時に須恵器の散布を確認し、削土工区であったため調査を実施した第２地点、さらに工事立合時に土器の散布を確認したが、盛土工区であったため部分的に遺構の確認調査に留めた第３地点である。



第30図　西堂四反田遺跡周辺新旧地割りと調査地点（1/2,000）
（細線は旧地割り、太線は新地割り、アミかけ部は新設道路を示す。）

上記３地点は隣接し、新しい水田区画では１区画に納まってしまうほど近い（第30図）。

第１地点では２基の古墳と２棟の切りあった竪穴住居を中心に調査した。第２地点では溝と方形、楕円形の土壙、掘立柱建物、第３地点では集石遺構を検出した。調査地点付近一帯は事前の試掘調査の際にもカマドを付設する竪穴住居や柱穴、溝を検出しており、調査地周辺に集落遺構が広く分布していることが判明している。



第31図　西金四反田遺跡遺構配置図(1/250)

(2) 1号墳

調査の概要

本古墳は第1地点調査のきっかけとなった古墳である。道路敷掘削工事の立合時に発見された。残念ながら筆者が立合約束時間に遅れたことと掘削開始早々に古墳の中心主体部が掘削されはじめたため、家室が大きく損壊してしまうこととなった。バックホー運転手が文化財調査に熟知していなかったことも被害をさらに広げてしまった。発見後さっそく工事関係諸機関に工事の中断を要請し、遺構の保存について協議したが、農林側から「道路が尾根と沢との連絡路であるため現状でもかなりの急勾配であり、古墳保護のため客土した場合、さらに勾配がきつくなって道路としての安全性を確保できない」旨の説明をうけたため、止むなく発掘調査の実施となった。調査では墳丘の形態と規模、遺存状況を確認するため道路の南側水田部まで調査区を拡大した。

墳丘および外部施設

墳丘

調査区を拡張した結果、本墳は墳丘裾部において長径14m、短径12.5mを測る東西に若干長めの円墳であることが判明した。周溝掘り方を含めると東西長16m前後になる。墳丘の盛土は既に前代の田畑開墾によってほぼ削平され、地下に構築されていた石室の基底部と周溝を残すのみとなり、北側墳裾も開墾によって消失していた。また北東墳裾は6世紀中ごろの竪穴住居に削られていた。

墳丘斜面には葺石が施されていた。葺石に使用されていたのはこぶし大から人頭大の花崗岩、片麻岩の川原石が大半であったが、やや大柄な石が多くみられ、全般的には積みが粗く感じられた。葺石の最下段には大きな石が腰石として並べられていた。この葺石は直接地山面に葺き並べられたのではなく、墳丘地山を削りだした仮の墳丘基底部の外側に土を盛り固めながら、石の内半分を盛土に埋め込みながら斜めに積み上げていったことが墳丘南土層の観察によって明らかになった（第33図）。葺石積み上げの傾斜角度は40度前後を測る。

横穴式石室

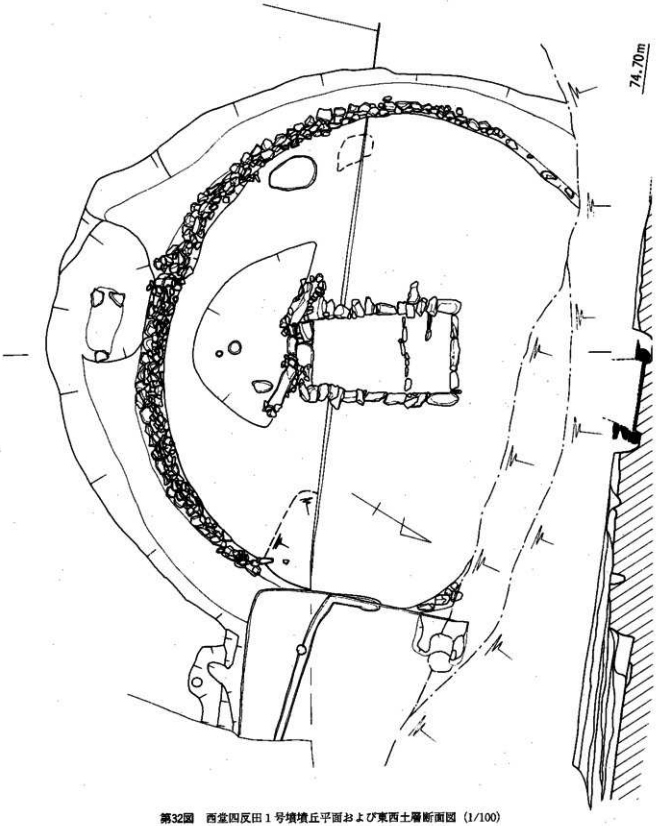
墳丘の中心やや南寄りの位置に横口を南に向けて開く古式の横穴式石室が築かれていた。前代の開墾によって石室上半部、羨道、墓道が消失しており、さらに石室の大半がバックホーによって破壊されていたが、辛うじてその平面プランは腰石の配置で、また入り口付近は遺存していた石材の使用方法を復元することによって、その概要を推察することができた。

墓道は側壁が遺存していないため、構造が明瞭ではないが、羨道前面にわずかに残るくぼみから推し量れば横口から斜め上方にゆるやかに昇り上がる構造であったことが考えられる。

石室は主軸をN－30°－Wにとり平面プランは主軸長3.6m、幅は羨道側で1.8m、奥壁側で2.2mを測り、いわゆる羽子板状に奥に向かって広がるプランを有する。

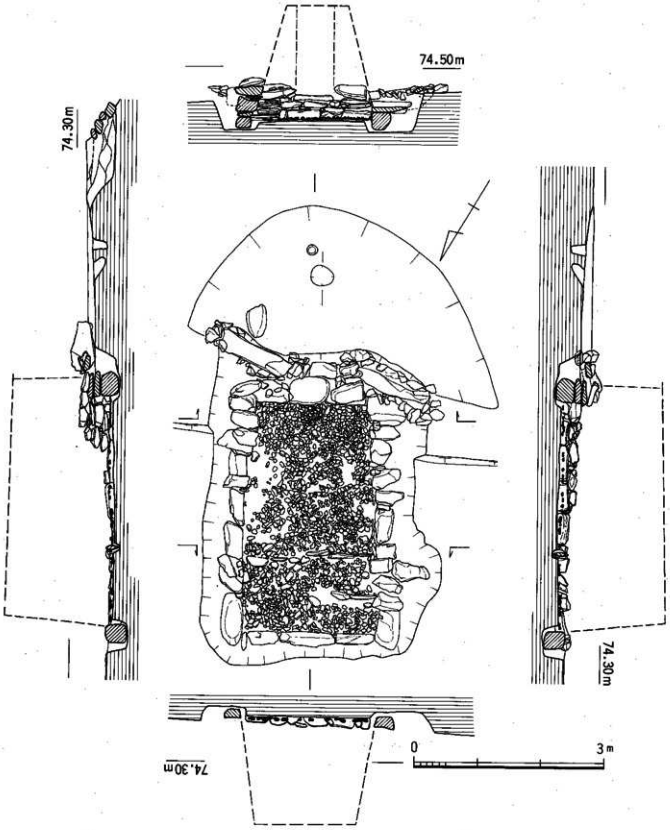
側壁は墳丘中央部に4.8m×3.2mの長方形土壙を掘り、さらに土壙の周縁を20cmほど1段掘り下げてその中に腰石をしっかりと据えた後、粗い割石を積み上げながら墳丘土盛りを行なって石室を構築している。最下段の腰石は床面下に深く埋め込まれ壁面に姿を見せるのはせいぜい10～15cmほどで、壁面に表出した部位が少ないため、見た目では明瞭に腰石と意識できない。

床面には花崗岩の小円礫を敷いていた。また奥壁から南1.1mに奥壁と平行して板石を立て並べて屍床を区画し、さらにそれと奥壁との中間西側壁添いに2枚の板石を立てて屍床をさらに2区画に仕切っている。石室構築当初から2体埋葬を想定していたことを窺わせる。仮に奥壁側から第1



第32図　西堂四反田1号墳墳丘平面および東西土層断面図（1/100）

屍床、第2屍床と称する。仕切石の石列が西側寄りにやや開き加減に立て並べられており、遺体の肩部を意識していることがうかがえること、仕切石内中央西部の仕切りは遺体頭部の間仕切りを意



第33図　西堂四反田1号墳石室実測図(1/60)

図したものと考えられ、西側に設けられていること、第1屍床の副葬鉄刀が切先を東向きにして副葬されていることなどから、遺体は頭位を西に向けて埋葬されたものと考えたい。

石室出土遺物（第34～39図、図版24～29）

出土状態

石室床面からは土器、鉄器、人骨が出土した。土器は細片であったため詳細な出土地点を記録していなかったが、他の遺物については出土地点がほぼ判明している。

遺物の出土地点は、大きくは第1屍床、第2屍床、屍床外A、B、C、Dの計6地点に分けることができる。第1、第2屍床ともに副葬遺物が原位置を保って出土しており、かつ屍床外に集骨された人骨があることから、この石室において少なくとも初葬を含めて3回の葬送が行なわれたものとみている。

第1屍床からは頭部右側から鉄大刀1振と鉄刀子1本、足元から朱塊が出土した。鉄大刀と刀子は柄をそろえて頭部の右横に並べて置かれていた。朱塊は有機質の容器に納められていたのだろうか、一塊になっていた。

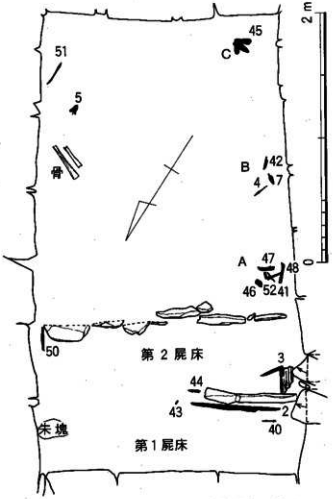
第2屍床では頭部左上方で鉄鏃と鉄剣片が出土した。鉄鏃は刃を北にむけ茎を側壁と並行にそろえ一塊になって出土した。有機質素材の矢筒に納めて副葬されていたのかもしれない。鉄剣片は刃部のみの出土で鉄鏃の上から寄り掛かって出土しており、原位置を保っているものではない。

また東隅から鉈が一本出土しているが、床面に密着して出土し、完形を保っていたことから、原位置の状態を維持しているとみられる。

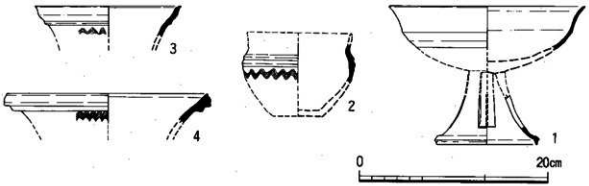
屍床外A地点では鉄鎌2個、刀子1個、鉈1個、鉄斧1個など農工具のみが固まって出土した。B地点では鉄鏃2点と刀子1点が、C地点では三又鍬1個、D地点では鉄鏃、鉈が散乱状態で出土し、その北に肢骨がそろえて置かれた状態で発見された。肢骨は床面から若干浮いて出土している。

A地点の一群は小形農工具に限定されて出土し、欠損もなく折り重なって出土しているため、有機質の素材で作られた収納器に収められて屍床外に副葬されていた可能性がある。

B群以下は出土状況に規則性がみと



第34図　西堂四反田1号墳石室遺物出土位置図（1/30）
（図中の遺物番号は第36～39図の鉄器実測図の番号に呼応する）



第35図　西宮四反田１号墳石室出土須恵器実測図（1/4）

められず、散乱した状態で出土していることから、追葬にともなう石室内清掃によって原位置から移動し、側壁側にかたづけ寄せられたものであろう。

須恵器（第35図、図版26）

いずれも小片のみの出土である。石室内に副葬されていたものか判然としない。しかし、１は古式の資料で、小片ながら全形を窺えるものであり、２も１と同期の資料である。これら資料は当古墳の築造期を考える上で重要である。

１は高杯で口縁、脚下半分片が出土している。いずれも非常に器壁が薄く作られる。口縁部は外に開き、端部は先細りに納める。脚柱から裾部にかけてはあまり開かず立ち気味で、口縁径に比べ脚裾径は小さい。裾端は鋭く下方に摘み出している。脚柱部には四方に長方形スカシ孔が切られている。

２は把手付き椀の胴部片であるが残存部位には把手の痕跡が認められない。同部上方で一度内湾してから口縁端部にかけて小さく外反するものであろう。胴部最大径下に周期は短いが丁寧に描かれた波状文がめぐる。

３は甕の口縁のみである。頸部は緩やかに上外方に外反し、小さい三角凸帯を経て内湾気味に開き、口縁端部は外に摘み出す。頸部上面に一部波状文が認められる。

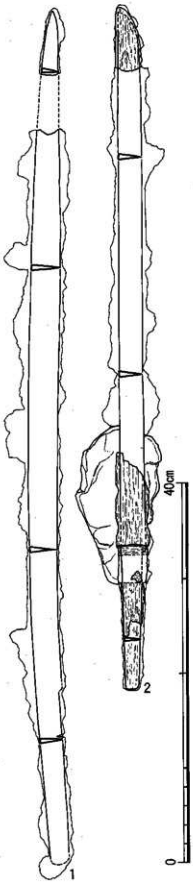
４は壺口縁片である。端部は断面M字形に肥厚しており、その直下に周期の細かい波状文が認められる。

大刀（第36図２、図版24）

第１屍床に副葬されていた。柄下に床石が錆着している。全長71.8㎝、身の長さは鍔に隠れており明らかではない。刃渡は56.3㎝、身幅は2.1～2.7㎝、背の厚さは7.5㎜を測る。身には鞘の木質が、柄には柄の木質が錆着して遺存している。鞘口には幅９㎜ほどの木質材がはめこまれていたらしく、鞘、柄に直行する木目の木質痕が認められる。鍔は鹿角製で、幅3.0㎝を測るが、表面の風化、劣化が著しく、表面文様帯の有無については明らかではない。茎の長さは14.2㎝、幅2.2㎝ほどで、目釘穴の位置は肉眼では確認できない。

鉄剣（第37図３）

第２屍床の頭部で鉄鏃塊上に寄り掛かって出土している。原位置から移動したものとみられ、柄部が折損しているため、第２屍床被葬者の副葬品であるのか明確でない。切先付近に床石が錆着している。現存長20.9㎝、身幅は2.2㎝～3.0㎝を測る。鎬は不明瞭で断面はレンズ状をなす。身の厚



第36図　西堂四反田１号墳
出土鉄器実測図①（1/4）

さは５㎜前後、鞘の木質は良好に残っており、鞘の幅3.6㎝、厚さ1.5㎝を測る。切先はやや丸く、実戦用というよりは祭礼用の威信財として用いられたものであろう。

鉄鏃（第37図４～17、第38図18～39、図版24）

４、７はＢ区、５はＤ区、他は第２屍床の西側頭部から出土している。９、11は出土状態を良く残しているが、錆の進行が著しく、劣化が進み、保存状態は芳しくない。総数30本分前後になろう。

鏃身部の形態差によって以下のように大きく３類に別れる。

Ⅰ類は鏃身部が三角形で逆刺を有するもので、４、５、７をいう４、５は逆刺が若干外に開くが、４は先端が鋭く尖るのに対して５は丸く納めている。また７は鏃身部長に比べて幅が狭く、逆刺は浅く小さい。４には箆被が認められる。以上の３点はいずれも屍床外から発見されている。

Ⅱ類はいわゆる片刃箭式長頸鏃で、関が鋭角になるもの（８、12～15他）鈍角をなすもの（16、17他）、関が不明瞭なもの（21）に細分される。第２屍床頭部からの一括出土品で、大半が箆被を有しているとみられる。完全に旧形に復元することができなかったが、刃部と茎部片（12～39）は全て同一箇所からの出土である。

Ⅲ類は６の１点のみで鏃身部が柳刃形をしている。第２屍床からの一括出土品のひとつであるが残存部の接合関係が復元できなかったため、その他の部位についての詳細はわからない。

刀子（第38図40～44　図版25）

40は第１屍床、41はＡ区、42はＢ区、43は第１屍床大刀の切先の北東部、44は南隣でそれぞれ出土している。42～44は欠損品で、既に原位置を保っていない。

40は全長14.2㎝、身部の長さ10.5㎝、刃幅1.2～2.3㎝、背の厚さ3.8㎜を測る。茎長は3.5㎝前後、幅1.4㎝程を測る。柄の木質を残している。

41は全長12.5㎝、身部の長さ8.7㎝、刃幅0.7～1.6㎝、背の厚さ3.5㎜を測る。茎長は3.8㎝、幅3.8㎝程を測る。柄の木質を残している。

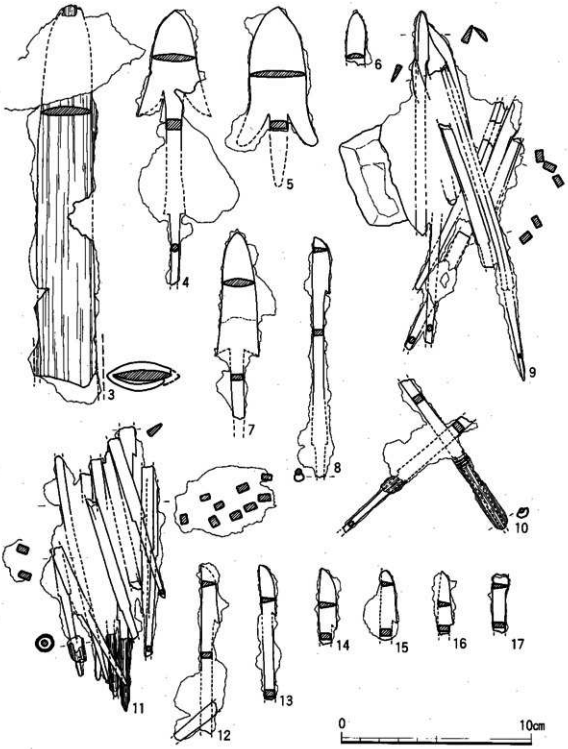
42は全長12.0㎝、身部長8.4㎝、刃幅0.8㎝～1.5㎝、背の厚さ３㎜を測る。茎長は3.6㎝、幅1.0㎝程を測る。柄の木質を残している。

43は柄部を欠失している。残存長9.0㎝、身部長7.3㎝、刃幅1.8㎝、背の厚さ４㎜、幅1.2㎝を測る。柄の木質を残している。

44は切先を欠失する。残存長9.4㎝、最大刃幅1.9㎝、背の厚さ4.3㎜を測る。茎長は4.1㎝、幅1.1㎝を測る。柄の木質を残している。

馬鍬（第39図45、図版24～45）

石室のC区、横口西袖床面からの出土である。鍬身裏側が上を向き柄壺と三本の刃を床面につけた状態で出土した。錆が鍬全体を被覆しており、錆の進行に伴う劣化のため細部の観察が難しいので、大まかな形態を図上復元するにとどまる。三つ又の鉄製馬鍬である。身の長さ12.5cm、幅13cmほどを測る。中央の刃で又部から刃先まで約10cmを測る。両脇の刃は、柄壺から続く台部からほぼ直線的に伸び、刃先は身表側に少し跳ね上がっている。



第37図　西堂四反田Ⅰ号墳出土鉄器実測図②（1/2）

板状鉄斧（第39図46、図版24～46）

A区からの出土である。全長約9.2㎝、刃部長5.3㎝、幅7.8㎝、袋部長3.9㎝、幅約4.0㎝を測る。厚さ3㎜の鉄板素材とし、刃は台形状に切り出して明瞭な肩を作り、基部を両側から内に折り曲げて袋部を作り出している。刃は薄く貧弱な作りであり、実用品としてではなく儀礼用仮器として製作されたものと考える。

鉄鎌（第39図47、48、図版24～47、48）

いずれも薄手曲刃の鎌で、A区からの出土である。

47は全長11.8㎝、身幅は基部で3.0㎝、中央部で2.5㎝、背の厚さは2.5㎜を測る。基部の折り返しは刃に対してほぼ直角である。

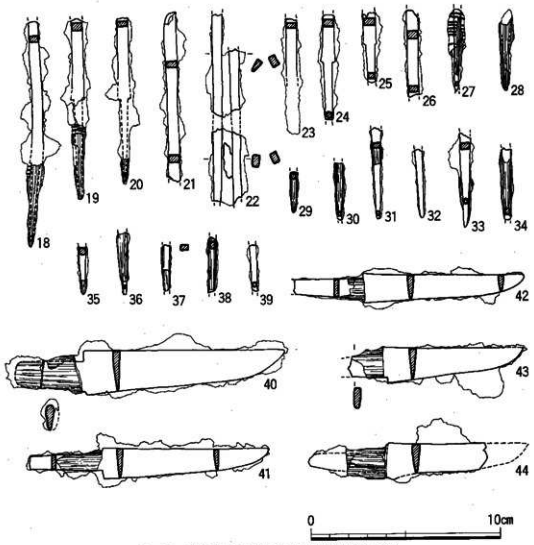
48は全長15.1㎝、身幅は基部で3.2㎝、中央部で3.0㎝、背の厚さは2.3㎜を測る。47に比べて刃が長く先端部の曲カーブが浅い。基部の折り返しは刃に対して鋭角である。

鑿（第39図49、50、図版24～49、50）

49は出土地不祥。50は第2屍床東端部からの出土である。

49は中途が欠損していて、全形は不明。刃部は丸く納め、左に屈曲する。

50は本体が腐食しきっており、被覆する錆に残された痕跡によってその形態を知ることができる。



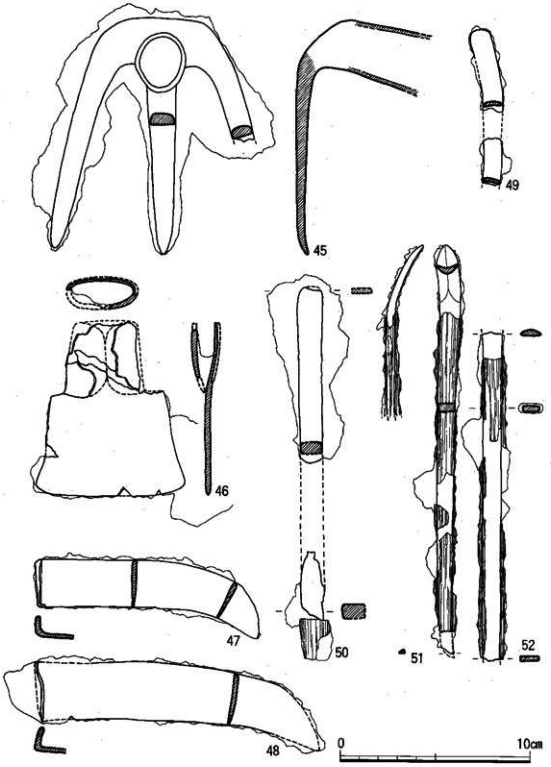
第38図　西壺四反田1号墳出土鉄器実測図③（1/2）

現場での計測では現存長19.4㎝を測る。刃先端部を丸く納めるのは49と同様である。刃先端から17.5㎝で木質の柄の痕跡が残っている。

鉈（第39図51、52、図版24～51、52）

51はD区、52はA区から出土した。

51は全長21.6㎝、刃部は反りをもつ断面三日月形で、表面に鎬を磨ぎだし、刃の裏には裏スキがある。刃幅1.2㎝、刃先は左に傾く。下端には片刃の刃を持ち、中央部には柄の木質が遺存する。



第39図　西堂四反田１号墳出土鉄器実測図④（1/2）

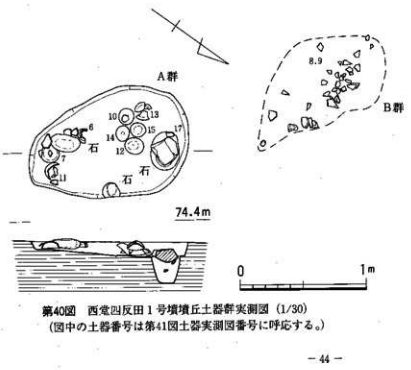
52は刃先を欠失している。柄の木質は刃部下から4.5㎝までは茎を巻いているが、それから下では両側面と裏面には木質が遺存しているものの表側では認められない。下部は欠失している。

墳丘土器群

古墳の横口部の西５ｍ地点の葺石列内側に主軸長1.2ｍ、幅0.9ｍ弱の卵形の浅い土壙が検出され、底面に土師器椀６個、須恵器瓶２個、同高杯１個がいずれも土壙の底に伏せ置かれた状態で検出された。これを墳丘土器群Ａ（以下Ａ群）と呼ぶ。さらに土壙の北西部遺構面上で破砕した須恵器の壺（甕）２個が出土した。こちらを墳丘土器群Ｂ（以下Ｂ群）と呼ぶ。Ｂ群では土器片が遺構面にほぼ張りついた状態で出土しており、Ａ群同様に本来は浅い土壙に破砕された後埋め納められていたか、あるいは同一土壙内であったのかもしれない。さらに、Ａ群土壙の北西端に川原石で上面を覆われた深さ30㎝の小穴が掘られており、穴埋土内から土器（６、７）が出土した。墳丘築造あるいは葬送に伴う儀礼行為の一部が行なわれたものであろう。さらにＡ、Ｂ群から石室横口正面にかけての葺石斜面や古墳周溝底部に古式の須恵器と同期の土師器が集中して出土している（第42図）。この古墳における葬送に伴う土器を用いた儀礼行為が、この領域を中心に行なわれたことをうかがわせる。また土壙と小穴出土土器との間には明らかに形式差がみられる。周溝出土の須恵器にも同様な状況を呈していることから、ここにおいて断続的に儀礼行為を行なっていたものと思われる。

出土土器（第41図、図版26）

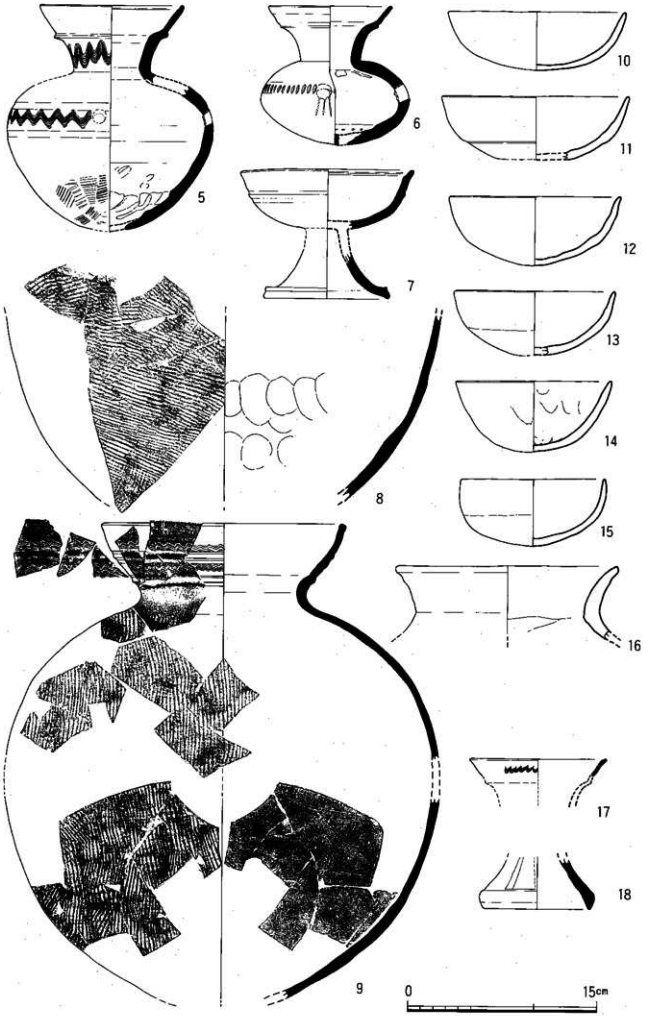
１～10はＡ群から出土した。５は大形、６は小形の瓶である。５は胴部と頸部に丁寧な波状文がめぐり、６は胴部に櫛描列点文がめぐる。６の注口部には縦方向に三条の沈線が刻み込まれている。７は無蓋高杯である。杯部は内湾ぎみに立ち上がり口縁端部は外に向けて甘く摘み出す。脚部はなだらかに弧を描き裾部にいたるが、口縁部同様下方へ甘く摘み出す。５～７はいずれも焼成が甘く、やや軟質で、器壁も厚手である。８は甕胴下半部片である。外面では横方向の平行タタキがみられ、内面は当具痕を丁寧にナデ消す。９は壺である。胴部は若干縦長の球形で口頸部は内湾しながら開き、口縁端部は凸面をなす。口頸部外面に２条の櫛描波状文を配し、胴部外面には縦の平行タタキ、内面は当具痕を丁寧にナデ消している。17は瓶の口縁片で、口縁下に細かい波状文がみとめられる。18は高杯脚部で長方形スカシがおそらくは３方に切り込まれるものと思われる。



第40図　西殿四反田１号墳墳丘土器群実測図（1/30）
（図中の土器番号は第41図土器実測図番号に呼応する。）

周溝出土土器（第43～49図、図版27～29）

前項で述べたように古墳祭祀に関連する土器は周溝内からも出土している。また古墳の周辺には６世紀代半ば以降に営まれた竪穴住居などの集落遺構が点在し、それに伴い古墳周溝内に多くの土器が投棄された。周溝



－45－ 第41図　西堂四反田１号墳墳丘土器群出土土器実測図(1/3)

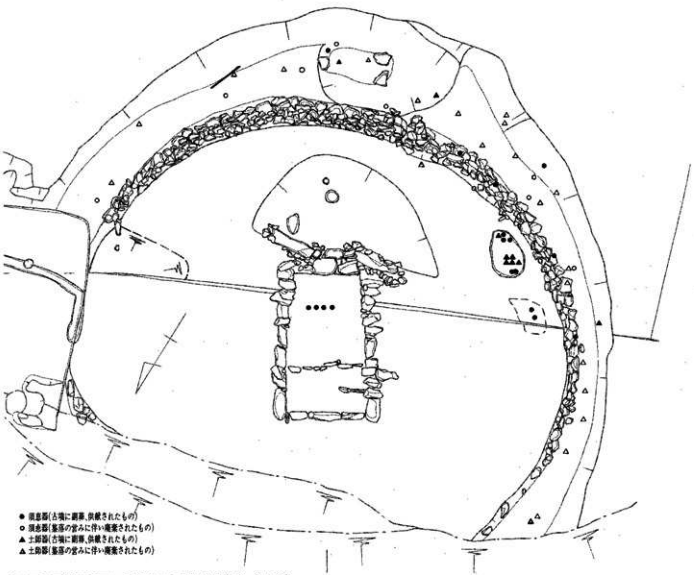
をゴミ棄て場として利用していたわけである。集落遺構に関連した土器は周溝内のいたるところから出土し、祭祀関連土器ほど出土地点の偏りは認められない。出土土器はパンコンテナ40箱分にも及ぶが、器形が把握できる程度に復元できた土器のみ図化掲載した。

須恵器（第43、44、49図、図版27～29－19～134）

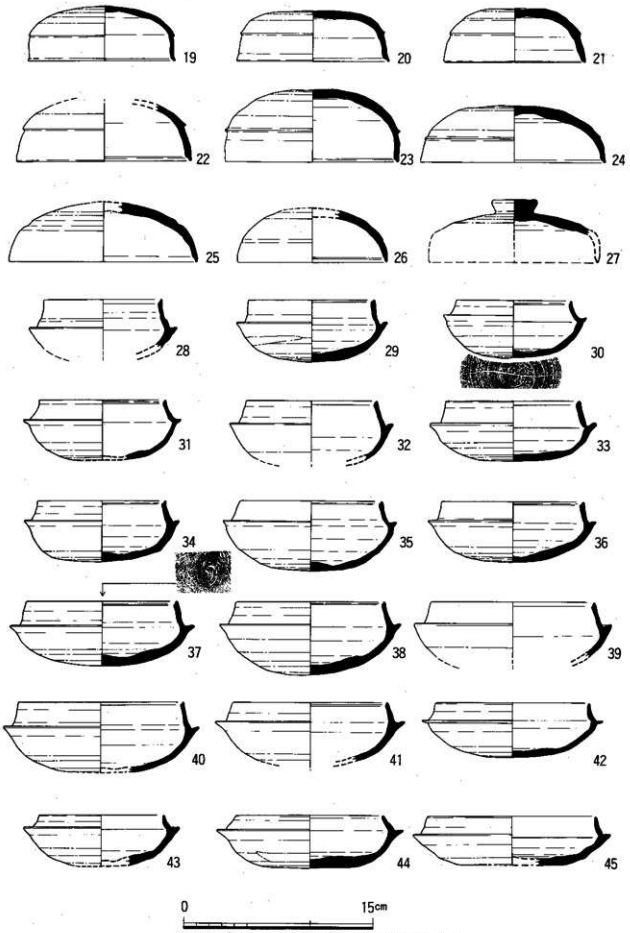
19～26は杯蓋である。口縁径が12㎝弱で稜のシャープなA類（19、20）と13.5㎝～14㎝で大形化したB類（22、23）、15㎝弱を測り稜が鈍く口縁端部も丸く納めるC類、C類が小形化したD類の4類に大別される。27は壺蓋であろう。天上部中心に扁平のつまみを貼りつける。

28～45は杯身である。口縁径が9～10.3㎝を測る小形で立上り部が長く、立ち気味で体部のヘラ削りが丁寧に行なわれるa類（28～34）、口縁径が11㎝代でa類が大型化したb類（35～40）立上り部の短化・内傾傾向が強まり、口縁端部を丸く納めるc類、c類の小形化が図られたd類に大別できる。

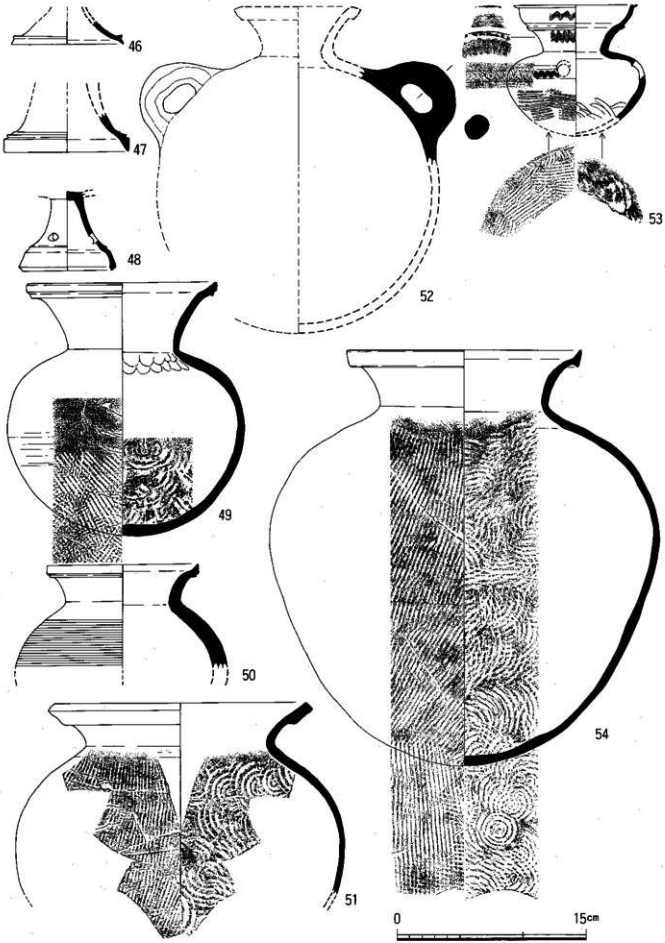
46～48、134は高杯である。46は裾広がりに開く脚裾の端面を下方に摘み出す。47、48では脚裾が下方に踏張る形態を有し、47は端部の断面が逆三角形を呈す。48では脚柱部に円孔を設ける。134は脚部の一部が失われているが、ほぼ全形を知りうる。無蓋で杯部外側面に櫛描波状文がめぐ



第42図　西堂四反田1号墳周辺の土器出土傾向（1/100）



第43図　西堂四反田１号墳周溝出土土器実測図①（1/3）



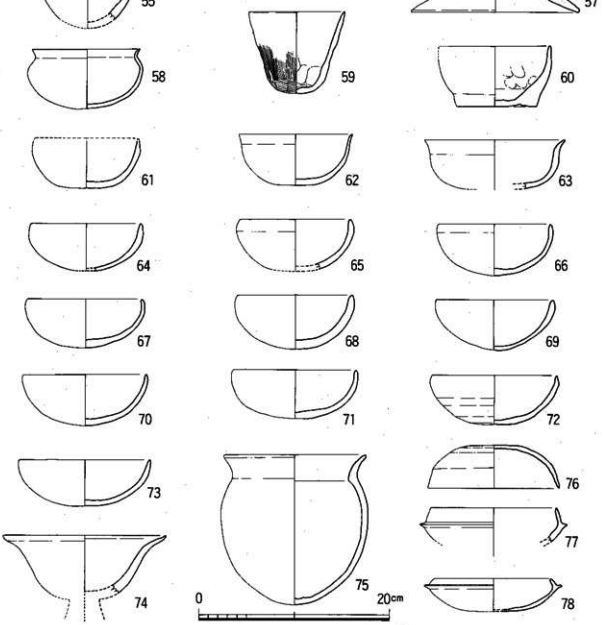
第44図　西堂四反田１号墳周溝出土土器実測図②（1/3）

る。やや長脚化した脚柱部の四方に長方形スカシが施されている。墳丘土器群Aの西側葺石斜面に倒れかかって出土した。

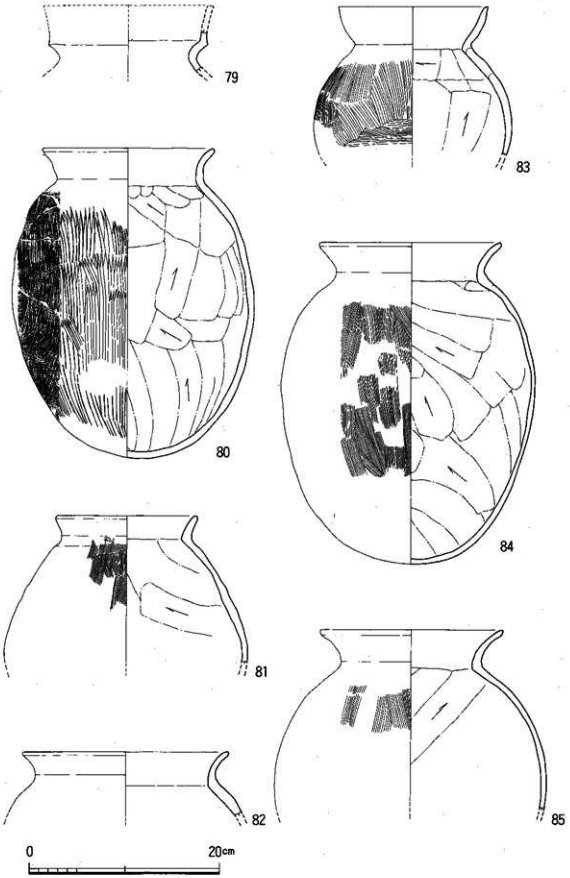
49、135、136、137は壺、50、51、54は甕である。49、54はともに墳丘土器群の西周溝の埋土の中層から破片がまとまって出土した。

52は大型提瓶の把手片と考えられる。胴部の推定復元径は22.4㎝、胴部に比べ把手が異様に大きいのが特徴である。

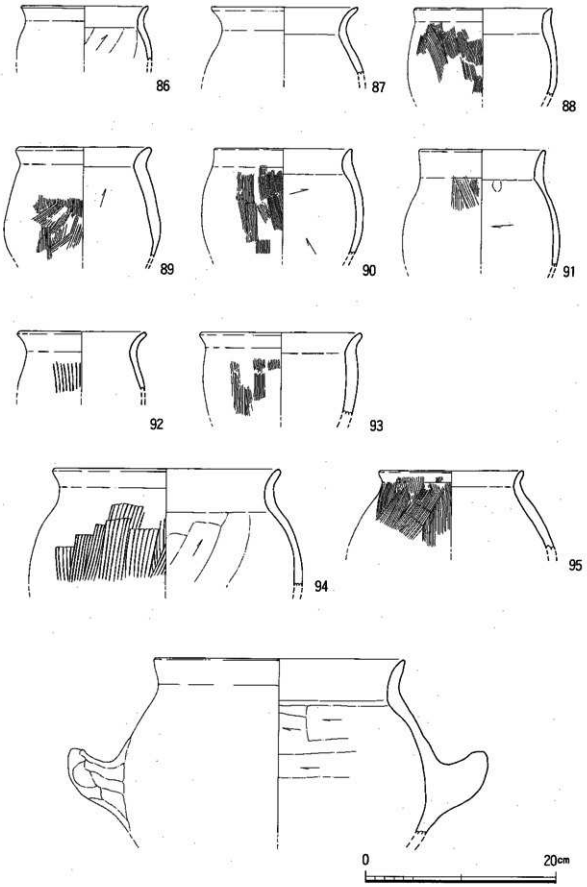
53は甕である。口頸部に2条、胴部には1条の櫛描波状文がめぐり、胴下半部には横平行タタキ



第45図　西堂四反田1号墳周溝出土土器実測図③（1/4）



第46図　1号墳周溝出土土器実測図④（1/4）



第47図　西堂四反田１号墳周溝出土土器実測図⑤（1/4）

痕、内面に当具痕を残す。

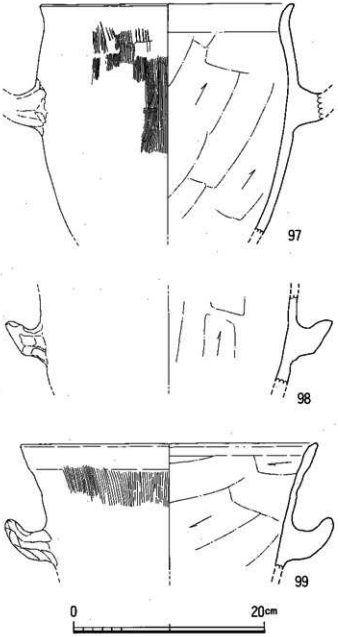
137－144は大形器台片で、同一個体片である。脚柱部には縦方向に激しく振れた櫛描波状文が、裾部には波の浅い波状文が施される。

土師器（第45～48図、図版28）

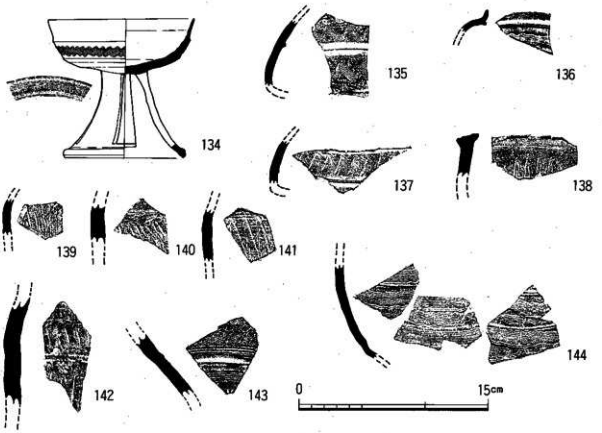
55、59、60、79、80、83、84、85などは墳丘土器群周辺の周溝から集中して出土したもので、比較的古式の様相を呈している。古墳の葬送儀礼に使用された土器群の可能性が高い。

60は平底で底部に板圧痕が残る。朝鮮系軟質土器の流れを汲むものかもしれない。76は須恵器を模倣したいわゆる赤焼きの土器である。77は二重口縁壺の口縁片である。

80、84はほぼ完形に復元された。墳丘土器群西側の周溝下層埋土に据え置かれており、押しつぶれた状態で出土した。卵形の胴部に頸がよく締まり、大きく外反する短い口縁部がつく。器壁はヘラ削りによって薄く仕上げられる。外面はタテハケのみが残る。



第48図　西堂四反田１号墳周濠出土土器実測図⑥(1/4)



第49図　西豊四反田１号墳周溝出土土器実測図⑦（1/3）

挿図番号	図版番号	器種	出土遺構等	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備考
1	26	高杯	1号墳・石室内	11.0	15.5	8.3	白色砂粒	淡灰黒色	堅緻	
2	26	壺	1号墳・石室内				混白色斑粒	淡灰黒色	堅緻	
3	26	甕	1号墳・石室内		11.5		黒石英粒砂質土	淡灰黒色	良好	
4	26	広口壺	1号墳・石室内		15.8		白色砂粒	淡紫黒灰色	堅緻	
5	26	甕	1号墳・墳丘A	17.9	11.1		白色砂粒	暗灰白色	堅緻	良好
6	26	甕	1号墳・墳丘A	11.1	9.4		黒色斑粒	明紫灰色	堅緻	
7	26	高杯	1号墳・墳丘A		13.4	8.7	白色砂粒	明灰色	良好	
8		壺	1号墳・墳丘B				精良	暗青灰色	堅緻	
9		壺	1号墳・墳丘B		19.4		白色砂粒	青灰色	堅緻	
10	26	椀	1号墳・墳丘A	4.6	14.0		白色砂粒	赤褐色	良好	
11	26	椀	1号墳・墳丘A		14.6		白色砂粒	淡黄茶黒色	良好	有黒斑
12	26	椀	1号墳・墳丘A	5.5	13.4		白色砂粒	黄茶色	良好	
13	26	椀	1号墳・墳丘A	5.1	12.6		白色砂粒	明茶黒灰色	良好	有黒斑
14	26	椀	1号墳・墳丘A	5.6	12.2		白色砂粒	淡黄茶灰色	良好	
15	26	椀	1号墳・墳丘A	5.3	11.3		白色砂粒	淡茶灰色	良好	有黒斑
16		甕	1号墳・墳丘A		17.2		白色砂粒	淡黄茶色	良好	
17		甕	1号墳・墳丘A		10.6		白色砂粒	暗灰色	良好	石蓋穴内
18		高杯	1号墳・墳丘A			8.3	白色砂粒	暗灰色	良好	石蓋穴内・脚部のみ
19	27	杯蓋	1号墳・周溝	4.4	11.3		白色砂粒	暗灰色	堅緻	
20		杯蓋	1号墳・周溝	4.0	11.8		白色砂粒	暗灰色	堅緻	
21	27	杯蓋	1号墳・周溝	4.3	11.1		白色砂粒	淡茶灰色	良好	

挿図番号	図版番号	器種	出土遺構等	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備考
22		杯蓋	1号墳・周溝		13.5		白色砂粒	青灰色	堅緻	
23	27	杯蓋	1号墳・周溝		13.6		灰色砂粒 白色砂粒	淡灰色	良好	
24	27	杯蓋	1号墳・周溝	4.5	14.6		白色砂粒	暗灰色	堅緻	
25		杯蓋	1号墳・周溝		14.8		白色砂粒	暗灰色	堅緻	
26		杯蓋	1号墳・周溝		11.8		白色砂粒	暗灰色	堅緻	
27		壺蓋	1号墳・周溝				白色砂粒	青灰色	堅緻	
28		杯身	1号墳・周溝		9.2		白色砂粒	淡灰色	良好	
29	27	杯身	1号墳・周溝	4.9	9.9		白色砂粒	青灰色	堅緻	
30	27	杯身	1号墳・周溝	4.5	9.0		白色砂粒	淡灰色	堅緻	ヘラ記号あり
31	27	杯身	1号墳・周溝		9.9		白色砂粒	暗灰色	堅緻	
32		杯身	1号墳・周溝		10.3		白色砂粒	灰色	堅緻	
33	27	杯身	1号墳・周溝	4.8	10.3		白色砂粒	灰色	良好	
34	27	杯身	1号墳・周溝	4.8	10.1		白色砂粒	青灰色	堅緻	
35	27	杯身	1号墳・周溝	5.5	11.2		白色砂粒	青灰色	堅緻	
36	27	杯身	1号墳・周溝	4.8	11.2		白色砂粒	暗灰色	堅緻	
37	27	杯身	1号墳・周溝	5.1	11.8		灰色砂粒 白色砂粒	青灰色	堅緻	内面底タタキ痕
38	27	杯身	1号墳・周溝	5.8	11.7		白色砂粒	青灰色	堅緻	内面底タタキ痕
39		杯身	1号墳・周溝		12.9		白色砂粒	青灰色	良好	
40	27	杯身	1号墳・周溝		13.0		白色砂粒	淡灰色	堅緻	蓋被せで焼く
41		杯身	1号墳・周溝		12.1		白色砂粒	青灰色	良好	
42	27	杯身	1号墳・周溝	4.3	12.1		白色砂粒	暗灰色	良好	
43		杯身	1号墳・周溝		9.8		白色砂粒	暗灰色	堅緻	焼ふくれあり
44	27	杯身	1号墳・周溝	4.2	11.5		白色砂粒	青灰色	堅緻	
45	27	杯身	1号墳・周溝		13.2		白色砂粒	淡灰色	堅緻	
46		高杯	1号墳・周溝			8.7	精良	青灰色	堅緻	脚部のみ
47		高杯	1号墳・周溝			9.7	白色砂粒	青灰色	堅緻	脚部のみ
48	27	高杯	1号墳・周溝			7.0	白色砂粒	青灰色	堅緻	3つの円孔、脚部のみ
49	28	甕	1号墳・周溝	20.0	14.8		白色砂粒	青灰色	堅緻	内面に同心円文
50		甕	1号墳・周溝		11.9		白色砂粒	灰色	良好	
51	28	甕	1号墳・周溝		19.8		白色砂粒	青灰色	堅緻	
52	27	提瓶・把手	1号墳・周溝				角閃石粒	暗灰白色	堅緻	器表に灰
53	27	瓶	1号墳・周溝		9.2		白色砂粒	青灰色	堅緻	肩部に灰釉
54	28	甕	1号墳・周溝	32.9	18.3		白色砂粒	黒灰色	堅緻	
55	28	直口壺	1号墳・周溝		9.5		白色砂粒	淡赤茶	良好	
56		高杯	1号墳・周溝		14.4		白色砂粒	暗赤茶色	良好	杯部のみ
57	28	高杯	1号墳・周溝			17.6	白色砂粒	淡赤茶色	良好	脚部のみ
58	28	椀	1号墳・周溝	6.3	11.2		白色砂粒	淡赤茶色	良好	有黒斑
59		壺	1号墳・周溝	8.6	10.1		白色砂粒	淡赤茶色	良好	
60	28	椀	1号墳・周溝	6.4	11.7		白色砂粒	淡赤茶色	良好	
61		椀	1号墳・周溝		10.8		白色砂粒	淡黄茶色	良好	
62		椀	1号墳・周溝	5.4	11.7		白色砂粒	赤茶褐色	良好	
63		椀	1号墳・周溝		14.6		雲母	赤茶色	良好	
64	28	椀	1号墳・周溝	5.0	11.4		赤色粒 角閃石粒	淡赤茶色	良好	
65	28	椀	1号墳・周溝		11.6		白色砂粒	淡赤茶色	良好	
66	28	椀	1号墳・周溝	6.5	11.8		赤色粒	桃褐色	良好	

挿図番号	図版番号	器種	出土遺構等	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備考
67	28	椀	1号墳・周溝	5.2	12.0		白色砂粒	淡茶褐色	良好	内面に炭化物付着
68	28	椀	1号墳・周溝	5.7	12.0		白色砂粒	明赤茶色	良好	
69	28	椀	1号墳・周溝	5.3	12.3		白色砂粒	明赤茶色	良好	有黒斑
70	29	椀	1号墳・周溝	5.4	12.9		花コウ岩粒	赤褐色	良好	有黒斑
71	28	椀	1号墳・周溝	5.1	12.8		白色砂粒	赤茶褐色	良好	有黒斑
72		椀	1号墳・周溝	5.2	13.0		精良	淡黄茶色	良好	
73	29	椀	1号墳・周溝	4.9	13.7		角閃石粒	暗茶褐色	良好	黒色磨研
74		高杯	1号墳・周溝		17.0		白色砂粒	淡茶灰色	良好	杯部のみ
75		壺	1号墳・周溝	15.8	14.7		白色砂粒	淡黄茶色	良好	
76	29	杯蓋	1号墳・周溝	4.6	13.7		白色砂粒	淡黄灰色	良好	
77		杯身	1号墳・周溝		13.2		白色砂粒	赤茶褐色	良好	
78		杯身	1号墳・周溝	3.5	12.2		精良	淡茶黄色	良好	
79		壺	1号墳・周溝				白色砂粒	淡灰黒色	良好	
80	29	壺	1号墳・周溝	32.8	17.6		白色砂粒	淡赤茶色	良好	有黒斑
81	29	壺	1号墳・周溝		14.5		白色砂粒	淡茶色	良好	
82		壺	1号墳・周溝		21.5		白色砂粒	淡白茶色	良好	
83	29	壺	1号墳・周溝		15.4		白色砂粒	淡赤茶色	良好	
84	29	壺	1号墳・周溝	34.0	18.8		白色砂粒	淡白茶色	良好	有黒斑
85		壺	1号墳・周溝		19.0		白色砂粒	灰茶褐色	良好	
86		壺	1号墳・周溝		13.2		白色砂粒	暗茶褐色	良好	
87		壺	1号墳・周溝		15.2		白色砂粒	淡黄灰色	良好	
88		壺	1号墳・周溝		14.2		小砂粒多	淡黄灰色	良好	
89		壺	1号墳・周溝		13.7		白色砂粒	淡茶灰色	良好	
90		壺	1号墳・周溝		14.3		白色砂粒	淡黄茶色	良好	
91		壺	1号墳・周溝		13.1		白色砂粒	淡茶灰色	良好	
92		壺	1号墳・周溝		13.0		白色砂粒	暗茶褐色	良好	
93		壺	1号墳・周溝		16.5		小砂粒多	淡黄灰色	良好	
94		壺	1号墳・周溝		23.4		白色砂粒	淡赤茶色	良好	有黒斑
95		壺	1号墳・周溝		14.8		白色砂粒	桃褐色	良好	
96		甑	1号墳・周溝		26.1		白色砂粒多	淡茶灰色	良好	
97		甑	1号墳・周溝		26.1		小砂粒多	赤茶色	良好	有黒斑
98		甑	1号墳・周溝				白色砂粒	淡茶灰色	良好	
99		甑	1号墳・周溝		30.8		白色砂粒	淡赤茶色	良好	
100		杯蓋	2号住居	4.1	13.2		白色砂粒	暗灰色	堅緻	
101	29	杯蓋	2号住居	3.8	13.7		白色砂粒	暗灰色	堅緻	内面に焼ぶくれ
102	29	杯蓋	2号住居	4.0	13.9		白色砂粒	暗青灰色	堅緻	
103		杯蓋	2号住居	4.2	14.4		白色砂粒	淡灰色	堅緻	
104		杯蓋	2号住居		15.1		精良	青灰色	堅緻	
105	29	杯蓋	2号住居	4.7	15.1		白色砂粒	暗青灰色	堅緻	内面に同心円文
106		杯身	2号住居	3.9	12.2		白色砂粒	暗青灰色	堅緻	
107		杯身	2号住居	4.9	11.7		白色砂粒	暗青灰色	堅緻	内面に当具痕
108	29	壺蓋	2号住居	6.3	16.6		白色砂粒	淡青灰色	堅緻	
109		杯身	2号住居	4.6	12.2		白色砂粒	暗青灰色	堅緻	
110		杯身	2号住居	4.3	13.3		白色砂粒	淡灰色	堅緻	
111		杯身	2号住居		12.5		白色砂粒	淡灰色	良好	

挿図番号	図版番号	器種	出土遺構等	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備考
112	29	杯身	2号住居		13.4		白色砂粒	暗青灰色	堅緻	
113	29	杯身	2号住居		14.2		精良	暗青灰色	堅緻	内面に当具痕
114	29	壺	2号住居	8.0	6.0		精良	暗青灰色	堅緻	内面底当具痕
115	29	高杯	2号住居		12.2		白色砂粒	暗灰色	堅緻	三方スカシ・杯部のみ
116		高杯	2号住居		12.6		白色砂粒	暗灰色	堅緻	三方スカシ・杯部のみ
117	29	壺	2号住居				白色砂粒	青灰色	堅緻	
118	29	甕	2号住居・かまど	26.8	19.8		白色砂粒	淡黄茶色	良好	
119		甕	2号住居		18.1		白色砂粒	淡黄茶色	良好	
120		甕	2号住居		16.8		白色砂粒	淡赤茶色	良好	
121		甕	2号住居		13.8		白色砂粒	淡茶黄褐色	良好	
122		甕	2号住居		14.1		白色砂粒	茶褐色	良好	
123		甕	2号住居		11.4		白色砂粒	淡茶色	良好	
124		甕	2号住居		15.3		白色砂粒	淡黄茶色	良好	
125		甕	2号住居		9.7		白色砂粒	茶褐色	良好	
126		甕	2号住居		12.7		白色砂粒	淡黄灰色	良好	
127		甕	2号住居		14.8		白色砂粒	赤茶色	良好	
128		甕	2号住居		11.2		白色砂粒 金雲母	茶褐色	良好	
129	29	高杯	2号住居	14.5	15.1	14.8	白色砂粒	赤茶褐色	良好	
130		椀	2号住居		9.8		白色砂粒	淡黄茶色	良好	
131		椀	2号住居		18.6		白色砂粒	淡赤茶色	良好	有黒斑
132		甑	2号住居			8.0	白色砂粒	淡赤茶褐色	良好	
133	29	椀	2号住居	5.0	5.8		白色砂粒	淡赤茶褐色	良好	
134	27	高杯	1号墳・周溝	11.0	11.4	9.3	白色砂粒	青灰色	堅緻	四方スカシ
135		壺	1号墳・周溝				白色砂粒	淡青灰色	堅緻	
136		壺	1号墳・周溝				白色砂粒	暗黒灰色	堅緻	
137		壺	1号墳・周溝				精良	淡青灰色	堅緻	
138		大形器台	1号墳・周溝				白色砂粒	暗紫灰色	堅緻	
139		大形器台	1号墳・周溝				白色砂粒	暗黒灰色	堅緻	
140		大形器台	1号墳・周溝				白色砂粒	淡黒灰色	堅緻	
141		大形器台	1号墳・周溝				白色砂粒	淡青灰色	堅緻	
142		大形器台	1号墳・周溝				白色砂粒	淡青灰色	堅緻	
143		大形器台	1号墳・周溝				精良	暗紫灰色	堅緻	
144		大形器台	1号墳・周溝				白色砂粒	暗黒灰色	堅緻	
1		椀	第1地点石組遺構		13.8		白色砂粒	淡赤茶色	良好	
2		杯蓋	第1地点石組遺構		15.9			青灰色	良好	
3		椀	第2地点2号土壙		11.7		白色砂粒	黄茶色	良好	
4		甕	第2地点2号土壙		14.0		白色砂粒	暗黄茶色	良好	
5		鉢	第2地点トレンチ				白色砂粒	淡青灰色	堅緻	
6		杯身	第2地点	5.4	12.0		白色砂粒	青灰色	堅緻	
7		甕	第2地点		21.1			青灰色	堅緻	
8		杯身	第3地点表面採取	5.8	13.8		白色砂粒	暗青灰色	堅緻	内底面に当具痕
9		壺	第3地点				白色砂粒	淡灰色	堅緻	
10		甕	第3地点				白色砂粒	暗灰色	良好	焼きぶくれあり

（2） 2号墳

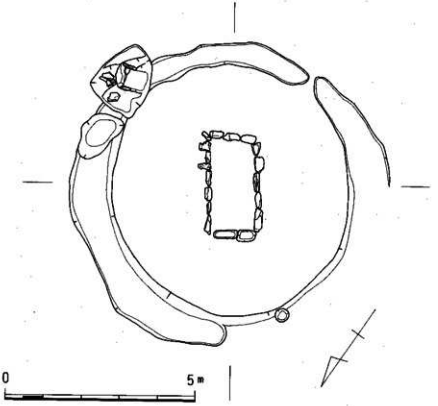
墳丘（第50図、図版30－a）

1号墳の南に隣接する小円墳で、1号墳と同様に墳丘はほぼ削りとられ、辛うじて石室基底と周溝の底部が残っていたにすぎない。周溝は西部では浅く、北東部では1段低くやや深めにほられている。現状では葺石が葺かれていた痕跡は認められない。周溝の東部では後述するカマド状遺構や不整形土壙と切り合い関係を持っており、同遺構よりも古墳が古いことがわかった。またカマド状遺構が現地表から深く掘りこんでいるため、現地表が古墳築造当時からさほど削平を受けたとは考えにくいこと、周溝埋土に明瞭な黒色水成堆積土壌が形成されていないこと、周溝内に土器の投棄が行なわれた形跡も認められず、築造後短期間で埋没したとみられることなどから、周溝は築造当初から浅く、墳丘の区画域を表示する程度の意味しか持たなかったものと考えられる。

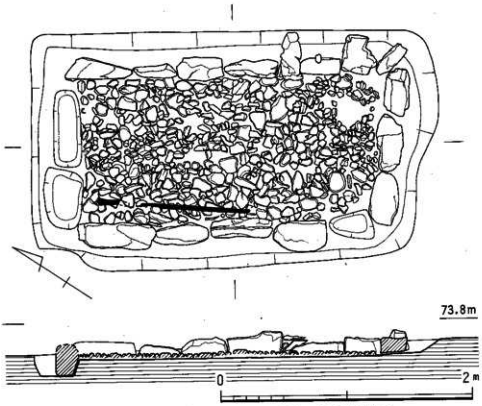
墳丘の径は主体部主軸上で7.1m、主軸に直交方向では6.7mを測り、主軸方向に若干長い。

横穴式石室（第51図、図版30－b）

墳丘の中央やや東寄りにその主軸をN－35°－Eに向け南に開口する小形の横口式石室が残っていた。石室は側壁が完全に除去された上、奥壁下と南隅に埋め込まれていた2個の腰石も抜き去られていたが、幸い他の腰石は原位置を保っていたため、平面のプランだけは知ることができた。石室は主軸長2.32m、羨道部幅1.07m、奥壁幅1.12mの心持ち奥壁側の幅が広がるものの、ほぼ長方形プランを呈す。腰石は1号墳と同様に石室の周縁に深さ15～20cm掘り下げて据え、石室床面から



第50図　西堂四反田2号墳調査後墳丘測量図(1/100)



第51図　西堂四反田２号墳石室実測図(1/30)

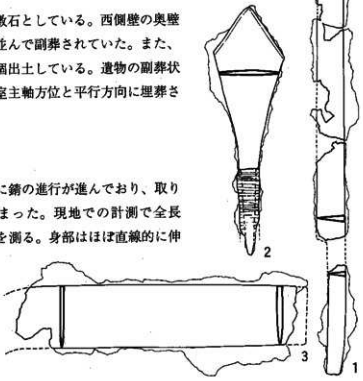
壁面に10～20cm頭を出す。しかし横口部の中央の石だけは地中に埋め込まれておらず、この石が横口部の框石として据えられたことを窺わせる。羨道（墓道）は石室床面より１段高い。

石室床面には拳大の川原石を敷いて敷石としている。西側壁の奥壁寄りの床面から鉄鏃と大刀が一直線に並んで副葬されていた。また、出土箇所が明らかではないが鉄鏃が１個出土している。遺物の副葬状態から、被葬者は頭位を奥壁に向け石室主軸方位と平行方向に埋葬されたことがうかがえる。

出土遺物（第52図、図版31－b）

１は大刀である。茎基部は発見時既に錆の進行が進んでおり、取り上げ作業時に鉄片に破砕分解してしまった。現地での計測で全長82.4cm、身の長さは68cm、茎長14.4cmを測る。身部はほぼ直線的に伸びている。木質は遺存しておらず、抜き身のまま副葬されたとみられる。

２は鉄鏃である。圭頭式で全長13.4cm、鋒長2.8cmを測る。茎に矢柄の木質と固定のために巻き付けた糸が遺存しているため箆被の有無に



第52図　２号墳石室出土鉄器実測図（刀 1/4、他 1/2）

ついては不明である。

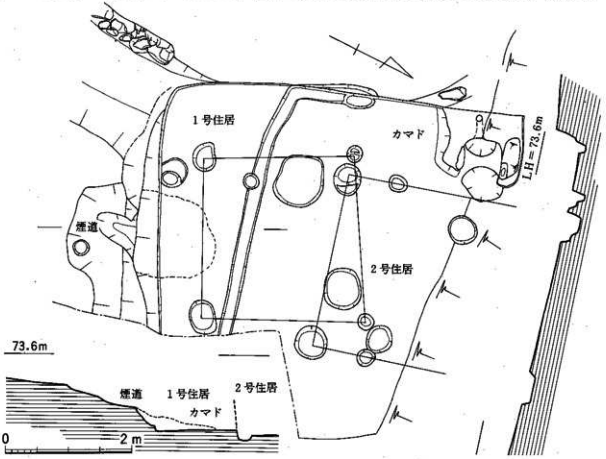
3は鉄鏃である。切先と基部ともに劣化破砕した。刃幅は基部付近で3.4㎝、切先付近で3.3㎝を測る。

(4)竪穴住居（第53図、図版32）

第1地点の調査開始当初、破壊された古墳の墳丘土層を観察しようと、すでに重機によってかなり破壊された1号墳の東墳丘土層断面を観察したが、明瞭な周溝堆積土層墳丘や葺石が認められなかった。後世の水田開削によって墳裾が消失したものと考え、気に留めずに周溝を掘り下げていたが、周溝の底面まで掘り切ったところ、底面から新たに方形の掘り方が表れ、その掘り方コーナーから2.5m東では黄色粘土ブロックと焼土、炭が混じり合っていた。そこで初めて竪穴住居の存在に気付き、改めてその調査を行なった。結局切り合った2棟の竪穴住居を検出したのである。明らかに1号墳の裾部を切って掘り込まれていた。南の先に掘られた古い住居を1号、新しい住居を2号住居と呼ぶ。住居の東端が耕作土置場下であったため遺構を完掘できなかったのは残念である。

1号住居は主柱間隔から東西に長い長方形プランと考えられる。主柱は4本である。住居西壁だけは辛うじて残っており、長さは3.2mを測る。南壁中央付近にカマド痕が認められた。壁面を削って地下を抜けて地上に排煙する南向きの煙道を設けていた。カマドはその場で取り壊されたとみえ、前述の粘土、焼土、炭が塊となって検出されたが、床面では明瞭な焚き口や燃焼部を確認することができなかった。埋土中からは土器などはほとんど出土していない。

2号住居は1号住居から1mほど北に移り、時計まわりに約15度回転した位置にある。調査当初



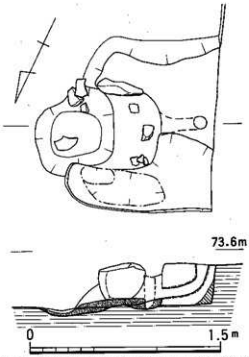
第53図　西堂四反田遺跡1・2号住居実測図(1/60)

1、2号住居を1棟と判断して掘り下げたため、南壁は検出することができなかった。1号住居より一回り大きく、若干深く床面を掘り下げている。4本主柱の住居と考えられるが北側の柱は削平されているため不明。

南壁から一部西壁にかけて床縁から周溝を検出した。

西壁中央付近に作り付けのカマドが遺存していたが、北側のカマド壁が一部開墾によって破壊されていた（第54図、図版33）

カマドは床面に黄色粘土を積み固めて築く壁面突出型のものである。焚き口では床面を5㎝ほど掘り窪め、燃焼部では断面方形、長さ26㎝の棒状花崗岩を立てて支脚とし、煮沸土器を支える。高温にカマド側壁が耐えうるようにとの配慮であろうか、花崗岩の平石を左右両袖の内側に埋めこんでいた。煙道はカマド西壁黄色粘土内に中途から上方に屈曲する筒状トンネルを通し、カマドの上方に抜けている。おそらく住居の壁あるいは屋根から煙突状の施設を経て屋外に排煙していたものと考えられる。カマド内の煙道表面は熱によって焼け赤変していた。また焚き口付近から破砕された土師器甕（第56図118）が出土した。



第54図　西金四反田遺跡2号住居カマド実測図(1/30)

出土土器（第55図）

2号住居の床面近くから須恵器、土師器が出土している。

須恵器

100～105は杯蓋で口縁径は13～15㎝ほど。口縁と天井部の境の稜が不明確になりつつある。口縁端部は100、102、104のように丸く納めるタイプと、101、103のように外に少し摘み出すタイプ、105のように内面に一条の鈍い沈線をめぐらすものがある。ヘラ削りは天井部の3分の2程度まで行なわれている。

106、107、109～113は杯身である。口縁径は12～14㎝、受け部径は14～16㎝ほどを測る。受け部は短く上外方に突出し、立上がり部は内傾し、端部は一様に丸く納める。ヘラ削りは体部の3分の2程度まで行なわれる。

109は蓋である。天井部に扁平なつまみを張りつける。口縁部はわずかに内湾し、内面には浅い沈潜がめぐる。

114、117は短頸壺である。胴肩部が張っている。下半はヘラ削りで仕上げている。114では胴最大径部に一条の櫛描き波状文がめぐり、その上下を沈線が平行してめぐり、沈線を挟む。

115、116は無蓋高杯であるが、双方とも脚部を欠失している。杯部中央に稜線がめぐり、その下に櫛描き波状文が施される。脚の貼りつけ痕からいずれも三方の長方形スカシ孔が認められた。

土師器

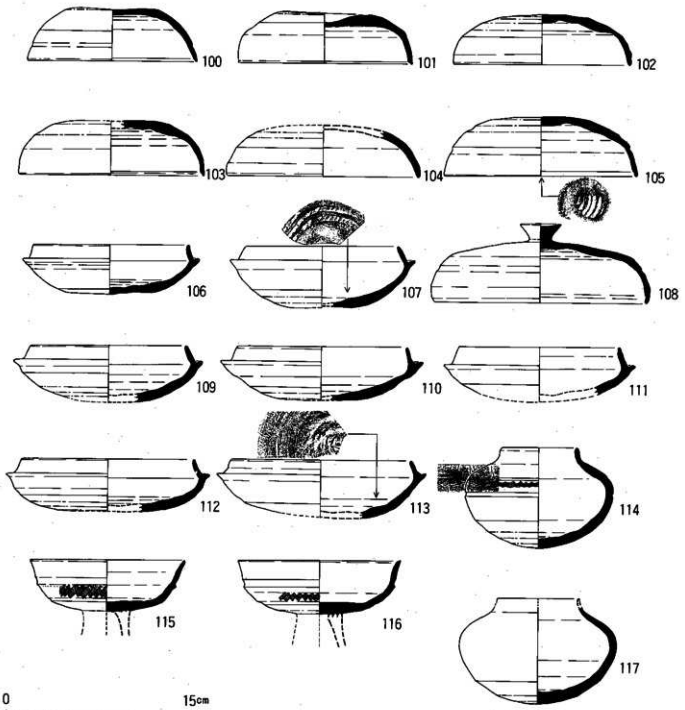
118～127は甕である。118はカマド焚き口からの出土。胴部はやや縦長の球形で器壁は厚く、口縁は胴部から大きく屈曲して立ち上がり、若干外反し、端部を丸く納める。他の甕に比べて精良な

粘土を用いた良品である。カマドの廃棄に伴う祭祀行為に用いられた可能性がある。他の甕はいずれも胴部から口縁にかけての屈曲がなだらかで明瞭な稜を持たず、内外面の調整も粗い。

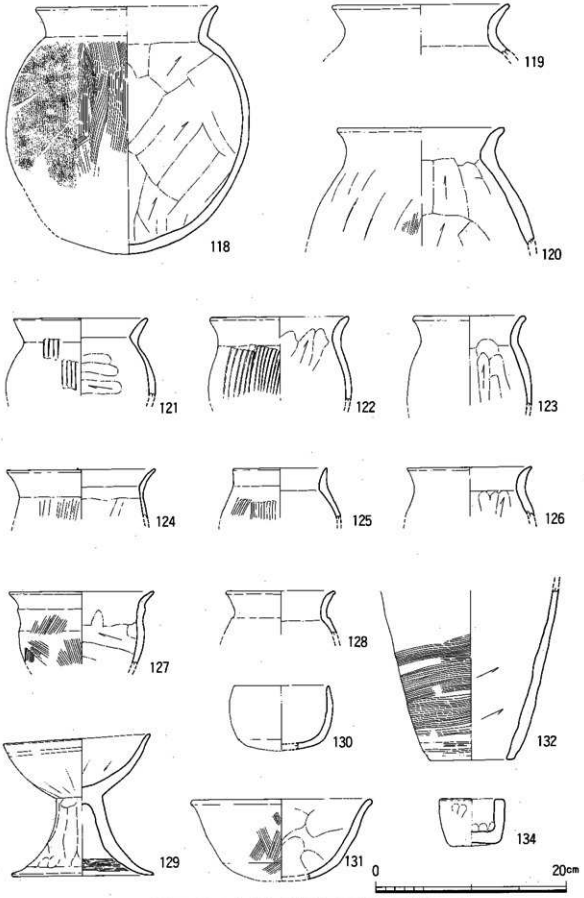
132は甑の下半部である。胴部は直線的に底部にむかってすぼまり、底は完全に抜けている。外面は螺旋状に横ハケがめぐり、下端のみヘラ削りで仕上げる。

129は高杯である。椀状の杯部に裾がなだらかに広がる脚がつく。器壁は厚い。

130、131は椀であるが、130は小形で口縁が内湾するのに対し、131は大形で外反する。



第55図　西堂四反田遺跡2号住居出土土器実測図①(1/3)

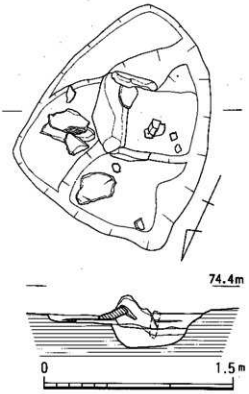


第56図　西堂四反田遺跡２号住居出土土器実測図②(1/4)

(5) カマド状遺構（第57図）

2号墳の東裾を切って掘り込まれた東角を要にした平面が扇形をなす土壙である。

土壙の南角から反時計まわりに階段状に深くなり、西側中央部で最も深くなる。土壙の最底部は方形プラン中央寄りに勾配がつく。埋土は最下段の埋め土中に炭、焼土、灰混じりの黒色砂質土で、その上層では若干の炭を含む程度の黒褐色土である。土壙中央に裏側が若干焼けた板石が東に傾いた状態で置かれ、その南北両端に各1枚の板石が各々その東縁を中央の石にもたれ掛けるように組まれていた。また最下段土壙のほぼ中央に断面を不整形の5角形に切り出した長さ20cmほどの石柱が立てられていた。



第57図　カマド状遺構実測図(1/30)

3枚の平石が土壙最下段の東縁を取り囲むように置かれ、その中央に支脚状の石柱が立てられていることや、埋土中に多くの炭、焼土等が含まれ、使用石材の表面に焼けた痕跡を認めたことから、カマドとして使用された土壙とみられる。平面形が扇形でその仰角がほぼ直角に近いことから、住居のコーナーに築かれていたと考えられる。しかし周辺において柱穴など、住居遺構の痕跡が全く見当らないことや、カマド壁体、例えば1、2号住居でみられた黄色粘土塊なども発見されなかったことから、火葬遺構など他の用途を考える必要もある。埋土中から須恵器杯蓋片、土師器椀片が出土した。

出土遺物（第61図1、2）

1は土師器椀片で復元口縁径は13.8cm、口縁部内側に1条の沈線がめぐる。2は須恵器杯蓋で復元口縁径15.9cmを測る。口縁端部は外へ軽く摘み出す。

(6) 土壙（第58図）

第2地点からは溝、土壙、柱穴を検出したが、古墳時代の属するとみられる遺構としては後述する3基の土壙があげられる。

1号土壙（第58図）

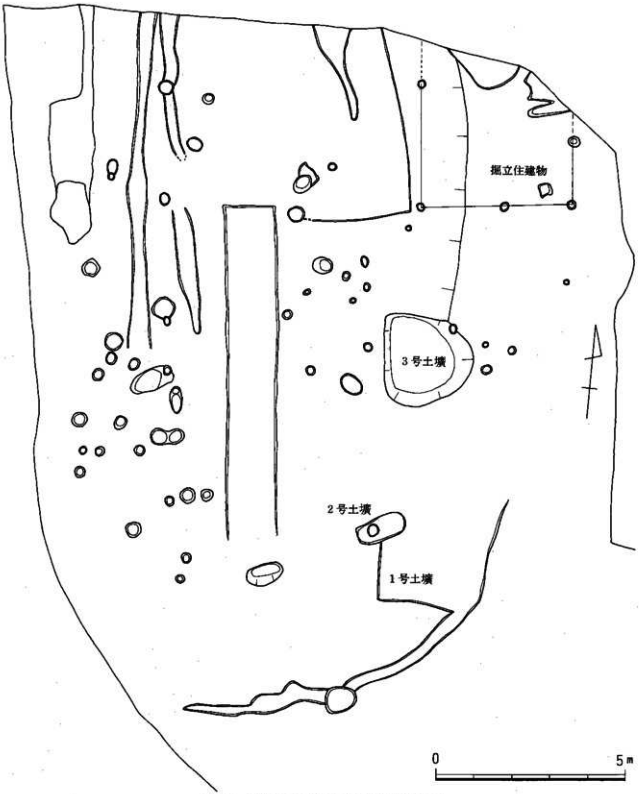
平面プランは方形あるいは長方形を呈するとみられる浅い土壙であるが、北側が削平されプランが確定しない。東西断面では土壙の底はレンズ状に窪む。土壙の南西部から南東コーナーにむかって弧を描きながら1条の溝が掘られている。溝の途中に貯桝状の円形土壙もある。2号土壙に切られている。遺構の機能は不明である。

2号土壙（第59図）

1号土壙の西壁を切って掘り込まれた楕円形の土壙である。主軸をN－32°－Eに向けた主軸長

1.33m、幅0.63m、深さ0.2mを測る。底部は北東にむかってやや深くなる。埋土は黄茶褐色の粘質土であった。土壙底面の中央からやや北東に寄った所から素環鏡板付轡金具が一式出土した。

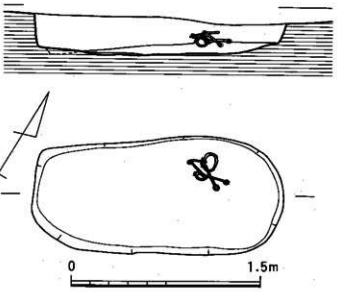
土壙が整った楕円形プランを有し、土が人為的に短期間に埋め戻されたと考えられること、完形の轡金具が底面にたたんで置かれていた状況などから、馬を葬った土壙墓である可能性がある。



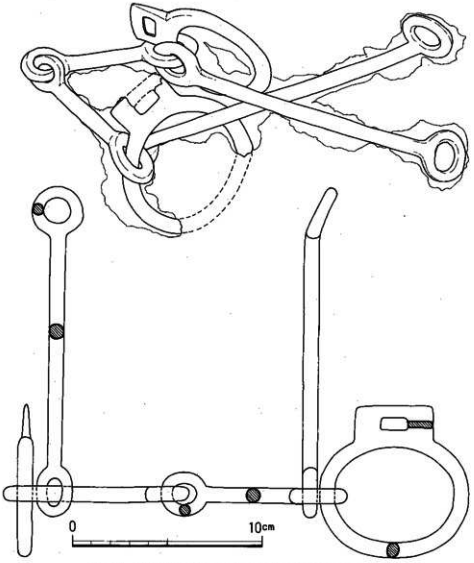
第58図　西堂四反田遺跡2区遺構配置図(1/100)

杏環鏡板付轡金具（第60図、図版35）

完形状態で出土したが鏡板の立聞の一部を現場で紛失した。上が現状、下が復元展開した図である。錆のまわりが著しく一部推定復元している。引手金具は左右長さが違っており、現状図上に交差した引き手のほうが若干短く16.5cmを測る。引手壺は共造りの環で外向きに屈曲する。引手は鏡板を介さずに直接銜金具に連結される。銜金具は2連である。銜金具と連結される鏡板は長径7.8cm、短径6.9cmを測り、立聞は幅4.2cm、



第59図　西堂四反田遺跡2区2号土壙実測図（1/30）



第60図　西堂四反田遺跡2区2号土壙出土馬具実測図（1/2）

高さ1.3㎝を測る。立聞が大きく、同種の鏡板では新しいタイプに属する。

3号土壙（第58図）

半円形の土壙で底面は西に向かって傾斜している。東西2.2m、南北2.4mを測る。底面から土師器椀、甕片が出土している。

出土遺物（第61図3、4）

3は椀片である。復元口縁径11.7㎝、口縁は外反する。4は甕片である。復元口縁径14㎝、口縁は短く外反するのみ。

その他の古墳時代遺物（第61図3～10）

3～7は第2地点包含層出土、8～10は第3地点集石内出土である。

(7) 小結

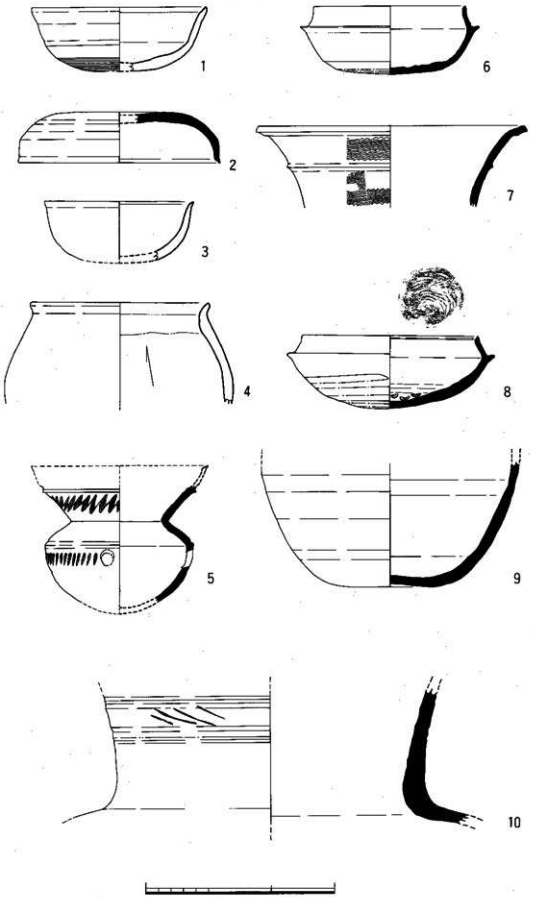
西堂四反田1号墳は現状では墳丘基底部に葺石をめぐらす径15mほどの円墳である。墳丘南西に残された葺石列に平行して遺存していた墳丘土器群、またそれを切って掘られた小穴があり、少なくとも土器群の付近では幅1mほどのテラス面があった可能性が高いことから、本墳は2段築成であった可能性が高い。[註1] 石室横口、墓道はこのテラス面に接続されたとみられる。

主体部は古式の横穴式石室であった。石室の玄門部は両袖式で高さ120㎝ほどの花崗岩板石を框石の外側に立てていたとみられる。框石は床面から45㎝の高さまで平石を積み上げているが、中央の横口部のみ1段低い。この玄門の構造は近くは福岡市梅林古墳[註2]のそれに類似するが、同古墳の壁面が塊石によって積み上げられ、明瞭な腰石を据えるのに対し、1号墳では壁石に平石を用いており、最下段の石は他の側壁石材より厚く床面下まで潜り込み、いわば腰石使用の初現的様相を呈する。よって1号墳は同墳より古式の様相を呈しているといえる。

同墳例は柳沢一男の一連の研究成果に従えばA型石室に属す。[註3] 屍床を区画する仕切石が認められ石室床面よりも墓道横口が1段高く、ⅢA期の特徴を有しているものの、石室側壁基底の石に腰石使用の萌芽が窺える。とりあえず柳沢の編年上ではⅢA期後半期に位置付けてみる。

出土遺物では、まず石室、周溝から出土した須恵器について、田辺編年に従えば概ねTK－216型式（1、2、5、6、7）、TK－23型式（杯蓋A－a類、47、49、53、54、135）、MT－15型式（杯蓋B－b類、52、134、138～144）、TK－43型式（杯蓋C－c類、51）、TK－217型式（杯蓋D－d類、48）の5型式が確認できる。そのうち後の2型式については古墳周辺における集落経営期の廃棄資料と考えられ、古墳の葬送に伴うものは前3型式である。石室内の屍床数と遺物の副葬、清掃状況から少なくとも3回の埋葬が行なわれているのは確実であり、出土土器の型式差もこれを間接的に裏付けるものである。現在TK－216型式の暦年代については5世紀中ごろが想定されているが、前記柳沢の編年において設定された暦年とも大きな矛盾はない。

鉄器ではまず第1屍床に副葬されていた鹿角装大刀があげられる。腐食が激しく施文等の詳細はわからないが、同様な状態で井原南田古墳の屍床から出土した鉄剣にも鹿角が装着されていた。出土の詳細な裏付けがないものの糸島においては近隣の高上（たかうえ）地区の古墳からも鹿角を装着した鉄剣と刀子が出土し、また最近荻浦石川1号墳からも鹿角装刀子が発見された。確たる資料集成を行なっていないが出土頻度としては他地域に比べると高い。



第61図　西堂四反田遺跡２、３区出土土器実測図（1/3）

また、農工具が多く出土した。刀子、鉋、鑿、板状鉄斧などの工具とともに馬鍬が出土した。特に馬鍬は当地一帯においては初出であり、資料的にも貴重である。

2号墳は径7mほどの円墳であった。築造期を直接的にうかがえる資料は乏しいが、石室壁面の腰石が1号墳と同様に床面下に深く据えられている特徴は1号墳に類似することから、とりたてて1号墳との間に築造時期差を想定する必要はないと考える。

両古墳の被葬者はその立地から、おそらく古墳の北側1km下流で赤崎川と川原川に挟まれた段丘上に営まれた集落を支配していた支配者層であった可能性が高い。ここでは調査の結果4世紀～5世紀にかけて営まれた集落遺跡が発見された。[註5] 集落規模は明確ではないが竪穴住居の切り合いが激しく、かなり密な住居群によって構成されていたものと考えられる。1号墳から出土した豊富な農工鉄器はこれら支配集落の生産力の強さを象徴する宝器であったのかもしれない。

1号墳の東墳裾を切って2棟の竪穴住居が、また2古墳の東裾を切ってカマド状遺構が築かれていた。古墳の葬送儀礼の終了期と竪穴住居の掘削時期は近接している。田辺編年のTK－43型式とMT－15型式との時間差は概ね50年と考えられている。当然古墳の墳丘は遺存していたであろうから、わざわざ墳裾を削って住居を構えたことになる。これと同じ様相が井原作出遺跡や末永高木遺跡でもみられる。作為的ともとれる古墳破壊、これは既存の権力に対する否定の現われ、いわば当地における支配体系の変革を間接的に表現したものといえば過言であろうか。少なくとも既存勢力の奥津城が短期間に集落へと姿を変えていったことがこの地の土地利用史上の大きな変化であったことは注意を要する。今後は当地における古墳群の消長と集落の変遷についてより細かな資料分析を行なう必要があろう。

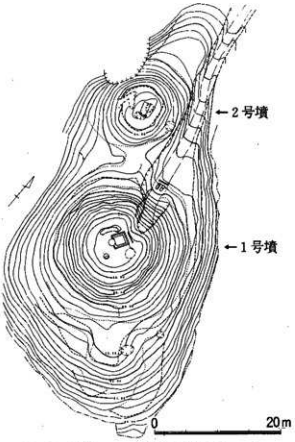
註1　前原市の長嶽山1、2号墳は四反田1、2号墳の旧状を忍ぶことができる格好の古墳である。同墳は5世紀後半築造で、双方の墳丘は近接し、1号墳は葺石を有す2段築成の帆立貝型前方後円墳、2号墳は竪穴系横口式石室を有す小円墳である。西堂四反田1号墳も長嶽山1号墳と同様の墳形を有する可能性がある。

註2　浜石哲也、菅波正人他『梅林古墳』福岡市教育委員会　1991年

註3　柳沢一男「竪穴系横口式石室再考」森貞次郎博士古稀記念『古文化論集』1982年

註4　田辺正三『須恵器大成』角川書店　1981年

註5　林　覚『井原遺跡群』Ⅷ1990年『井原塚廻遺跡』1993年　いずれも前原市教育委員会



第63図　長嶽山1、2号墳墳丘測量図（1/600）

付編

西堂古賀崎古墳（にしのどうこがさき）

あるばかりでなく、石室内に雨水が溜まって池と化す危惧があるので、危険な石積みは鉄柱で支え、床面から東北方に溝を掘り土管を埋めて排水工事を行なった。遺物は復原して前原町怡土公民館に保管の予定。

……以下省略……

（2）原田大六による発掘調査

発掘調査が実施されたのは古墳発見直後の昭和32年３月12日から同月15日までの４日間である。調査内容は原田が作成した発掘調査概要によってその大略を知ることができるので再び原田の報告を紹介しよう。

なお、前項遺跡発見届の内容と重複する箇所が多々あるので、一部割愛して掲載する。

古賀崎古墳発掘調査概要

福岡県文化財専門委員　原田大六

１．発掘場所

福岡県糸島郡前原町大字西堂小字深町909番地　古賀崎古墳石室内部　２ｍ×４ｍ

２．発掘年月日

自　昭和32年３月12日　　至　同年３月15日（４日間）

３．調査員

福岡県文化財専門委員　原田大六

前原町教育委員会　　松田（農夫男）

西堂行政区遊園地整地作業員　　２名

４．発掘目的

横穴式石室内敷石の状態及び石室構築前の基礎工事の状態

５．遺跡の現状

従来古墳の盛土は第65図に示しているように南部の火葬場のため一部を削られ、また、数十年前古墳上に生えていた１本の老松が台風で倒れて天井石２枚（玄室上の全部）をこじ開けたために、上部盛土が石室内に流入充塡し、一見横穴式石室と認定し難いまでになっていた。西堂行政区において従来の墓地を改葬して共同納骨堂を建設、その周辺を遊園地化しようと、整地工事を行なっていたところ、昭和32年３月７日巨岩に当たったので、これを除去したという。そのため東部から北部に至る盛土と玄室の東壁のほとんどが損壊するに至った。副葬品は東壁除去後の作業によって全部取り出され、副葬品の配列状態は工事担当者の見聞に頼る以外になかった。

６．遺跡の状態

副葬品の配列は前述のように調査の余地がなく盛土と石室の損壊も甚大なため、石室内の敷石の状態を調べ残存遺物を摘出すると共に、横穴式石室を構築する直前の地山に行なった基礎工事の土壙がいかに掘開されているか、石室と土壙と盛土の関係は如何であるかを把握するのに努めた。

ａ．石室の状態（図版37－ａ,ｂ）

ほぼ南北に主軸を置き、南に入口を持つ単室の横穴式石室であって、羨道の長さ約1メートル、巾同1メートル。玄室の長さ約3メートル、巾約2メートルの比較的小規模のものであり、玄室の敷石の東半は今次の工事で移動されていたが西半はやや完全に残存していた。副葬品の出土は記録にとどめるだけの摘出はなく、工事担当者の見聞を確証づける断片的遺物を見るにとどまった。

b．土壙の状態

盛土が壊滅に近く削平されていたことは、石室外部の土壙を確認するために利便を与えた。発掘した東部の土壙は玄室東壁から1.7メートル離れ、奥壁から1メートル離れ、玄室に平行して土壙壁は直角に近く掘り下され、土壙底は第2トレンチによって南に開いた長方形の土壙であり、その広さは推定石室の4倍にも達し、石室と土壙との間隔は不用意にされたのではなくて、玄室下底の石積みに際して石を動かすための充分な余裕が保たれていることが知られた。また盛土は石壁外を順次土で埋めながら上部へ向って石積みをなしていたことが知られた。なお土壙の掘開は石室下部を堅固にする目的と積石に便利なためにとられたもようである。

……以下省略……

（3）発掘調査から現在にいたるまで

発掘調査の終了後、地元の理解を得て古墳は現地で保護されることとなり、現在も発見時の状況を忍ぶことができる。現在、市では文化財保護、観光資源両面から配慮して、古墳への誘導標識や遺跡説明板を設置しており、古墳は伊都歴史資料館にも近いことから週末ともなればふらりと立ち寄る見学者も多い。しかし、墳丘は崩壊半ばのまま野ざらしであるため土砂の流失などによって傷みが増し石室の倒壊も進んでおり、保存方法についての緊急の対策が必要であり、今後に向けて課された問題である。

古墳から出土した資料については発掘後正式に報告されることはなく今日にいたっている。1986年には前原町が『古賀崎古墳』（前原町立伊都国資料館展示品図録第3集）を刊行しているが資料の内容を十分に網羅したものではなく、解説も不十分であった。ただ、出土資料を紹介する役目は果たしたとみえて、田中新史[註1]、宮代栄一[註2]、嶋田光一[註3]氏らが当古墳出土馬具について資料分析を試みている。その後、発掘後所在のわからなかった鉄鏃などの伴出鉄器が発見され、その中から未発表の馬具資料が確認されるなど、新たに紹介すべき資料がでてきている。

今報告書では井原地区周辺に分布する古墳の発掘調査の成果が多く報告されているが、当該地での古墳文化を考える上で古賀崎古墳は重要な意味をもつものと考える。そこで本書において当古墳の現状、出土資料などについて紹介し、当該地における古墳時代研究の充実化に資するとともに、古墳の保存にむけて、基礎資料の整理を図ることとした。

今報告を作成するにあたっては、糸島古文化学会（会長諸岡利寛氏）の方々には墳丘実測図、土器実測図の作成等に並々ならぬご助力を賜った。また宮代栄一氏には出土馬具について多々ご教示いただいた。末尾ではありますが記して感謝します。

註1　田中新史「古墳出土の故篠・鞍金具」　『弁上コレクション発生・古墳時代資料図録』1988

註2　嶋田光一「福岡県・櫨山古墳の再検討」　『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念論集　1991

註3　宮代栄一「5・6世紀ににおける馬具のセットについて」　『九州考古学』第68号　1993

2　古墳および出土資料

1．位置

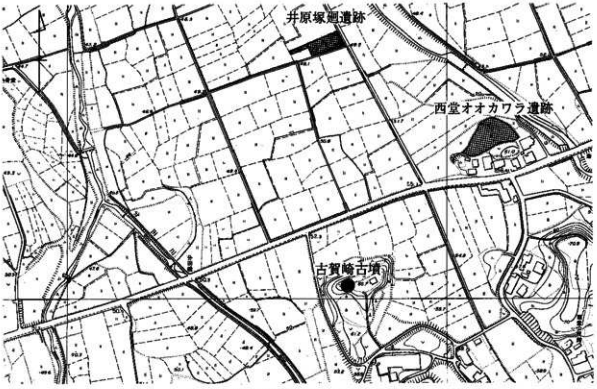
古賀崎古墳は背振山系の一峰である井原山（999m）から北に伸びる尾根の一支の先端に築かれている。古墳頂部での標高は68mを測る。現状では古墳と尾根裾の平地との標高差は約20mほどで、裾の水田面から古墳にかけてかなり急勾配の斜面となっている。古墳頂部から北を見渡すと緑豊かな糸島扇状地が眼前に広がり、古加布里・今津の両湾を埋め立てて水田と化した糸島低地帯をへだて遙かに糸島半島の山塊を眺望することができる。

古墳の築かれた尾根の東側には川原川が、西側では赤崎川が北流し、古墳の北800mで合流して川原川本流となる。さらにその1200m下流では瑞梅寺川と合流し瑞梅寺川本流となって今津湾に注ぎこむ。古賀崎古墳はこれら河川の侵食堆積作用によって形成された糸島扇状地の要の位置にあり、扇状地の隅々まで眺めることができる眺めの良い地である。

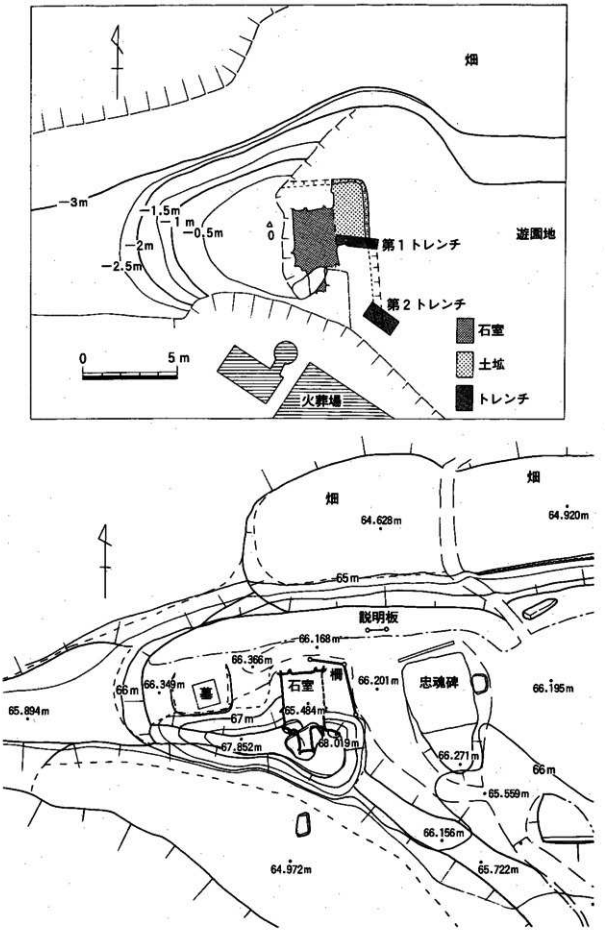
古墳の北東150mにはほ場整備時に発掘調査された西堂オオカワラ遺跡がある。弥生時代中期と古墳時代後期を中心とした集落遺跡である。そのさらに南には井原塚廻、井原ムクナシ遺跡など弥生中期から古墳前期にかけて断続的に営まれた集落、墳墓遺跡があり、この地周辺で弥生時代から古墳時代にかけて連綿と人々の生活が営まれていたことがわかる。古賀崎古墳の南、南西の丘陵上にもタエマ、ホンムラ古墳群などいくつかの古墳が知られているが、詳細は不明である。

2．墳丘

墳丘は古墳発見（1957年）以降もたびたび手が加えられていたため、1987年に糸島古文化学会が



第64図　西堂古賀崎古墳位置図（1/5,000）



第65図　西堂古賀崎古墳周辺地形測量図（1/200，上は1957年古墳発見当時、下は1990年糸島古文化学会測量状況図）

再度の現況測量を実施している（第65図）。

これによると墳丘は丘陵の中央からかなり西寄りに位置していることがわかる。古墳の北西方向に古墳時代後期の拠点集落であった井原遺跡群が位置していることを意識した選地だったのか、あるいは尾根東側に別遺構が存在していたのかもしれない。

発見時と現在の墳丘を比較してみると（第65図）、まず古墳は発見当時から既に墳丘の南北両サイドが開墾によって大きく変形しており、特に南部では火葬場建設時に墓道、羨道の一部まで破壊されている。また西部の墳裾は１の－2.5mのコンターライン（２では66mライン）付近に推定できるが、東側では盛土の大半が造成時に除去され、既に墳裾の現認が難しい状況であるが、わずかに北東部において墳裾のラインを推定することが可能であるようにも見受けられる。しかし1957年測量時には北側の墳裾も開墾によって畑地に姿を変えており、わずかに作業道がその名残を留めるにすぎない。また石室西隣には新たに墓が築かれている。古墳発見以後も度々墳形の改変を受けていたことがわかる。

これらの状況から、古賀崎古墳が円墳でかつ石室が墳丘中央に位置すると仮定するならば古墳の規模は東西径20mほどに復元されよう。しかし、いずれの方向での墳丘裾も未確認であること、特に東側墳裾の旧状が明らかでないのが気掛かりではある。1957年測図の墳丘北東部での傾斜変換線は前方後円墳のクビレ部にも似たカーブを描いている。最近、糸島地方では５世紀後半から６世紀前半にかけてワレ塚古墳、銭瓶塚古墳、東真方古墳群Ｃ群、荻浦砂魚塚古墳など全長が20～40mクラスの小形前方後円墳で前方部が低平かつ後円部径に対して短小な形態を有する例が増加しており、古賀崎古墳も東側に同形態の前方部を有する可能性がある。将来的は墳形、規模を確認するための最低限の発掘調査が必要である。

３．横穴式石室

原田の報告にもあるように玄室天井石は崩落し壁石もその多くが原位置を保っていない。現在の横穴式石室の状況は図版37－bに示した通りである。石室東側壁は玄門付近の一部を除きほぼ全壊状態である。奥壁も旧状を厳密に保っているのは腰石のみと思われる。西壁は比較的良好に旧状を維持していたが先年の梅雨時に地盤が緩み、羨道寄りの２個の壁石が崩落し、さらに付近の石材が崩落する危険な状態である。このような状況下にあって羨道部だけは比較的良好に遺存しており羨道部中程では川原石を積み上げた閉塞石が閉塞時そのままの姿を残している。

とりあえず、現状では単室両袖型の横穴式石室と考えている。略測では玄室主軸方位はＮ－５°－Ｗにあり南向きに開口している。現況で羨道部の全長は1.2m、幅は榧石の南で0.9mほどである。羨道部は中途で崖状に削りとられているので、現状よりもまだ少し長かったとみられる。石室の床面プランは南北に長い長方形である。奥壁から榧石までの主軸全長2.9m、奥壁側での幅2.2m、羨道部側では幅2.1m，床から榧石までの高さ1.2mを測る。

幸いにも調査当時の石室写真が残っており（図版37－a)、室内の旧状を窺い知ることができる。羨道壁は横長の花崗岩を２段積みしその上に榧石を架構している。玄室の西壁面は内方にむけて基底部からきつくの持ち送りが行なわれている。石室に使用された石材にはペグマナイト系花崗岩が多く用いられている。玄室床面には大柄な平石を敷いて礫床としていた。

4．出土遺物

古賀崎古墳からは種類豊富で、良質な多くの副葬遺物が発見されている。盗掘による被害をあまり受けていなかったために出土遺物が良好に遺存していたのでもあろうが、それを差し引いても余りあるほどの質の良さである。

以下それぞれの遺物について概要を報告する。

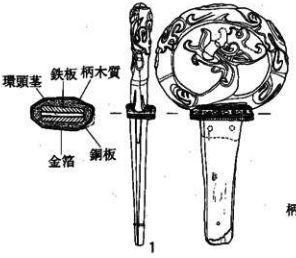
（1）武具

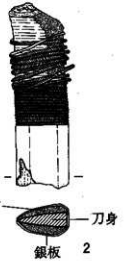
武具としては単龍環頭大刀が1振　大刀が3振、鉄鏃106本以上、故篠金具1対が出土している。

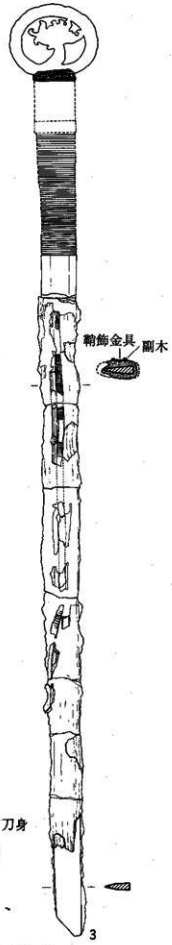
単龍環頭大刀（第66図、図版38）

柄部が一部欠損しているが、復元すると80㎝ほどではなかろうか。

環頭部は銅製の鋳造で鍍金によって仕上げている。遺物の遺存状況は芳しくなく、目から上顎にかけて一部破損しており、表面に緑青が浮き出しはじめている。環は幅7.2㎝、高さ5.7㎝の幅広で、環内には口を開いた龍頭が収められている。龍頭は直立し、開いた口からは小





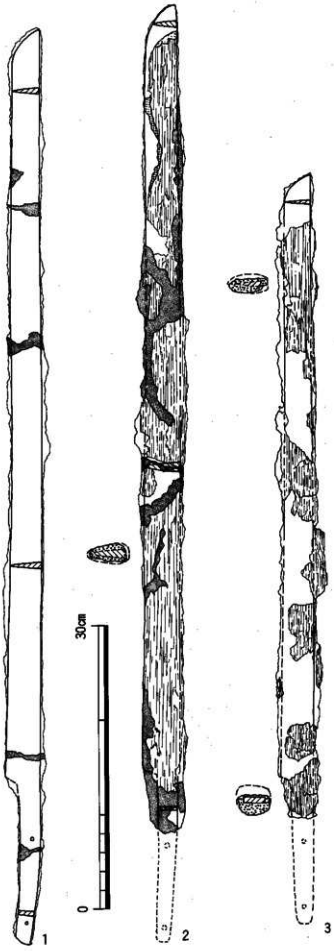


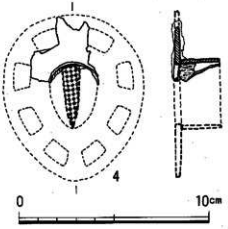
第66図　西堂古賀崎古墳出土単龍環頭大刀実測図（1、2は1/2、3は1/3）

さく舌を出している。冠毛のひとつと後毛は環にくっついている。環には2匹の龍が表現されている。龍の図像表現は環、環内ともに細部が簡略化されシンプルになっており、全般的に図像はややシャープさに欠ける。龍頭下には茎があるが、長さが1.5cmほどしかなく、短すぎて柄に固定しづらかったと見え、茎を長さ11cm弱、厚さ5mmの2枚の鉄板で挟み固定している。茎の長さを伸ばして柄に差し込んだものとみられる。

柄の小口部には銀が塗布され、環頭との接着をより強固にしている。柄頭の筒金具は失われているが、環頭下の責金具は残っており、朱文と菱形文が交互に繰り返し打ち込まれている。環頭は責金具に食い込む。柄握り部は刻みをいれた銀線を巻いている。鞐には銀板を用いている。

刀身部には鞘の木質が残っているが、表面は腐食が進んでいため保存処理が施された。鞘の表面は黒漆の皮膜が所々残っており、本来黒塗りの鞘であったことをうかがわせる。鞘表には金銅製の飾金具板が貼られる。金具には刻み目が連続して打ち込まれている。





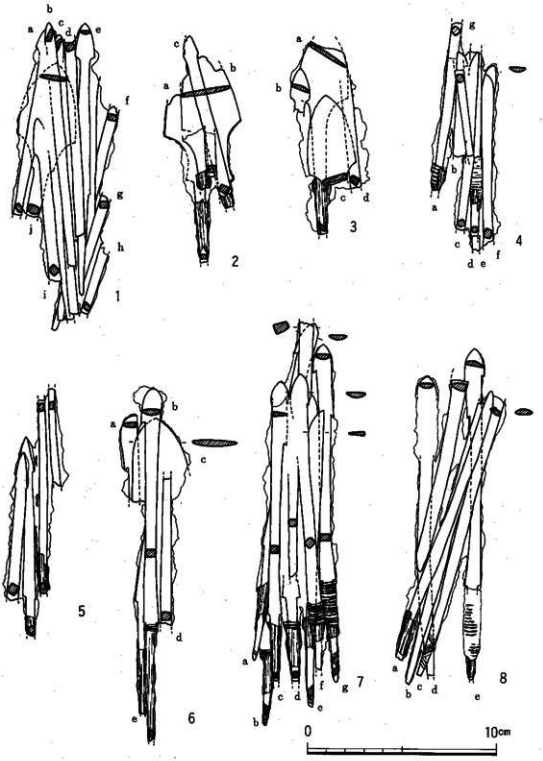
第67図　西堂古賀崎古墳出土大刀実測図（1、2、3は1/4、4は1/2）

鞘飾金具の両脇には並行して断面薄鉾形の副木を添わせる。鞘尻の形状は明らかでない。

大刀（第67図、図版39）

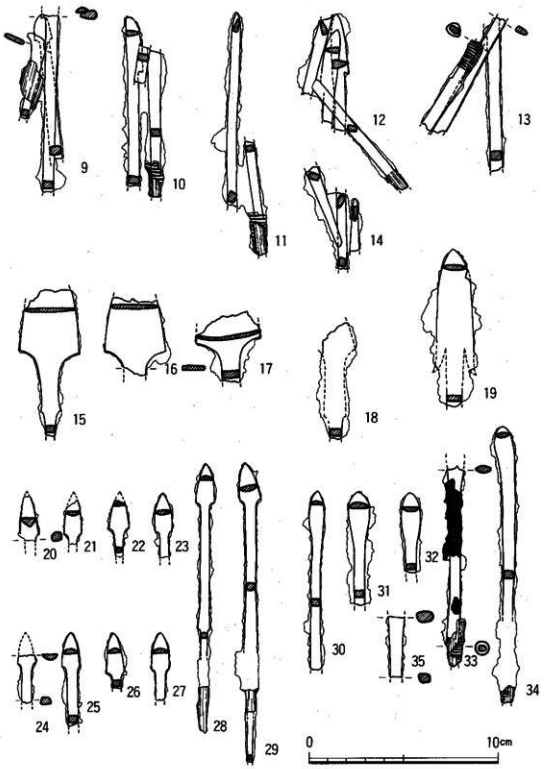
いずれも直刀である。2、3には鞘の木質が遺存している。

1は復元全長97.0cm、刀身長79.1cm、茎17.0cmを測り、身幅は中央部で8mmほどである。茎には目釘穴が2所に認められる。刀身に全く木質が遺存していないので、抜き身状態で副葬されていた



第68図　西堂古賀崎古墳出土鉄鏃実測図①(1/2)

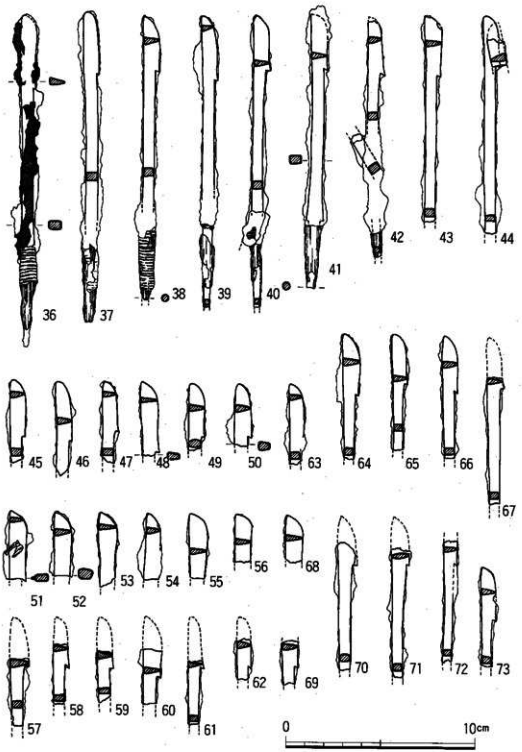
ものと考えられる。2は茎部が欠失している。現存長87.8㎝、刀身長81.0㎝、を測る。身幅が厚く、刀身中央部で9.5㎜を測る。3も茎部が欠失している。現存長68.2㎝、刀身長63.8㎝を測る。前記2振りに比べて刀身長が短く刃幅も薄い。3振りのうちではもっとも実用性を供えている。4は新たに発見された鉏金具と鍔で2者が錆着している。鉏内面には剝がれた刀の棟部と柄の木質が付着しており、棟の計測器は9.5㎜を測る。鞘口付近が欠失しているのは2のみで、棟幅の値も近似しているので、本来2に装着されていた可能性が高い。鍔面には長方形のスカシ孔がめぐる。



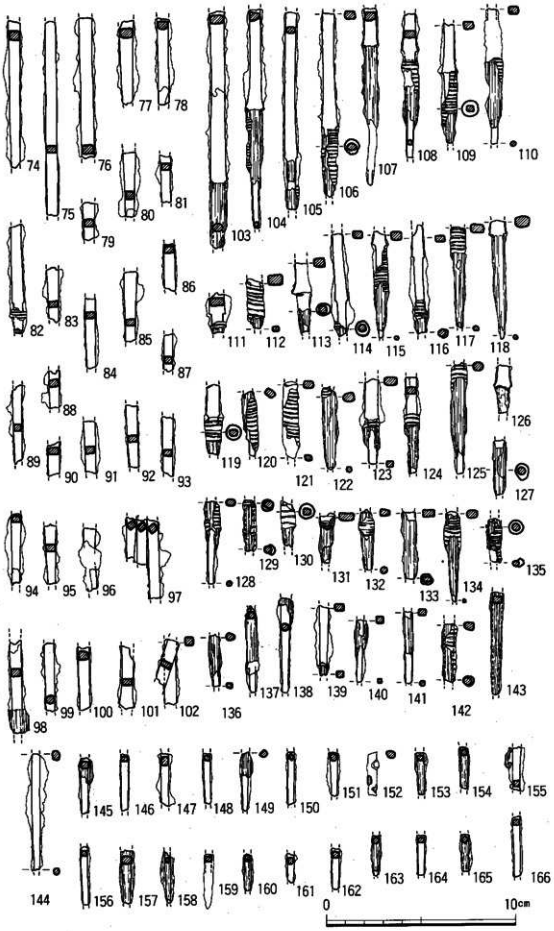
第69図　西堂古賀崎古墳出土鉄鏃実測図②(1/2)

鉄鏃（第68～72図、図版40）

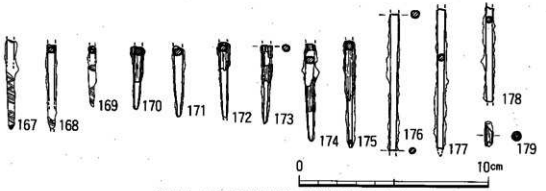
発掘後所在が不明であったもので、折損が著しく、刃部の数から106本まで確認することができる。後述する故籙金具が出土していること、33、36には粗い織りの繊維が付着し、1～14に顕著にみられるように密着したまま錆着していることなどから、故籙に納められた状態で副葬されていたものとみられる。



第70図　西堂古賀崎古墳出土鉄鏃実測図③(1/2)



第71図　西堂古賀崎古墳出土鉄鏃実測図④(1/2)



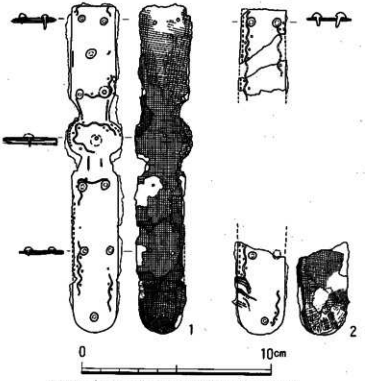
第72図　西堂古賀崎古墳出土鉄鏃実測図⑤（1/2）

古野徳久の分類基準（「古墳時代鉄鏃の編年」－北部九州を中心に－『九州考古学』第64号1989年）に基づき鏃身部の形態で分けてみると最も多いのがF類（片刃類）で67本、次にB類（圭頭類）で23本、以下C類（三角類）、E類（長頸類）と続く。F類の数が他の鉄鏃の数を凌駕しているのが特色である。また箆被部の形態については観察可能な資料46例のうち34例がc類、8例がd類に、4例がb類に属する。茎には矢柄の木質、樹皮が良好に残存しているものが多く、また7－b、e、g類では沓巻が遺存しているものもみられる。

故篠金具（第73図、図版39）

2個の金具が出土しており、1はほぼ完形であるが、2は中程が大きく欠失している。いずれも鉄地金銅張製である。1は全長17.2cm、図面上端は「コ」字形に、下端は「U」字形をなし、中央やや上に横長楕円形の円部を切り出す。金具の縁にはミシン目状の刺突文、その内側に波状刺突文、列点文の組合せが打ち込まれている。中央の円部では中心の鋲のまわりを波状刺突文、列点文帯がめぐる。中円部を境に上部では2－1－2の3列5個、下部では2－2－1の3列5個の飾り鋲が打ち込まれている。裏面には織りの細かさを異にする平織りの布が2重～3重にも重ね張りされているが、下端では金具の丸みにあわせて繊維を折り込み縒り縫って仕上げる。2も残存部位では同様な特徴を示しているが、欠失部位が多いため1と相似形態を有するのか否か即断は難しい。

田中新史による分類（田中1988前掲）ではBⅡ類（1対式中円部造り出し方吊手飾金具）の新段階に位置付られている。



第73図　西堂古賀崎古墳出土故篠金具実測図(1/2)

2．馬具

f字形鏡板付轡（第74図1～5、第75図10～15、図版36、41）

鏡板4枚、引手4本があるが　鏡板（第74図1）に接着した引手金具が、金具の残存長とのかねあいから引手壺（第74図の2）に接続するとみられること、銜金具は錆の進行状況から第74図3が接続する可能性が高いことから、第74図1～5を1組（セットA、以下Aという）とし、第75図10～15を鏡板に接続するもう一方のセット（セットB、以下Bという）と想定した。

Aのf字形鏡板は、全長は1が25.2㎝、4が25.1㎝、鉄製地板に鉄製縁金具を重ね、薄い金銅板を被せて縁金具裏に巻き込み、縁金具上に鋲を打ち付けて留めている。鋲数は1では総数80個、4では83個を数える。当資料で特徴的なのは銜先環の鏡板への取り付け方法である。銜先環の一方を突起状に曲げ、鏡板の中央に設けられた長方形の小孔に差し込んだ後、鏡板の内側で板金具を渡して鋲留めし、銜先環と鏡板とを鋲状に固定している。これによって銜先環は鏡板の表面に突出することなく、鏡板表面を覆った金銅板1枚が銜先環をも隠す。そのため引手は鏡板の裏側で連結している（第74図1の図中引手金具と鏡板との連結断面図は概念図である）。引手と別造りで瓢箪形の引手壺との連結には3連の兵庫鎖を介している。

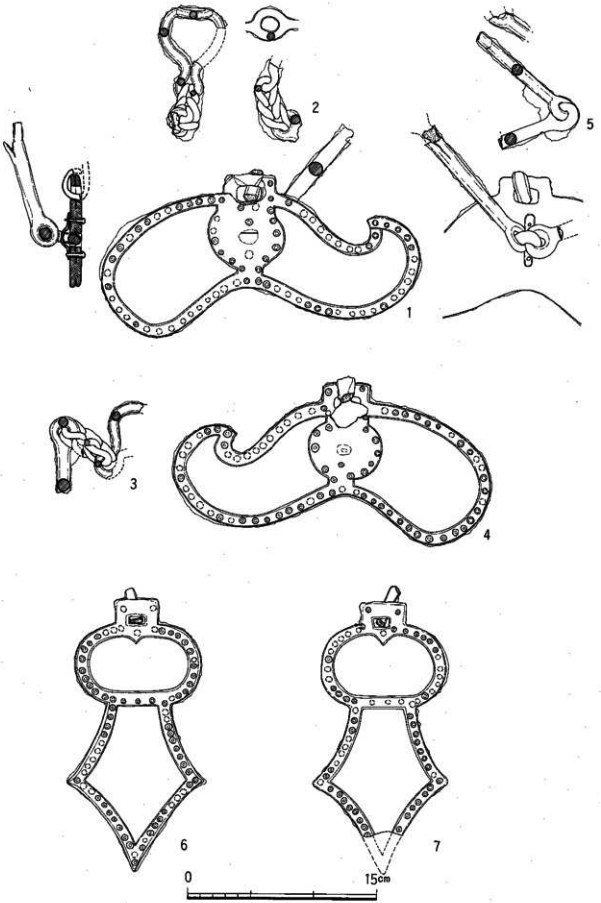
Bは遺存状況が悪く、特に鏡板は、全形を把握しきれないが、断片の状態から全長25㎝ほどと考えられる。製作方法はAと同じであるが、形態的にはf字の屈曲度はAよりも著しい。引手と鏡板との連結はAと異なり、引手は鏡板を介してその外側で連結されている。この資料で特徴的なのは引手と鏡板を連結する金具が鏡板クビレ部まで延びて鋲留め身ではなくその先端部を直接叩き曲げて固定している点である。銜先環と引き手とは遊環を介さずに直接連結されているように観察できるが、この連結方法だと、引き手に銜金具が引っ掛かり引手可動範囲が狭められ十分に稼働できないのではないかと考えられ連結部の構造復元には慎重を要する（第75図の図中引手金具と鏡板との連結断面図は概念図である）。引手と、別造りで瓢箪形の引手壺との連結には2連の兵庫鎖を介している。

素環鏡板付轡（第75図4、5、図版42）

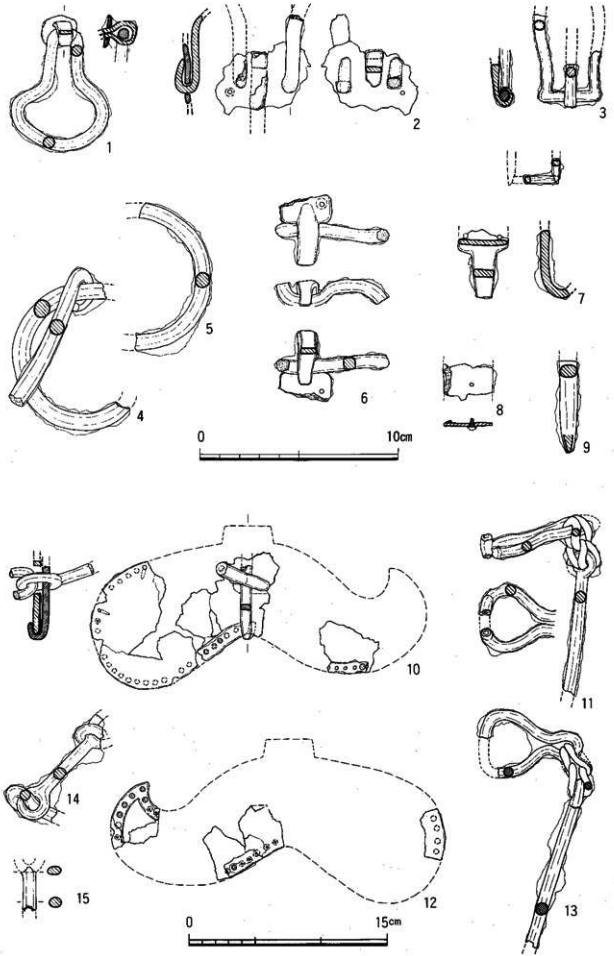
一対の素環鏡板付轡が出土しているが、いずれも欠損品で全形を知りえない。4では先端を捻りまげて鏡板と連結した引き手金具の一部が残る。鏡板の復元径は11㎝ほど。立聞の構造は現状では判断ができない。

剣菱形杏葉（第74図6、7、図版41）

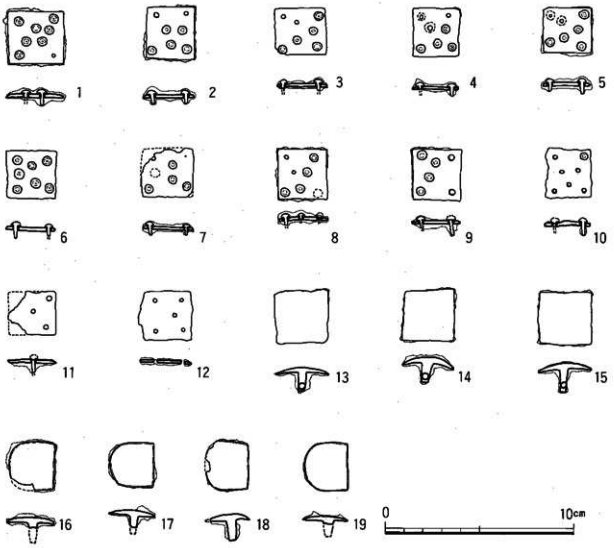
2枚出土している。6は全長21.5㎝、立聞高2.0㎝、楕円部幅10.0㎝、剣菱部幅10.8㎝、剣菱部長13.1㎝を測る大形品である。鉄製地板の上に鉄製縁金具を重ね、薄い金銅板を被せて縁金具裏に巻き込み、縁金具上に鋲を打ち並べ留めている。楕円上部には小さい逆三角形の突出が認められ、楕円と剣菱部との境にも縁金が渡してある。鋲は間隔を詰めて打たれており、杏葉周囲に69個、楕円と剣菱部との境に3個、立聞部に2個の計74個打ち込まれている。立聞部には釣金具片が残存している。7は推定全長21.4㎝、立聞高1.8㎝、楕円部幅9.9㎝、剣菱部幅9.9㎝、剣菱推定長13.1㎝を測り、6に比して若干楕円部が縦長めであるが、ほぼ同じ形態といってよい。各部位の特徴も共



第74図　西堂古賀崎古墳出土馬具実測図①(1/3)



第75図　西堂古賀崎古墳出土馬具実測図②（1/2、1/3）



第76図　西堂古賀崎古墳出土馬具実測図③(1/2)

通している。剣菱先端部を欠失しているが他部位の鋲間隔からみて計73～74個の鋲が打ちこまれていたものと推定される。立聞部には釣金具片が残存している。

鞍金具（第75図１、図版42）

１は鞍金具である。鈕具を二又の鋲で鞍に固定する。鋲の座金は鉄地を金銅板で覆っている。６角形をなす。

鈕具（第75図３、15、図版42）

１は上版部を欠損している。中央に軸部に巻き込んだ刺金の基部が遺存している。15は小形品の軸部残片である。

釣金具（第75図６、７、図版42）

６は鉄地金銅張りで鋲を残す。金具が巻き込んでいるのは引手壺であろうか。金具の使用個所に検討課題を有す。７は杏葉（第74図６）に接合する可能性が高い。

辻金具（第76図、図版42）

計19個出土しているが、形態上は１、13に代表される２種の方形金具（ａ，ｂ類）と16に代表される爪形金具（ｃ類）の３種に分類される。ａ類は金具の四隅に各１個、他に余空間に１～４個の鋲を打ち鋲を装飾の一部として利用したもの。ｂ類は金具の中心で１本の鋲で留めた後に金具表面を金銅板で覆ってしまうもの。ｃ類はｂ類と同様の造りをするものの、基本形態が異なる。

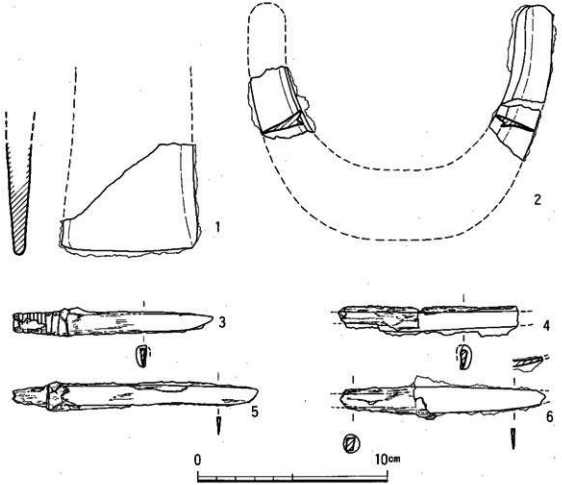
用途不明品（第75図、図版42）

２は鞍の鞦金具とみられるが、全形を把握できず詳細については不明である。鞍金具以外の用途を考慮すべきかもしれない。鉄地金銅張板に鉸具を直接差し込み裏で曲げて固定しているが、軸部刺金はない。８は鉄板片で中央部に鋲が打ち込まれている。裏面縁に一部革が付着している。９は棒状の金具で図面下部は先細りである。

（３）農工具

袋状鉄斧（第77図１、図版43－ａ）

刃部先端のみが遺存している。刃幅7.2㎝、刃先は鈍く丸みがある。袋部に過度の復元が施されているため内面の詳細はわからない。図示していないが袋基部の一部とおぼしき湾曲部を持つ鉄材



第77図　西堂古賀崎古墳出土農工具実測図(1/2)

片が1点確認された。

鍬鋤先（第77図2、図版43－a）

新たに2点の刃片が確認され、従来想定されていたよりも一回り大形品に復元してみた。刃幅は16cm。U字形刃先である。

刀子（第77図3～6、図版43－a）

4点いずれも木製柄、鞘の木質を良く残している。3は全長10.5cm、柄部に沓巻き痕が認められる。4は残存長9.5cm。刃先部、柄部ともに欠損がある。5は全長13.1cm。6は残存長10.8cm。両関造りである。

（4）装身具

金環（第78図1、図版43－b）

現在1点のみが遺存している。『古賀崎古墳』（1986）で紹介した3点の金環のうち左2点は西堂行政区内の他地点から出土した資料であることが判明したので訂正したい。1は銅地を金箔で覆っている。環径は長径2.9cm短径2.6cmを測る。断面は楕円形を呈する。

碧玉製管玉（第78図2～12、図版43－b）

11点が遺存するが、いずれも暗緑色を呈す。細形の造りで径は4.0mm～5.7mmとそろっているが、長さは10.5mm～18.9mmとばらつきがある。穿孔は片側、両側穿孔2種ともに認められるが。両側穿孔が大半を占める。

銀製空玉（第78図13～16、図版43－b）

4点遺存している。薄い銀板をまるめて中空の玉状に仕上げられており、径は5.5mm～6.5mmを測る。14、16では紐通し孔の他に表面に数個の小孔を認めるが、意図的に穿孔したものであるかどうかはわからない。

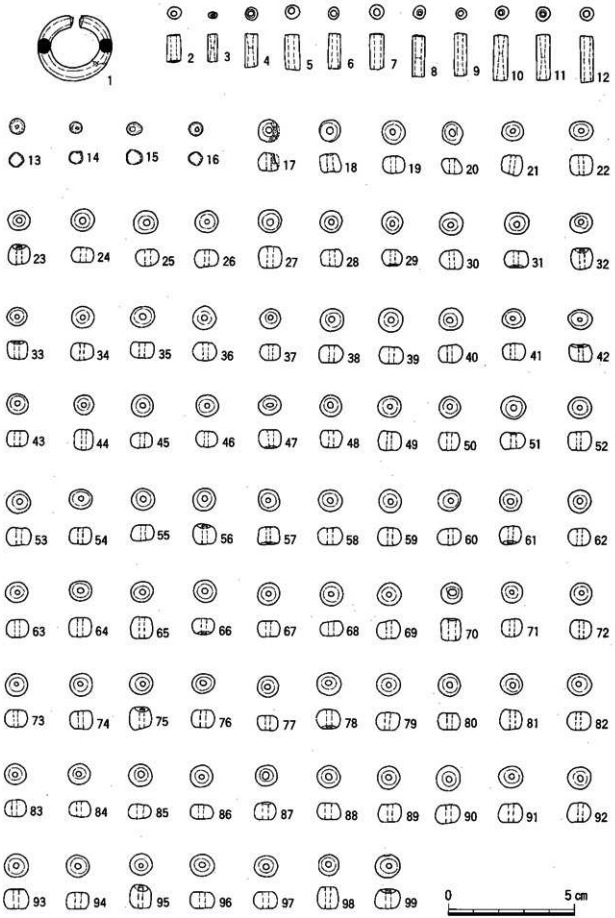
ガラス丸玉（第78図16～99、図版43－b）

85個現存するが、2点が破砕しているので、図示できたのは83点である。いずれも色はダークブルーを呈する。径は8.0mm～10.0mm、厚さ5.5mm～9.2mmである。

（5）土器

須恵器（第79図～第81図4、図版44）

現存する土器は須恵器17点、土師器4点の計21点である。紙面の都合上各資料の概要を紹介する大形器台(1)は器高55.6cm、杯部径32.4cm、脚高39.6cmを測り、脚高が高い。脚は7段の凸線帯で区画し、各区画帯を粗い波状文で埋め、半円形スカシを三方に縦方向に並べて設ける。また、上2段



第78図　西堂古賀崎古墳出土装身具実測図(縮尺2/3)

ではスカシ孔間に竹管文を施している。

器台付有蓋装飾壺（2）は壺高36cm、蓋高10cm、器台高13.6cmを測る。壺口縁 は受け部を持ち、胴部は若干肩の張る球形である。器台は脚部から受け部にかけて『く』の字状に大きく反転するもので、脚部四方に縦長の台形スカシ孔を設ける。器は蓋を被せた壺を器台に載せたまま焼かれており、器台は焼成時に偶発的に溶着したものである。蓋は天井部に2段重ねの子壺を付け(d)継部に刻み目帯をめぐらす。また蓋天井部に1条、立ち上がりと天井部との境に2条の刻み目凸帯をめぐらし、天井部凸帯下には波状文もめぐる。壺頸部は凸線によって2段に区画され、凸線上に6個の勾玉状の粘土粒が貼りつけられている。各段には2条のヘラ描き波状文がめぐる。肩部には1条の刻み目凸帯がめぐり、6個の勾玉が付く。この凸帯の上方に三角形に線取った粘土帯が6箇所に等間隔で配されている。隣り合う三角形粘土帯の頂部はヘラ描き波状文帯で結ばれている。

子持ち台付壺(3)は器高37.2cm、口縁径19.2cm、胴部最大径18.8cmを測る。広口壺の肩部に2個の鬼と3個の広口壺のミニチュアが貼りつけられ、壺胴下半部には擬格子タタキの上から間隔の広いカキメがめぐる。脚部は凸帯によって2段に区画され、四方に2段のスカシ孔がある。

4は蓋であるが、身は現存しない。糸島地方では5世紀の後半から古墳葬送儀礼において墓前の供献容器として用いられていた杯類は古賀崎古墳使用期においても、いまだ石室内に持ち込まれることが一般的ではなかったとも考えられ、この杯蓋は壺の蓋として石室内に持ち込まれていた可能性がある。

有蓋台付壺は脚部つくりと焼き上がりの違いによって2タイプに分けられる。硬質で脚部上半部には長方形、下半部には台形と2段のスカシ孔三方に設け、壺外面をカキメが覆うタイプ（7，8）と、焼成がやや軟質で脚部三方にに長方形1段スカシ孔が設けられ、壺外面はヨコナデで納めているタイプ（9）である。いずれも口縁部は受け部を作らず蓋に反りをめぐらすもので、壺胴下中央部にヘラ削りを施す。焼き上がりの類似点から7、8はそれぞれ5、6とセットをなすことが想定できるが、9の蓋は現存しない。

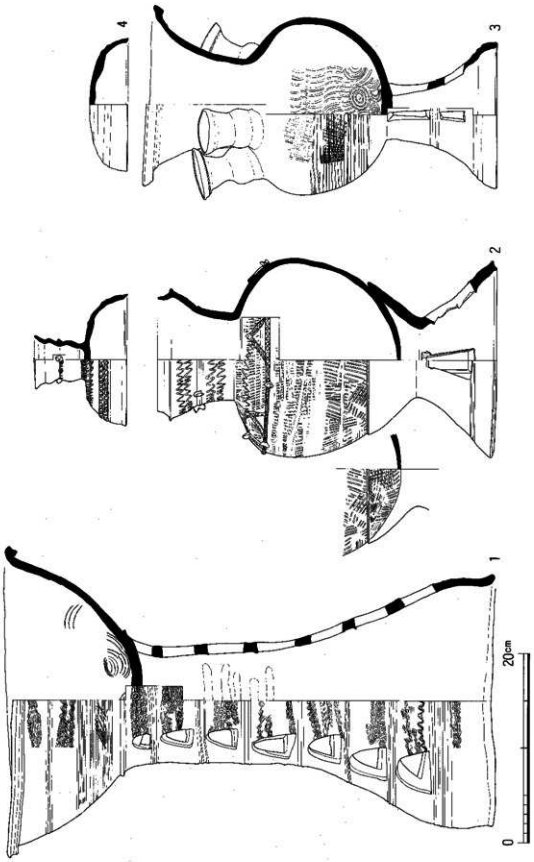
広口壺は4個ある。頸の長さは10、11、13、12の順に順次長くなるが、胴部の最大径に大きな違いは認められない。しかし7の胴部はほぼ球形であるが、8では若干肩が張り、9、10では明らかに肩部に張りを有する。頸部はいずれも波状文を施すが10だけがヘラ描きで他は櫛描きの波状文で、施文パターンはまちまちで、胴部の整形技法にも統一性は認められない。

鬼（14）は器高36cm、口縁径は12.8cmを計り、胴部径を凌駕する。口縁部はやや内湾しながら上外方開く。頸部上半部と口縁下部に刷毛目状の縦方向の条線を隣と少し間隔をあけながら描き、胴部には凸線帯に仕切られた胴最大径部に櫛歯による連続刺突文が一周する。また、底部はヘラ削りの後、カキメが施される。

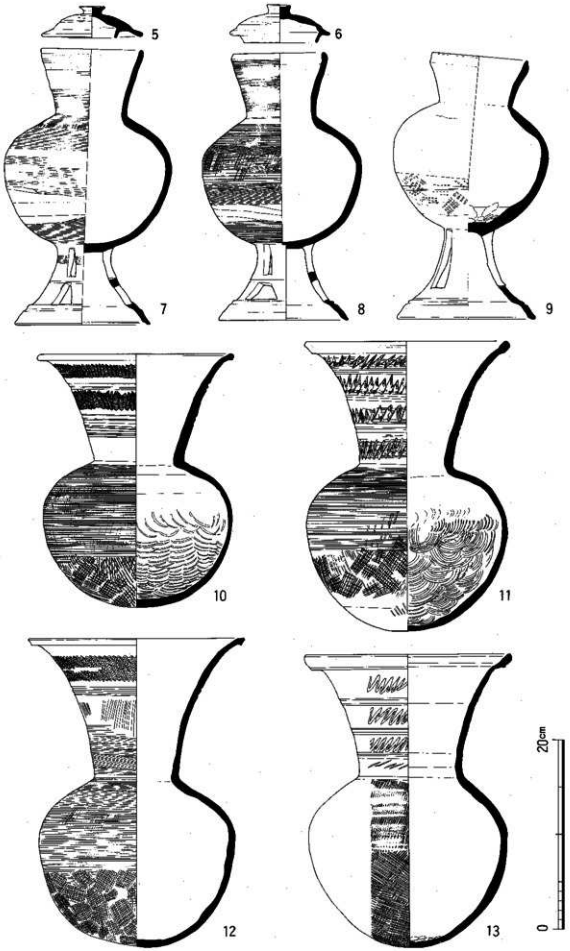
高杯（15）器高16.4cm、杯口縁径9.6cm、脚裾径8.8cmで、杯底部には櫛描刺突文がめぐる。脚柱部に刀子状の工具で細く切り込みをいれたのみのスカシ孔が、脚裾部では方形に切り取られたスカシ孔が、各々三方に設けられる。脚柱部にはカキメがめぐる。

短頸壺（16）は器高14.8cm、口縁径12.8cm、胴部最大径18cmを測る。胴肩部はかなり張り口頸部は大きくかつ短く外反する。

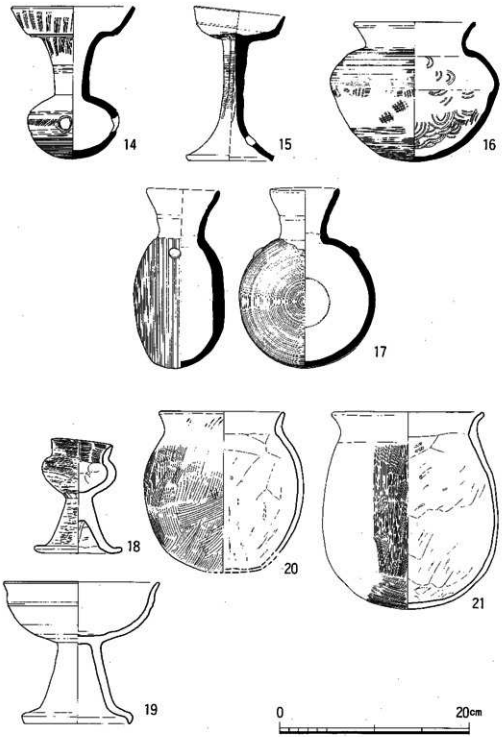
提瓶（17）は器高19cm、口縁径7.2cm、胴部最大径14.8cm、側面の径9.6cmを測る。肩部には把手の痕跡として径1.2cmほどのボタン状の粘土板が貼りつけてある。



第79図　西堂古賀崎古墳出土土器実測図①(1/4)



第80図　西堂古賀崎古墳出土土器実測図②(1/4)



第81図　西堂古賀崎古墳出土土器実測図③(1/4)

台付小形壺（18）は高さ12㎝。直口小壺に裾にかけてラッパ状に広がる脚部をつけ、表面に黒色顔料を塗った上から研磨している。器壁は全般に厚手で、小柄ながらどっしりとした重量感がある。焼成は良く硬質に仕上がっている。

高杯（19）は高さ15㎝、口縁径16.4㎝、脚裾径11.2㎝を測り、18と同様に焼成も良く硬質である。杯部口縁や脚裾部の形態から、須恵器高杯を模倣した土器であることが窺われる。

甕（20、21）はいずれも粗製である。21はやや胴長な形状を有す。

(5)おわりに

古賀崎古墳について現状を以下にまとめてみた。

墳丘

本文中でも述べたが、石室は現在の丘陵の西側寄りに築造されており、不自然な占地状況を示している。特に墳丘東部の墳裾が明確ではないので、現状では古墳の墳形を円墳と断定できる資料に乏しい。墳丘の形態や規模を明確にできるだけの最低限の確認調査を実施し、今後の保存整備に向けて基礎資料を作成する必要がある。

石室

両袖型の単室の横穴式石室である。玄門は羨道部にむけて横長の花崗岩を２段に積み重ねて袖部ならびに羨道部をつくり、玄室側では角張った花崗岩を架構して前壁を作っている。側壁は大きめの花崗岩切り石を積み上げている。玄室も横長の大きな切り石を積み上げて石室を形成する。石室は倒壊の危険性があり、早期に現況の測量図を作成するとともに応急の保存措置を講じる必要がある。

出土遺物

単龍環頭付大刀　表面の腐食が著しく、環内龍文の上顎から冠毛にかけて欠損しており決して遺存状態はよくない。龍文の細部はかなり簡略化されており、環内龍文では角と冠毛の一部は環にくっついているなど、新しい要素をもつ。新納泉の編年に従えば[註1]Ⅲ式からⅣ式への過渡期に位置付けられると考えている。

故籙金具　田中新史の型式分類ではＢＩｆ類に分類されている[註2]。金具の裏側に鋲留めされた故籙本体の布地繊維が良好に遺存していたので金具の装着状態を考える上で良好な資料である。故籙は麻質で粗い平織りの布地を幾重にも重ねて漆で固められている。金具の縁では布がほつれないように縢り縫いを行なっており、金具先端のＵ字形部分では折り重ねて縁の形態にあわせて縢り縫っている。金具と同幅の帯状部位の表飾品として使用されたとみられる。

馬具　ｆ字鏡板付轡金具は従来報告されていた資料（セットＡ）の他にもう一対の別の組（セットＢ）が発見された。断片での出土であるが、新たに発見された鏡板は前者に比べて若干小さめとはいうものの、大形の部類に属す。前者と大きく違うのは引手との連結法で、前者が鏡板の内側で連結するのに対し、後者は鏡板の表面で轡金具と連結する。型式的にはセットＢがセットＡに先行している。剣菱形杏葉とセットＡは遺存状態が良好で鋲の打ち方や縁金具の形態も類似することから同一期の副葬遺物と考えられるが、セットＢは遺存状態が悪く、型式的にも先行することからセットＡの前代に副葬されていた可能性が高い。つまりセットＡは追葬時の副葬品と考えられる。その他の馬具としては新たに素環鏡板付轡金具、鞍金具などが発見されている。

土器　装飾性に富み、仕上げの丁寧な優品が多いのが特徴である。しかし、葬送儀礼用の異形品であるが故に型式の設定が難しいといえる。土師器高杯はＭＴ－15型式[註3]須恵器の無蓋高杯のプロポーションに似ている。台付小形壺も同系のものでは古式にあたる。いずれも表面を研磨し、漆状の黒色顔料を塗っている。須恵器では器台付有蓋装飾壺が注目される。壺に溶着した「く」の字状に屈曲する器台は旧伽耶地域の陶質土器の器台特徴をとらえたものである。当壺が陶質土器である可能性を有しているが、彼の地において当壺に類似する表飾を加えた土器があるのか十分な調査を行

なっていないため、今後の検討課題である。台付壺では脚部が2段スカシ孔の3、7、8が1段スカシ孔の9に比べ型式的には後出的ではあるが、これが即時期差を有するものか判断が難しい。その中で型式変化のなかで変遷を追い易い杯蓋はTK－10型式並行期の特徴を示し、提瓶は肩部把手がボタン状の痕跡まで退化しており、須恵器は大まかにいえばTK－43～209型式のなかにおさまると考えられる。

古墳の築造時期と被葬者　出土した土器から遅くともTK－10型式並行期には古墳が築造されていたということになり、少なくとも1回の追葬が行なわれていることは明らかである。このことは副葬時期が異なり型式的にも異なる2組のf字形鏡板付轡金具が出土したことにも裏付けられる。これらf字形鏡板付轡金具は同型の一群でも最も新しい部類に属することが宮代栄一氏によって明らかにされており、並行する須恵器も氏の年代観に添うものである。

当古墳石室の特徴は玄門部の造りにある。直方体に近い花崗岩の切石を主軸に並行して横たえ、2段に積み重ねてその小口を袖部とし、その上に楣石を載せる構造をとる。この切石側縁は羨道壁を兼ねている。これと同様の構造を有する古墳として、糸島では荻浦砂魚塚古墳、荻浦石川1号墳例があり[註4]、いずれも築造は出土須恵器からTK－10型式並行期に位置付けられていることから、当古墳出土須恵器とも矛盾はない。

これらのことから本古墳は概ね6世紀中ごろに築造され、同世紀末まで追葬が行なわれていたものと考えられる。この古墳築造期は本書で報告した西堂四反田古墳群、井原作出古墳、末永高木古墳など、旧来の地域首長墓が破壊の憂き目にあった時期に奇しくも符合する。本墳の被葬者は当該期にこの地で繰り広げられた新たな支配体系の構築に向けての社会的な動きに深く関わっていたことも十分に考えられ、それが伴出した豊富な武器に表れているのかもしれない。その詳細についてはこれから本墳の墳丘構造や周辺における当該期の集落、墳墓遺構の調査が進み当時の様相が明らかになるにつれて解明されるものと考える。

西堂古賀崎古墳は、従来知られていたより以上に豊富な副葬遺物を有する古墳である。しかし本書ではその現状を報告するに留まった。それは時間と紙面の制約それと何よりも筆者の浅学によるところが大きい。今後も継続的に調査を続け更なる資料の充実化を図り、本墳の歴史的意義を探るとともに当地における古墳時代研究の進展に向けて精進を期したい。

註1　新納　泉「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号　史学研究会　1982年

註2　田中新史「古墳出土の故鏡・靫金具」『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』 1988年

註3　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年

註4　1993年に前原市教育委員会が発掘調査。現在報告書作成中